
並行世界のディストピア

I.st

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並行世界のディストピア

【Nコード】

N9795V

【作者名】

l . s t

【あらすじ】

西暦2038年に月で発見された古代超文明遺跡（実は月自体が遺跡）からテクノロジーを得て、地上においてバトルシップクラスと呼ばれる最強の実験被験者兵士が、ある日別世界（まるでヨーロッパ中世時代であり、魔物が済む世界です）に突き落とされ、奮闘する物語です。

本作品は、かなり違いがありますが、アリーさんの「魔界の雷帝」のイメージで書かれていますので。もし、アリーさんが、著作権に

ついて問題提起したら、削除します。

ブログ（前書き）

不具合か？

ブログが紹介分になっていて、確認したのにやっぱりおかしくて、なんだこりゃって違うルートで編集したら直った。

むむー、許せん！

プロローグ

西暦2036年、日本企業が資源を求めて月へと進出し、2年が経過した2038年、500mほど地面の掘削を行った時、その存在が明らかになった。月は、人工衛星であったのだ。そして月の中の遺跡は、未知の技術のオンパレードだった。そのような地球人類が未知との遭遇を果たしたとき彼ら（宇宙人）の存在はすでに無く、彼らの創ったものであるう遺物だけが彼らが存在した証しとなって残っていた。発見したのは、日本企業だった。その企業の報告を受け日本政府が本格的に調査を始めたのは、それからわずか一ヶ月後だった。最高責任者として、日下部雅之が陣頭指揮を取った。

年代測定された結果、彼らは約5億年前に太陽系から去ったことが明らかになった。当初これらの情報は、日本と同盟国アメリカにのみ伝わり、極秘情報となるはずであった。が、ことは人類の未来を変えるものである。日下部雅之は、なんども討論し、折衝し、検討し、部分的に開放していきこうということで日米の合意とした。西暦2040年のことである。

日下部雅之は彼らの遺跡を発見した年を用い彼らを2038と呼ぶことにした。

宇宙人の残した映像や文字らしきもの、なんらかの未知のデータやパーツ等、西暦2041年、それらを解読する為に人類の全ての叢知が傾けられた。複数のスーパーコンピュータによる解析、数学者、物理学者は言うに及ばず、天文学者、占い屋、暗号学者、冒険家、民族学者、等々数え上げれば切りが無い程の職種の人たち。彼らの知恵を使って文字通りの総力戦である。

その結果、西暦2051年、10年余の歳月を得てようやくある程度の解読に成功したのである。人類は未踏の極地の科学力を得ることになったのだ、そして第三次産業革命の到来となり、更に希少ではあるがミュークボックスと呼ばれるブラックパーツを用いること

によって物体の質量を自在に操作できることとなった、それも天体レベルでの操作である。結果人類は長年宇宙進出を困難な物にしてきたインシュタインの相対性理論の呪縛からの開放により宇宙大航海時代の到来をも得たのである。

第一話 最強の兵士

黒沢明人は職業軍人であり、士官候補生でもあった。この戦線から後方へ移動すれば准尉への昇格が約束されていた。後方と言っても一時のことである。准尉に昇格後、準備をして特殊任務につく予定になっていた。

西暦2080年、大航海の出発地火星で起こった地球政府と火星政府の内紛が原因の戦争は、すでに2年に及んでいた。開戦時、多くの職業軍人が遂に栄誉を与えられる機会を得たことに大いに歓喜している中、明人は複雑な気分だった。つまりは人を殺す機会と権利を待っていた訳だ。まあ軍人だし、それが仕事なのだから別段否定をするつもりは無い、という経緯で入ったにしろ結局は、自分もその口なのだ。

黒沢明人は、普通の10桁の識別番号とは別にA1というコードネームが与えられていた。それは第一被験者を意味していた。黒沢明人は、DNAが一般人とほんの少し異なり、2038の遺伝情報を色濃く受け継いでいた。2038は生命に干渉していたのである。そして、それは鍵であり、彼は2038の残した遺産を操る能力を持つことを意味していた。彼のような選ばれた民とも言える存在は、今解っているだけで世界で100人といない。そして軍人としての存在は彼だけである。また、2038の遺産を操れる能力以外に潜在的な能力を持つことが多い。内容は様々らしいが黒沢明人は、電気をあやまれるのだ。

黒沢明人の所属する第12歩兵師団所属前衛第211部隊所属1番隊フォックスロット1、12人編成部隊は敵車輛部隊を視認できる距離にまで近づいていた。彼らのヘルメットにつけられたカメラから座標が特定されレーザーによってロックオンされていく、マイクに向かってリオ・カールネン中尉が「オールグリーン」と呟いた。

リオ・カールネンは、黒沢明人に囁いた。

「敵将兵は見えるか？」

「全装甲車をスキャンしたのですが、見当たらないですね」

「そうか…。よし作成続行だ。やぶ蛇になったらとつとと逃げるぞ。各員撤収準備」

リオはそういうと、マイクに向かって呟いた。

「放て」

刹那、敵陣が閃光に包まれた。

戦車や装甲車が赤く輝きどろどろと溶けていつている。衛星からの高出力レーザーによる攻撃である。

3km以上離れているのに熱を感じる程の熱量だ。

さつそく次の行動に移らなければならぬ。念のため、敵の指揮官が死んだか馬鹿でないかぎり、素早く後方にさがらなくてはならぬ。いからだ。というのも衛星の攻撃詳細から視覚計算され我々の位置は敵にすぐにはれるのだろうと予測されるからである。尤も敵が残っていたら話だが…

しかし、不運というべきか、予想外と言うべき事態が起こった。地中から次々と戦車と装甲車があらわれたのだ。事前に衛星で調べた情報と違うのは当然であったか。兵装も近代的だった。

黒沢明人はリオ・カールネンを見た。リオ・カールネンは悩まなかった。

「撤収！体力有る限り走れ！」

黒沢明人は、敵車両隊後方から数発のミサイルが衛星に向かって飛んでいくのが見えた。

進軍の途中、何箇所かに隠れ場を確認しあっていたのだが、今回のミッションは、やぶ蛇にも程がある。衛星は恐らく使えない。このままではすぐにも追いつかれる…。

残念ながら我々の持っている武器では、戦車は疎か装甲車も止められない。捕虜になるのは誰一人望んでいなかった。だが我々にはA1が付いているのだ。それは幸運以外の何ものでも無かった。

リオ・カールネンが走りながら叫んだ。

「明人、何か手は無いか？」

黒澤明人は、ちらつと空を見て、少し悩んだ後、言葉を紡いだ。

「ここは俺ひとりで大丈夫です。他の人を逃して下さい」

「すまん、恐らくお前にしかやれない、我が軍最強の兵士のお前にしかな。頼むぞ。すぐに増援が来る。我々もお前を見捨てない」

リオ・カールネンや他の仲間達は、黒澤明人のヘルメットを軽く叩き、生きて後方で会おうと誓い合った。

精鋭の彼らがA1に希望を託したのだ。彼らは知っていた黒澤明人が普通と余りにも違うということをも。

A1の能力の凄まじさを。

黒澤明人は酸素マスクを外し、バックパックを落とした。

10年以上前からテラフォーミングを行っている最中だが、酸素マスクを外しては普通だったら5分と掛からず死亡してもおかしくない。だが明人の顔に苦悶の表情が無い。肺と気道がものすごく痛い。念の為機動性を考慮したのだ。

バックパックに覆われていた背中にブレードの鞘（にしては反りが無いが）が姿を現した。

少しの間を置いてドンと音がした。敵戦車が主砲であるレールガンを放ったのだ。距離2kmで誤差10センチの主砲だが、人に向けて撃つものではない。しかし、この不毛の大地で生命維持装置を外して平然としている黒澤明人に何か不気味なものを感じたのだ。報告にあつた兵士かも知れない。敵大将のグラーツェン・ウィック大佐は、迷わず砲撃を指示したのだ。だがレールガンによって撃ち出されたタングステン製の重く硬い弾というより短い槍は、明人にぶつかる寸前で何事もなかったように、カランと音を立てて地面に落ちた。

戦車に乗っていた敵兵員は瞠目した。主砲が効かない…。すぐさま上司に報告を入れる。

「弾が弾かれました」

「何馬鹿なことを…。と言いたい所だが、現実のようだな…」

そうしている内に黒沢明人は、鞘から葉莖の無い弾を取り出し、奇妙な反りの無いブレードを抜き払った。

ブレードの上はもつと奇妙で、円形の溝が掘ってあった。

明人は、その穴に弾を1発装し、左手で支え右手を肩当たりにも構えた。

「あいつは何をしようとしているんだ？」

戦車の操車手が疑問投げつけた。

その直後、ドンと重い音とガツという弾を受けた方の音がほぼ同時に響き、1両の戦車の内部で高温のプラズマが発生した。そして火薬に引火、大爆発を起こした。

それを合言葉に戦車が次々爆発する。装甲車は、機銃を打ちまくりながら後方へと下がっていく。戦車はそれよりも速く後退していく。これがA1である明人の能力だ。体に触れようとした危険な物質の質量を自由に操り、更に慣性すら操れるのだ。今も大量の弾が彼の周りにゴロゴロと落ちていく。

質量が0の物質は、エネルギー量も0である。つまり恐怖足りえないのだ。一旦質量0になり慣性が消えた戦車の弾への干渉を止める。すると元の質量を取り戻し、地面に落下する。実は明人の体内には高価で希少なミュークボックスが埋め込まれているのだ。本来なら巨大な宇宙船に搭載するしるものである。

そしてもう一つ、彼が本来持つ特殊能力である電気を操る能力である。明人は、ブレードの背に弾丸を置き高電圧をかけて世界最小のレールガンを実現したのだ。

諜報部から聞いていた。戦艦クラス的能力を持つ兵士のことを。彼らはそれをバトルシップクラスと呼んでいた。

「本当に存在していたとはな…」

敵司令官は、しかし冷静だった。

「しかし我々にも攻撃衛星がある。いかな能力を持っていようとレ

「レーザーの光熱は避けられまい」

彼は、間もなく上空を通る衛星を待っていた。

敵は無尽蔵に弾を打ちながら下がっていく。

黒沢明人は悩んだ。

「さて、どこまでやるべきか…。引くべきか？」

ん？…やはりと言うべきか、敵にも攻撃衛星があったのか」

そう呟いた瞬間のことだった。視界がホワイトアウトした。

熱線、それもかなりの高出力だな。黒沢明人にとっては驚異では無いのだろう、まるで他人事のように冷静だった。

黒沢明人の周囲がレーザー照射から0.1秒後に5000度に達した。地面がぐつぐつと煮えたぎる。

戦艦並みの耐圧耐熱構造をもっている黒沢明人の体をもつてしても、髪は一瞬で燃え尽き、皮膚も溶け始め、肩の強化骨格の一部が露呈した。

しかし、直後、光のシャワーはベクトルを変え、敵陣営へ向けて放たれた。

重力場を作り空間をねじ曲げ、レーザーの軌道を無理やり曲げたのだ。

そして黒沢明人は敵司令官の位置を把握していた。つい先ほど無線内容からスキャンしていたのだ。

グラーツェン・ウィック大佐は声を発する間も無く指令車ごと溶解した。

黒沢明人は、その場で立ったまま撤退する敵を見ていた。俺を殺すにはバトルシップが必要だろう。

実のところ黒沢明人は、敵の攻撃衛星の存在をしっていたうえに自身の2038の中型衛星を待機させていた。敵司令官を索敵したのは2038の衛星である。この衛星は、今のところ人類には破壊不可能であり発見することも不可能である。更に強力過ぎるレーザーをも搭載していた。

あらゆる意味で敵が彼を倒す方法などなかったのだ。

溶けかかった皮膚は、早くも再生を始めている。ノーメンテナンスと呼ばれる技術だ。あらゆる物を元の状態に戻す。これも明人に与えられた能力だが、これはもはや高価だが一般的な技術である。

黒澤明人は、生命維持装置を回収すると、装備し回線を開いた。

「こちらフォックスロット1、黒沢明人。敵は退却を始めた模様。現在地は、…だ。回収を求む」

「こちら、エリーズ空軍基地、了解しました」

潜入、襲撃を得意とする特殊強襲部隊の活動が活発化している。そしてそれは良い結果を残している。しかし今回の場合はA1が入っていた為最悪の事態を免れたのだが、敵が特殊強襲部隊をターゲットに置いていた可能性のある事態も増えている。

それにしても一作目であるA1の能力の高さ。正しく化物である。

A1でテストを行ないうまく行けばA2以降の量産型を開発することが地球政府の最終目標だが、技術者にとってはそんなことはどうでも良く、A1の能力アップが最重要課題だった。惜しみなく最先端技術が詰め込まれていく。というより技術者に玩具を与えたようなものである、という方が正しいか。彼らは遊び感覚で最強の兵器（兵士）を作り出したのである。実際のところ2038の遺産を自由に操れる者が余りにも少ない為、A2の開発には消極的でありA1に固執する理由もあったのである。

第二話 ラプラス・カリキュレーター

黒澤明人専属主任技術者であるリリス・クラープスは、一般にラプラス・カリキュレーターと呼ばれる2038の遺産をA1に組み込む検討をしていた。

大掛かりなカスタマイズであり、脳の改造も伴うので失敗した場合のリスクが高い。正直最初は悩んだのだが、成功事例がある（失敗は悲劇に終わるが）ので是が非でも試したいと思っていた。リリスは、早速カスタマイズの許可を申請する上申書を用意した。上司は上申書を受け取り、しばらくした後、「必ず成功しろ」と条件付きで組み込みの許可を出した。リリスは内心飛び上がって喜んだ。リリスにとって黒澤明人は、黒澤明人ではなくあくまでA1なのである。ただし、彼に対して多少なりとも好感を持っているのもまた事実である。

黒澤明人は、人為的に脳の集中力を高める訓練を受けていた。これは一般に命の危機にさらされた時、人が本来持っている能力である。いわゆるスローモーションに見えるという能力である。黒澤明人はそれをいつでも自由に行うことができるようになってきていた。

ラプラス・カリキュレーターは、未来を予想する技術である。現在の成功事例では、0.2秒先までの未来を予測できている。0.2秒は少ないと感じるかも知れないが、銃の弾を避ける程度であれば十分な時間である。ただし、体が最適に動けばの話だ。その為の訓練である。

更に黒澤明人の筋肉は、殆ど全て2038の遺産である人工筋肉に交換されている。いくつかの制御可能なリミッターを搭載し、日常や、戦場下で不便が無いように配慮されている。その気になれば軽く50トンの鉄の塊を投擲出来るほどの力を出せるのだ。今までのところ実戦でそこまで力を使ったことは無い。試したことはあるが、普通ならバランスを取るのが難しいところだが、そもそも黒澤明人

は物質の質量を変えることができるので、その問題はクリアーできた。持ち上げる時だけ軽くすれば良いのだ。

一週間の身体検査を終え、いよいよラプラス・カリキュレーターを埋め込む作業が行われた。黒沢明人の体は、殆ど機械化されているので、通常の人に埋め込むほどのリスクは無い。しかし、それでも作業は10時間に渡って行われた。脳の手術が最大の難関だったのだ。黒沢明人は脳も人工のものに置き換えられているが、その精密さは普通の脳と変わらない。失敗すれば障害が残る可能性がある。

黒沢明人は、夢を見ていた。戦場で流れる血、血、血。彼の両手は真っ赤な鮮血で染められている。特殊任務などで銃を使えない場合、素手で敵を殺す事が多かった。ボディーマー越しに手刀で心臓を貫く、それも一瞬で複数名を殺害する速さで。

次に幼少期の記憶が蘇ってきた。どうやら両親はとつくに気づいていたようだが電気を操れる力に自覚を持ったのは12歳の時だった。学校で喧嘩をし、ナイフを持ち出した相手を電撃で黒こげにしたのだ。当然大騒ぎになった。喧嘩相手を即死させたのだ。その報告は、学校からいくつかの部署を経由し、軍の特殊技術開発課に報告された。すぐさま特殊技術開発課の職員が更生施設に入所していた黒沢明人の元へとやってきた。両親も一緒だった。それらの情報はすでに聞いていたが、若干緊張を感じていた。

面会室は、明るく清潔な感じで、小さな部屋ながら圧迫感はない。黒沢明人は本の少し悩んで適当な椅子に座って両手を組み、うつむいた。ちょうどその時外へと通じる扉が開き見たこと無い男女と両親が姿を現した。扉は閉じるとロックされた。まず母親が話しかけた。

「どう、大丈夫？嫌なことは無い？」

俺はどう答えたのだろう、夢が曖昧になった。

次の記憶は、軍の特殊施設だった。

若い美人の軍医が「DNA鑑定の結果、貴方は特殊な遺伝情報を持

っていることが判明したの」と言った。はっきりと記憶に残っている。

「電気を操る力というのは、今まで見たことないけど、遺伝情報の成す業だと思えます」

俺は両親を仰ぎ見た。二人とも涙を流していた。

軍医はこう言った。

「あなたには軍の特殊施設に入ってもらいます」

「じゃ、僕は軍人になるんですか？」

素朴な疑問であった。

「そうとも限らないわ。適正次第だし、貴方の意志は尊重されます。ただし、今までのような自由はなくなります」

父は宇宙軍に所属し、今では引退生活を送っていた。

軍隊も悪くない。そう思った。

「じゃ、軍人になるかな」

黒沢明人は、簡単に答えた。

彼の父は寡黙な男だったが、唯一感情を出すとすれば表情だろう。

彼の家族はみな彼のそんな癖を熟知していた。彼は一体何を思ったか、彼は苦渋の表情を作ったが、黒沢明人の視界には入っていないかった。

黒沢明人は、未練がましく両親に甘え、やがて吹っ切った様に特殊施設への入所を快諾した。

暫く更生施設でただ日が経つのを待った。

次の思い浮かんだのは、特殊施設での記憶であった。

施設では、能力の制御の仕方、使い方を学んだ。そして2038の遺産についてかなり詳しい説明がなされた。

「貴方は、2038に選ばれた人間です。貴方は、2038の鍵を持っていきます。それを使いこなしましょう」

そこで意識が途切れ、暗転し、気がついたら光を感じて目を覚ました。

リリス・クラープスは、黒沢明人の顔を覗き込んでいた。

「どう？調子は？」

黒沢明人は、黙って自分の体をスキャンした。かすかな異物を感じたが、意識が向くと直ぐに馴染んだ。精神状態も悪くない。

「どうやら問題無いようです」

黒沢明人は答えた。

「そう、良かった…」

リリスはほっとしたように息を吐いた。

初めてラプラス・カリキュレーターを発動させた時、眩暈にも似た異様な感じに襲われた。まずは慣れることを中心にカリキュラムが決められていた。

異様な感覚を一週間も体験した頃、ようやく自分に何が起きているのかわかるようになった。

そしてようやく眩暈を感じなくなり、次の段階に進んだ。

次の段階はいきなり過激だった。黒沢明人だからできるカリキュラムである。

一人の熟練の兵士がアサルトライフルを構えて50m先に立っている。

意識を究極まで集中させ、ラプラス・カリキュレーターを作動させた。全てがスローモーションになり、兵士が銃を向けるのをまじりと待った。そしてようやく兵士が銃を撃つという流れの中で弾が発射される瞬間がいつかが感覚に訴えかけてきた。そして弾が発射される一瞬前に弾の弾道が解った。その為、黒沢明人は、弾がライフルから射出される一瞬前にすでに動作を始めており、体を軽く傾けるだけで弾を避けることができた。

兵士は、驚いたように2射目を発射した。それもさりげない動作でかわされる。

「次は連射で試しましょう」

リリスである。彼女の目は輝いていた。

タタタタ……。兵士が黒沢明人に向かってアサルトライフルを連射した。しかしこれはいくらなんでもよけられまい。

がしかし、黒沢明人は、それすらもさりげない動作で全てかわした。兵士は驚嘆した。信じられない思いである。

それは黒沢明人にとっても驚きだった。なるほど一瞬前に未来が解る。0.5秒か、そこらだろうか。

後でビデオ録画で取った映像を元に検証すると、0.5秒前に未来を予知していることが解った。相性が良かったのだろう。最高記録である。

そして新たな事実も判明した。まだあまり解っていないラプラス・カリキュレーターの機能は視覚に作用するのでは無く脳に作用するのだと。つまり、背後の目の届かない場所からの未来をも予知できるということである。ただし、これは黒沢明人の特性であり、また、無意識化で情報が選別化されるようである。

この情報は、上司に大いに気に入られた。カスタマイズの成功だけならず新たな実験報告も伴ったからだ。2038の遺産の情報は何もかもかなり貴重な情報なのだ。

ところで黒沢明人は、一見普通の肌に見え、触ってみても普通の人との違いが解らないが、宇宙戦艦の装甲並みの強度（耐圧、耐熱）を持っていて。そんな彼にラプラス・カリキュレーターは必要なのだろうか？結論から言うと必要である。何故なら避ける分には受ける分のリスクを遙かに凌駕するからだ。当たって見たらデスフラグが立ちましたでは話にならないのである。今のところ黒沢明人を殺せる兵士も兵器も存在しないが世の中何ががあるか解らない。

施設での調整や実験、訓練等は二ヶ月に及んで行われた。最後の2週間は特に濃密で気合の入るものだった。黒沢明人と彼の所属する特殊強襲部隊のチーム仲間で協調訓練が行われたのだ。この訓練では黒沢明人をいかに上手く協調するかが研鑽された。

いよいよ軍に戻るころである。施設、最後の日、明人は親しい施設

のもの達と仲間と共に晚餐を開いてもらった。

第二話 ラプラス・カリキュレーター（後書き）

話がなかなか進まない件、ごめんなさい。
次回こそバトルです。そして…

第三話 有り得ない敵

黒澤明人は、西暦2080年4月16日をもって准尉に昇格した。そして翌日4月17日。エリーズ空軍基地横の陸軍簡易施設において陸軍・空軍の士官のほぼ全員が揃い。広い会場でブリーフィングが行われた。7日前地球から最新鋭の軍艦26隻、空母7隻、巡洋艦107隻、駆逐艦248隻からなるさして大きくは無いが強力な制圧力がある艦隊である第43地球艦隊が到着し、またたく間に火星周辺の宙域を完全に制圧した後、火星軍の支配する北半球の広域に渡って、バンカーバスターと呼ばれる地下施設を破壊する爆弾142000発が成層圏外からばら撒かれそれぞれの確に目標へ落ち、火星軍施設に致命的ダメージを与えた後、空母7隻からそれぞれ24隻、計168隻の強襲揚陸艦がパージされ火星の大気圏に突入し、大地に強制着陸した。戦車8400輛、装甲車42000輛、フル装備の歩兵80万人余、他兵站装備等々、を火星大地へ送り届けた。合わせて陸軍戦車1951輛、装甲車4215輛、歩兵48万人余も戦線を整え、一斉攻勢へのカウントダウンが始まっていた。一連の確認の為の報告の後、関連兵団毎に別れ個々の作戦が説明された。

黒沢明人達は、明日0600時、最新ヘリにより敵本部があると報告されたE405エリアへ運ばれ、計340名での特殊強襲部隊で敵施設の制圧を指示された。

航空写真を拡大し、それぞれの担当位置を確認しあい、後は明日の為に体を休めることとなった。

黒沢明人は、エリーズ空軍基地でいつでも出発できるように待機していた。

つい先ほど、地球軍が火星全土の制空権を確保したとの報告が入った。我々の出番も間近だろう。

黒沢明人の予想通り、間もなく出陣の命令が下った。陸軍最精鋭である特殊強襲部隊340名が29機のヘリに分乗し、次々と規則正しく離陸し、低空飛行で目的地へと向かった。黒沢明人を含む第12歩兵師団所属前衛第211部隊所属1番隊フォックストロット1、12人編成の乗るヘリは、12番目に離陸した。

目的地までは何の支障も無く到着した。現場は、混乱を極めていた。敵兵は100人もいない、その上、負傷していない兵は殆どいなかった。宇宙からの大規模爆撃により本部は崩壊したようだった。突入するはずだった入口も破壊されていた。他の部隊からも次々と同じような報告が入った。1隊を除いては…。

『こちらフォックストロット9、敵からの激しい攻撃を受けている！未知の武器を使用しているようだ。位置を知られると消される！退避もできない、応援を求む！』

その無線を聞いたリオ・カールネンは、どうにも嫌な予感を払拭できなかった。精神及び肉体を極限まで鍛えられている上に最新鋭の装備をしている最精鋭特殊強襲部隊の1部隊がかりにも危機的恐怖を受けている。有り得ない事態だ。

『こちらフォックストロット5、今から合流の為に現場へ向かう。それまで耐えろ！』

次に近い位置にいる部隊は、リオ・カールネンの部隊だった。決して仲間は見捨てない。それが特殊強襲部隊の不文律だった。

リオ・カールネンは、無線に叫んだ。

『こちらフォックストロット1、今より現場へ急行する。我が班にはA1がいる。とにかく耐えろ！』

『1及び5、早くしてくれ全滅しそうだ！』

現場までの距離は、およそ3km、普通に走って向かつては間に合わない可能性が高い。そう判断したりオ・カールネンは、黒沢明人を見た。黒沢明人もリオ・カールネンの目を見ていた。

「俺が先行します」

黒沢明人は迷いの無い返事を返した。リオ・カールネンは悩まなか

った。この危機を乗り切るには明人以外に適任者はいない。

「いいか、無理はするな、今までとは何か違うようだ」

「まあ、なんとかなるでしょう」

そういうと明人は、部隊から離れ、自分の質量を下げ、軽くステップ、すると宙に浮き上がった、次に慣性を操作して一気に時速500km近くで移動した。そして、およそ24秒で目的地へと到着した。

まだ、地上では激しい銃撃戦が行われていえる。だが、24名いた筈の部隊は8人に減っていた。

黒沢明人は、近くの一人の仲間の側に降りた。

「うお！」

彼は突然現れた黒沢明人にびっくりして思わず銃口を向けるところだった。

「フォックストロット1の黒沢明人准尉だ。宜しく」

「サー、ランナス・デヴァート軍曹です、こちらこそ宜しく頼みます。ひよっとして貴方がA1ですか？」

「そうだ。それより状況はどうなっている」

ランナス・デヴァートは、再びスコープ越しに銃を撃ちながら答えた。

「隊長が消されました。今は私が指揮をとっています」

「隊長が消された？」

「そうです。敵は謎の装備等を持っているとしか考えられません」

「どのような武器だ？」

「解りません。ただ、相手に時間を与えるのはダメです。その瞬間にやられるんです。我々もそろそろ位置を変えなければなりません」

「想像のつかない事態だな」

「そうですね、想像もつかないですね、球状の黒い闇に包まれたとおもったら、地面ごと仲間が消えているんです。勘ですが、彼らの背後に能力者がいる可能性があります。銃撃がやんだ瞬間だけ、前へ出て何かを行使しているようです」

「銃で撃たれるのを回避しているのか？大きく姿を晒す何らかの兵器の可能性もあるな」

「解りません」

それらの情報は、エリーズ空軍基地作戦本部にいる将兵にも聞こえていた。この本部には、戦場のありとあらゆる情報が集まってくる。グラード・M・パステウル大佐は、日下部雅之へ視線を寄越した。日下部雅之は迷わず「生きて確保しよう」と提言した。

「恐らく空間を切り取る能力（遺産）だろう。我々も把握していない遺産だ。しかし、どうやってそんなものを…火星には衛星を除いて遺産は無い筈だ」

だが今は事態が事態だ。頭の片隅に置き、現実へと思考を戻す。

グラード・M・パステウル大佐は無線のスイッチを入れ、命令した。

「黒沢明人准尉、こちらグラード・M・パステウル大佐だ。これは命令だ。敵の能力者を殺さずに確保しろ」

「サー、了解しました」

「サー、どうかしましたか？」

「敵の能力者を殺さずに確保しろ、だそうだ」

ランナス・デヴァートは、目を見開いた

「不可能です！ここから目標まで700m以上あります」

確かに常識通りに考えればそうだが、黒沢明人にとっては一瞬の距離でしかない。

「大丈夫だ。ここからの距離的には問題無い、しかし未知の攻撃が気になる」

ラプラス・カリキュレーターが働くか？回避可能だろうか？

「命令だしな。未知の攻撃が何か解らない以上、悩むより行動あるのみか…。5秒で出る」

そういつて酸素マスクを外し、バックパックを落とした。

「イエス・サー。ご武運を！。全兵士に告げる4秒後に一斉乱しろ」

「4・3・2・1、0！」

ランナス・デヴァートは銃を乱発した。

敵塹壕まで5秒と掛からず移動した。敵の目は黒沢明人を捉えることができなかった。

気がついたら目の前に立っていたという感じだろうか…。

しかし流石、本部を守る部隊の兵である。それなりの訓練を積んでいるようだ。黒沢明人の目の前の敵兵は、すぐさま行動に移った。迷い無く、アサルトライフルを投げ捨て、長さ30cmはあるかというナイフを鞘から引き抜き、塹壕の上に立っている黒沢明人の足に切りつけた。が黒沢明人はひらりと背後にステップして躲した。そして対して他の敵は拳銃を乱射した。しかしどの弾もひらりひらりと交わす。

黒沢明人は、敵兵の攻撃を受けながらも、誰が能力者（若しくは遺産内蔵するもの）なのか、見極めようとしていた。

そして一人の少女兵が候補に上がった。明らかに守られている。そして銃すら持っていない。

黒沢明人は、少女以外の敵兵をロックし、2038の遺産の衛星にパルス状に超高熱のレーザーを発射させた。

敵兵がバタバタと倒れる。頭に穴が空いているが焦げて血すらも流れない。

「よくも！」

そう叫んで、少女兵は、目の前で死んだ兵士からアサルトライフルをとり、後退しながら黒沢明人に向けて連射した。

黒沢明人は、敢えて避けなかった。しかし、黒沢明人に当たったかと思われる（実際には当たっていないが）弾は、全て地面に転がった。少女兵は目を見張った。だが絶望の目では無い。黒沢明人は、それを見逃さなかった。

女性兵士が言葉を紡いだ。「原理は不明、距離感の扱いが難しい。でもね、今の貴方は最高の位置にいるわ。消えて！」

黒沢明人のラプラス・カリキュレーターが反応し、未来を見せる。

よけられる。強烈に足をはねあげ、バックステップした。一瞬後、黒い球体が目の前に広がり、大きな球となって最後に消滅した。地面には丸い凹みができていた。

「恐ろしい能力だな」、黒沢明人は微かに緊張を覚えた。こんな感覚は初めてだ。最大直径3mといったところだな。厄介だな。

黒沢明人は、ふと疑問に思ったことを聞いてみた。

「名前と君みたいなら若き女性が軍人になった理由は？」

「名は、ダナ・ハーグマン。軍隊に入ったのは、姉の結婚式の時に地球軍の爆撃を受けて、姉も旦那になる人も死んだわ。生き残ったのは、私を含めてわずか数名。…許せない！だから軍隊に入った！」
黒沢明人は、答えた。

「不運だったな。だが、火星政府はもう終わりだ。火星軍はもはや戦略的に動かせないだろう」

「そうね…、ところで貴方は一般兵ではなさそうね。士官？」

「准尉だ」

「そう、能力持ちの准尉…まあ、私なりに上等なもんね」

そう言った瞬間、ダナが視界から消えた。

しまった。能力は1つだけではなかったのか！黒沢明人は珍しく驚いた。

ラプラス・カリキュレータが働かなかった！？

背中に手のひらを感じ、首だけ後を向く。

「一緒に死にましょう」

ダナ・ハーグマンが呟いた。

そして、黒沢明人とダナ・ハーグマンはこの世から消えた。

第三話 有り得ない敵（後書き）

ようやく異世界トリップです。
楽しんで頂けたら幸いです。

第四話 未知の世界

黒沢明人は、暗い森の中で目を覚ました。

ここはどこだ？

何があった？

そしてすぐに思い出した。そう、ダナ・ハーグマンの自爆に巻き込まれたのだ。

そうか、あの能力は、転送だったのか…、ダナは「一緒に死にましょ」と言っていた。彼女もどうやら自分の能力の本質を理解していなかった、と考えるべきだろう。地球政府ならこんなミスは無かったに違いない。コントロールすれば宇宙空間に飛ばすことも、最も絶望的なら恒星へ飛ばせば良い。

しかし、と黒沢明人は周囲を見渡した。地下の施設を除いて火星に森は無い。しかもここまでのものは無い。となるとここは火星では無いのだろう。それに空気は地球と変わりない。空がとても澄んでいる。まさか木々の間から見える綺麗な空が偽物だとも思えない。

黒沢明人は、2038衛星とのコンタクトを取ってみた。2038は生命のある、ありとあらゆる星に衛星等を放っている。

2038衛星とのコンタクトがとれた。正直ほっとした。

黒沢明人は、2038衛星に対して心の中で質問を投げた。

「ここはどこだ？」

すぐさま返事が帰ってくる。

『貴方のいた世界とは違う、平行世界です』
なんだって？

「つまり、…どうなんだ？」

『今まで貴方のいた世界とは根本的違う世界です。そして、貴方の思いを汲み取ると、今のあなたに元の世界に戻る手段はありません。今の環境では、ですが』

黒沢明人は唸った。

「何だつて？、違う世界？戻れない？助けも求められないということか？」

『その通りです』

なんてこつた…参つたな…納得できないが良くも悪くもない結果だとも言えよう…しかし、何も異世界で無くても。ん、並行世界だったか？いや、まあ、いい。

はつきり言つて洒落にならないが、取り敢えず生きている。幸運だと言えよう。しかし、どうすれば良い？黒沢明人は悩んだ。まだまだ諦めるな、ま方法があるはずだ。来ることができたのだから戻れることもできるかも知れない。そうだあの女だ。だが、そこでふと黒沢明人は疑問に思つた。

「…ん？今、ふと思つたのだが、2038は、並行世界にまで衛星を置いてあるのか？」

『相互リンクはできませんが、全ての並行世界に存在するハズです』
「全くお前たちの創造主は神じみてあるな…まあ、いい。となると要はダナ・ハーグマンを探せば良いのだな？」

『残念ながら、この時間軸には該当する彼女はいません。20年前にウイルス性の病気にかかり他界しています。しかし、彼女の娘が1人います』

異世界だからか環境からか。未知のウイルスに感染したのだろう。しかし20年前とは？同じ時間に飛んだはずなんだが…。まあいい、もしかしたらその娘にも同じ能力があるかもしれない。

「その娘はどこに住んでいる？」

『ここから228kmはなれた、ヴィーダ王国の地方自治都市ウエルデンです。現在地はヴィーダ王国の東、クラエン領です』

「地図は？」

『並行世界からなのかインターフェイスの違いにより、転送できないようです。かなりの制限があります。改善するまで時間を下さい。簡易情報としては西の方角です』

「そうか、なるほど。自力でなんとかするか。取り敢えず一番近い

人のいるところの距離と方角は解かるか？」

「村があります。北へ3kmといったところですよ。現在ヴィーダ王国は東の隣国ウエルマー帝国と交戦状態にあり、村はウエルマー帝国の非正規軍に襲われています」

「そうか解った。ありがとう」

使い方を考えれば、問題無いかも知れないな、そう思い。黒沢明人は、地面を蹴って森の上空にジャンプした。そして一気に北へと加速した。

村はすぐに視界に入った。手前で地面に降りる。

歩いて村の入口に近づくと、槍を持って甲冑を着た兵士らしき者の死体13体が転がっていた。

村に入ると老人の遺体がそこら中に転がっており、そこら中から女性の助けを求める声が聴こえてきた。どうやら襲われているらしい。村の中央に行くと、隣接する一軒家から3人の男がでてきた。

「おいおい、まだ男がいるじゃないか、なんだその格好は？」

黒沢明人は、都市迷彩の装備をしていた。この世界では異様に映るかも知れない。

それにしても3人の男達の顔には不快この上ないゲスな笑顔が浮かんでいた。

持っている武器は、1人が戦斧と残り2人が1m位の剣である。そして鎧はてんでバラバラだった。

「ほお、言葉が通じるのか、これが並行世界というものか…」黒沢明人は納得するように頷いた。

「おい、何言ってるやがる」

男たちは、3方向から黒沢明人を囲んでいた。

「へへ、悪いな。男は皆殺しにしなければならんぞな」

戦斧の男はそういうと、優に30kgはする鉄製と思われる戦斧を振り上げ黒沢明人へ振り落とした。

黒沢明人は、それをなんでもなくように右手の人差し指と親指で掴むように受け止めた。余りにも非常識な話である。

男たちは目を見開いた。

恐怖に突き動かされたもう一人の男が剣を抜刀し、叫びながら突きをくりだしてきた。がこれも左手の指で受け止められた。おまけに引こうにも押そうにもびくりとも動かない。

黒沢明人は、有り得ない光景に、硬直しているもう一人の男を挑発した。

「どうした。両手がふさがっているのだぞ？今こそ攻撃するチャンスは無いだらう？」

だが男は動けなかった。素直に黒沢明人の言葉を受け止めることができなかったのだ。

「そうか、では死んでもらう」

黒沢明人はそういうと、電撃の能力を開放した。

一瞬で3人の男達は、黒こげになった。即死である。

黒沢明人は、2038の協力を得て、村全体をスキャンした。ウェルマル帝国の兵士の兵士と思われる反応は、全員で残り31人。31人全てを照準に合わせた黒沢明人は、2038の高出力のレーザーをパルス状に一斉に放った。

ウェルマル帝国の兵士は、全員一瞬で脳に穴が開き即死した。

やがて半裸の女性達が広間に現れ始めた。その中のひとり、ウェルマル帝国の兵士の陵辱を免れた娘が、黒沢明人に近づいて来た。

「ひよつとして貴方が私たちを助けてくれたのですか？」

黒沢明人は、ちよつと助けるには遅かったかなと思いつつ。

「なんてことは無い」と答えた。

「とんでも無いです。見ていました。凄いです！こんな事を聞くのは失礼かも知れませんが、貴方は人間ですか？」

黒沢明人はちよつと笑って答えた。

「さあな元から人間だったのか、後で人間を止めたのか、自分にも解らん」

「見た目は変わった格好をしていますが人間にしか見えませんね」
黒沢明人は、ふと疑問を感じた。

「それは重要なことなのか？」

「え？」

「俺はこの世界に来て間もないのでね」

「？この国、いえ殆どの国では、亜人種と能力者は一般に奴隷として売られています。でも貴方が私たちの命の恩人には変わりはないのも事実です。私の父は、村長です。もっとも父は殺されましたが父に代わって御礼をしたいのです。多くの女性を助けてもらいました」

「なるほど解った。そうだな、ただ、まだ村の周囲にウエルマール帝国の兵士が残っているかも知れない。まずはそれを片付ける」

「ああ、ありがとうございます」

娘は、心の底から感謝していた。それは雰囲気でわかる。

「俺の名前は、黒沢明人。明人と呼んでくれ」

「私の名前は、デイト・ウエルヘンです。デイトと呼んで下さい」

「よろしくデイト。では索敵に入る」

「はい、宜しく願います…索敵？」

この世界の一般人には、初めて聞いた言葉だったかも知れない。

第四話 未知の世界（後書き）

ようやく、SFからファンタジーへ。

SFは書いてて大変なんですよね。

ファンタジーが楽だと良いのですが、よくよく考えたらファンタジーも書いたことが無い…。

大丈夫かなあなんてね！

第五話 リーナとの出会い

実の所、黒沢明人は既に周囲を索敵済みであった。強い反応はウエルマル帝国の兵士だろうか。強い反応は野心や欲、殺意を意味する。そしてもう一人、こちらは今にも消えてしまいそうな反応だ。死にかけているのだろうか？

取り敢えず、この二人以外に村の外には反応は無い。二人は極めて近い距離にいる。

黒沢明人は、まず手のかかりそうな、強い反応を示している方を相手にすることにした。そこには、幌馬車が3台止まっていた。兵士を載せるには少なすぎる。それに弱い反応は幌馬車の中にあった。

黒沢明人は少し考え、大した意味は無いと判断し、思考を中断した。次に男の姿が見えた、初めての村での経験則で考えると、男は恐らくそこそこ高価な服を着ている。が、ぶくぶくに太った体のせいで前ボタンが外れかけている。生理的に受け付けない醜い男である。しかし、恐らく部隊での位置付けは大きいだろう。そう勘がそう言うっている。しかし、護衛も用意していないのは軽率ではあるまいか？

黒沢明人は、男の前にストンと着地した。

男の目が見開かえる。

「お前は何ものだ？」

黒沢明人は、男よりも言葉を先に制した。

「わ、私は奴隷商人だ。ギ、ギールと呼ばれておる」

「ほう、奴隷は一人しかいないようだが？それも死にかけだな？」

「エ、エルゲンの街で売った後だからな。い、今残っているのは、死にかけの奴隷だ。か、買い手はつかんよ」

「どうするつもりだ？」

「村ごと燃やすつもりだ。それよりも、そ、其方こそ何者だ。ど、どうやって現れた？ひよっとして能力者か？」

「お前の質問は受け付けていない」

「この村には能力者はいないようだが、何故奴隷商人のお前がいる？」

「それは、…ウエルマール帝国では一般人の奴隷制度が…」

「お前は、ウエルマール帝国の人間か？」

「しょ、商人に国境は無い」

ギールは、脂汗を流しながら、どうやったら逃げられるのだろうと、視線を彷徨わせる。

こんなことになるのなら下品な兵士について行った方が良かったと心の底から思った。しかし、同族嫌悪とでも言おうか、彼の歪んだ美学に反したのだった。だがそれは、後悔にとって変わった。まさかこのような事態になるとは…。

「ち、近くの村に仲間が30人以上いる。いくら能力者でも相手にするのは、む、無理があるんじゃないか？」

「そいつらなら一人残らず殺したが、そうだな、次はお前の番か？」

黒沢明人は、無表情でギールのこれからの殊遇を淡々と述べた。

黒沢明人のいた世界では、捕虜は優遇されるし、どの国も宇宙連合の定める戦時規約を遵守していた。ただ、一般人への攻撃は固く禁止されているが、様々な理由により攻撃される場合もある。しかし、それらは誤解や偽情報が主な理由として上げられる。

ましてや戦時中に奴隷商人が潤うことなどあつてはならないことだ。いや、そもそも奴隷という制度があること自体嫌悪を感じる。いずれにしる許せないのだ。

「お前らしい最後を遂げることだな」

黒沢明人は、そういうとギールの体重を10倍にした。

ギールは「ゲベ」と言葉にならない呻きを残して苦しみながら圧死した。

黒沢明人は、ギールの死を確認しないまま、もう一つの反応のあった幌馬車に乗り込んだ。

中に入ると、ツンとする腐敗臭が漂っていた。かなり臭い。その発

生源は奥の檻の中からただよっていた。

檻の中には背中に酷い傷を負い、蛆虫が湧いた裸の小柄な少女と思われる女がいた。

黒沢明人が近づくと、ゆつくりと顔を上げ、振り向いた。

少女の顔は思いのほか美人だった。これほどの器量で売れ残ったのは、死にかけだからだろう。ギールもそう言っていたのを思い出した。ただ、額に菱形のエメラルドグリーンの宝石のようなものが埋め込まれていた。時代的にアクセントで埋め込んだ物では無いだろうと察することができた。これが亜人種というものなんだろうか。

黒沢明人が額の宝石に目を奪われていると、少女が掠れる声で話しかけてきた。

「貴方がこの村に来た時から見ていました。貴方のような強い人は初めて見ました。」

「1つお願いがあります。鍵を壊して私を檻から出して下さい。せめて木陰の下で死にたいのです。」

「お願いです。このまま死にたくないのです」
少女の瞳から大粒の涙がぼろぼろと流れ落ちた。

「滅多なことをいうな。その程度の傷なら簡単に治せる。それよりも疑問なんだが、ここから全てを見ていたのか？」

黒沢明人は、心の中で大きくなっていった疑問を口にした。

「はい。それが私の能力です。あの…私は助かるのですか？」
「ああ、助けてやる」

黒沢明人はそういうと、檻の入口を閉ざす大きな鍵を左手に持って、右手の人差し指を押しあてた。バチッと音がして鍵がコロンと落ちた。電気の熱で溶解したのだ。

腕力で檻を壊してもよかったのだが、こっちの方が早い。
次にゆつくりと少女を檻から出した。

知つての通り黒沢明人にはノーメンテナス機能がある。この機能はナノテクノロジーによって実現している。つまりナノサイズの小さなロボットが、必要に合わせて体の一部になり、必要に合わせて

増殖するという仕組みなのだ。必要無くともある程度の数が全身に行き渡っている。ただし最後の状態は、本人にのみ有効で、逆に言えばそれ以外は他人にも通用するのだ。

「俺の名は黒沢明人だ。君の名は？」

「リーナ・サーリエントです。えっと、くろさわさん？」

「明人で良いよ。よし、今から君の体を治す。痛みは殆ど無い。いいか？」

「本当に治るんですか？」

「ああ、10秒程でな」

リーナの表情が暗い顔から希望に満ちた顔になった。彼の偉業を見た為に疑いは全くなかったのだ。因みに10秒というのは長い。明人本人ならば1秒とかからない。理由は、明人にも解らないし、研究者の間でも諸説紛々という具合だった。

黒沢明人は頷くと「では、ちよつと我慢しろよ」と言い、背中をのぞきこみ、最も傷の深いところをペロリと舐めた。

リーナは、うつと微かに呻きを漏らした。

するとリーナの背中 of 傷から蛆虫が次々と這い出し、肉が隆起し、皮膚が再生し、予言通り10秒程で治ってしまった。

酷い痛みで長いこと眠っていなかったのだろう。リーナ・サーリエントは、気絶するように深い眠りにおちた。

第六話 旅、前夜（前書き）

密かに矛盾やスペック等直しているので、時間に余裕のある方は、読み返してみるのも良いかも知れないです。

第六話 旅、前夜

黒沢明人は、迷彩の上着を脱ぐと、気絶するように眠っているリーナ・サーリエントを包んだ。身長175cmとさして大きくもない黒沢の服だったが小柄なリーナはなんとかギリギリ入った。身長150cmくらいだろうか。美人と評価すべきか可愛いと表現するべきか、どうでも良いことを考え、我にかえった。ああ、どうでも良いことだ。

黒沢明人は、リーナを抱え、幌馬車を出た。リーナは思いの外軽かった。ろくに食事も与えられていなかったのだろう。

外ではギールが酷い死に方をしていた。もっともそうしたのは俺なのだ…。

黒沢明人は、ギールに近づくと、ギールの上着を軽く開いた。そして腰の革袋を見ると、迷い無く引きちぎった。ジャリつと音がなる。かなりの重さだ。死人に金はいらんだろう。ありがたく使わせてもらうことにした。

黒沢明人が村に戻ると、大して広くない広場に木材を下にした死体がうずたかくつまれていた。年寄りと男ばかりだ。理解しがたいが、村を襲った敵である兵士も同等に扱われていた。

それを横目に歩いていると、デイト・ウエルヘンが声をかけてきた。

「アキト様！あ、その女性は？」

「奴隷商人に買われていた。死にかけていたので治療したのだが。今まで痛みで寝てなかったんだらう、今はぐっすり眠っている。

ところで、デイト。この遺体はどうするのだ？」

「三日三晩かけて焼きます」

「気になったんだが、敵の遺体も一緒にか？」

「死人の罪は昇華されず。アキト様の世界では違うのですか？」

「味方の遺体は親元へ返す。残っていればだが…。敵兵の死体は

埋めるな」

「ひよつとして明人さんの世界でも戦になつて居るのですか？」

「ああ、俺はその世界で士官になり、なりたてでこの世界に来てしまった。なんの為に士官になったのやら…」

「道理で強いハズです。いえ、そんなレベルでは語れ無いですね。」

アキト様の敵になつた者が可哀想ですね。ひよつとして、その服装は兵士の服装なのですか？デザインが不可解で…。

て、あ、ごめんなさい。その子は宿屋へ、アキト様もそこに泊まりますか？無論無料です。私の家は血まみれで…」

「すまない。そうしてもらえるか？」

「アキト様の為ならなんだって…、といつても貧しい村ですので大したおもてなしはできませんが…精一杯誠意を尽くしたいと思ひます」

「いや、無理はしなくて良い。それより心に傷を負つた女性が多いのでは？」

黒沢明人は、若干いいにくそうに口にした。

しかし、デイトは笑つて答えた。

「それが、皆ギリギリの所で助かつたんです。もちろん身内を殺された者もおりますので、お気の毒ではありますが…」

「君もその口なのでは？」

「父は高齢でした。世継ぎの言も受けておりました。死期が早まつただけです。それに悲しんでばかりはいただけません。それに男たちの大半は今戦地に行つています。殺されたのはほんの一部です。無事帰つてきてくれたら良いのですが…」

「そうか…」

この世界の女性は、強いな。それともデイトが特別なのか。歳は二十歳かそこらだろう、村を支える責任感も強さの秘訣なのかも知れない。

「ではお言葉に甘えさせてもらつよ。宿に案内してくれないか？」

「はい、こちらです」

リーナ・サーリエントが目を覚ましたのは、夕刻だった。ふと横を見ると黒沢明人がベットの横で椅子に座り目を閉じていた。

リーナは、痛みを感じない自分の体に改めて驚いた。明人様の言葉は本当だったのだ。試しに上半身を起こし、運動を試してみる。全く痛みがなり。リーナは、嬉しさのあまり、叫びそうになったがそれを抑えて心の中で叫んだ。「アキト様ありがとう！」

すると、いつのまにやら寝ていたハズの黒沢明人が起きていた。

「どうだ。体調は？」

「もう全く痛くないんです！アキト様ありがとうございます。なんと御礼を言った良いのか、私には分かりません」

「気にするな。気まぐれだ。それより腹は空いていないか？」

リーナは、ちよつと頬を赤らめ。手をお腹の上に置いた。

グー、思わぬ大きさの腹の音に、赤面して俯いた。よほど腹が減っているのだろう。リーナは非常に軽かったし、見た目もかなり痩せていた。

「もてなししてくれるそうだから、少なめに食事を取るか。ちよつと待ってる」

そういうと明人は、椅子から立ち上がって、部屋を出て行った。

自分の体を見て、今気づいたのだが、新調された寝巻を着せられていた。リーナは、ベットから起きるとくるっと一回転した。死ぬとばかり思っていたが、すっかり死の恐怖から逃れられていた。黒沢明人と出会いは、リーナにとって特別な意味を持った。

彼のことはさっぱり解らない。珍しい服装。亜人間の私を助けてくれたこと。そして私の面倒みていること。

「いい人なのかなあ」

気がついたら呟いていた。

それから、ほんの一時したころ、二回ロックが聞こえた。

「はい。どうぞお」

するとドアの向こうから、黒沢明人が「両手がふさがっていてな。

「すまんが開けてくれ」

リーナは、喜んで入口へ行き、扉を開いた。

スープ、肉料理、お粥。リーナは、もう食べたたく食べたたくて、今にも涎がでるところだった。

「リーナは、胃が弱っているからスープとお粥で我慢してくれ」

「はい！」リーナは元気良く返事をした。

そして互いに夕食を食べ始めた。そして黒沢明人は、ふと忘れていたことを思い出した。

「リーナは、何歳だ」

「16歳です」

「あの背中の傷は？」

「逃げようとして、捕まって。鞭打ちの刑を受けたんです。見せしめだったと思います」

「酷い世界だな」

その言葉を聞いてリーナ・サーリエントは疑問を口にした。

「そうなのですか？」

黒沢明人は、最後の肉を口に放り込み、嚙下した。

「俺はこの世界の住人では無い」

そこで一旦話を止める。リーナ一瞬ぱかんとした顔をしたが、何かを納得したのか頷いた。

「俺の元いた世界は、遙か昔から奴隷を禁止している。まあ、中には法を破る者もいるが、警察に捕まって牢獄行きだ」

リーナは、頭を傾けて、

「警察？」

と聞いてきた。

「まあ、訓練された自警団みたいなものだ。法を破るものを逮捕する為に存在する」

リーナは、正直よく解らなかつたが、黒沢明人を煩わせるのもどうかと思ひ。曖昧に頷いた。

「まあ、俺はこの世界をあまり詳しく知らないから、案外似たよう

な国もあるかもな」

黒沢明人は、そう締めくくった。
すると扉が2回ノックされた。

黒沢明人は、歩いて行き扉を開けた。ディート・ウエルヘンが立っていた。

「あら、夕飯を食べたのですか？」

「いや少量だ」

「そうですか、カルツカを捕獲したので、今日はカルツカ料理ですよ。とても美味しいお肉なんです。お酒はいくらでも」

黒沢明人は、振り返ってリーナを見た。

「俺は外にでてるから、机の上の箱に入った服を着るといい」

「はい。ありがとうございます。何かから何まで…」

「気にすることは無い。どうせ奴隷商人から拝借したものだ」

「はい」

リーナ・サーリエントは、嬉しそうに頷いた。

第七話 旅立ちの時

扉から出てきたリーナ・サーリエントは、青と赤を基調としたモダンな雰囲気ドレスを身に纏っていた。

まさかこれほどの器量良しだったとはな……。あの奴隷商人は馬鹿だったか、金に飽きて無頓着になっていたのかも知れない。

案外良い商品になるかもしれない。もっとも理性が許せても感情が許せないが。特にリーナに負わせた傷は、激しい怒りを感じる。

こんな小さな女の子を鞭打ちとは……皮は裂け、肉は弾け、骨は露出し……想像するだけで怒りが倍増する。

ふと横にいるディート・ウエルヘンに目をやると、拳を固めていた。「わ、私も着替えなくちゃ！」そう言うのと怒涛の勢いで店を出て行った。

まあ、解らんでも無いな。と黒沢明人はこめかみに手を当てた。

黒沢明人は、リーナに「行こうか」と声をかけ階段へと向かって歩きはじめた。慌てるようにリーナが後を追いかけてきた。

「その服で階段は危険だな。俺の手をとれ」

そういうと黒沢明人は、右手の平を上に向けた。

リーナはおずおずと左手を差し出し、黒沢明人の手の上に載せた。

そして、リーナの頬がほんのりと赤くなった。リーナは思った、当の黒沢明人は紳士だが、色恋とは別の世界にいる人のように思えた。それとも自分が若いから？幼く見えるの？リーナはほんのちよつぴり怒りのようなものを感じた。自分でも気持ちが悪くココロと変わっていくのが自覚できた。奴隷から開放され、ようやく女心が芽吹いたのだろうか。

村の広場では、豪快に炎が上がっていた。それと遠くとりまくように女達が、椅子に座って歓談しながら料理に舌づつみを打っていた。多くの女性が木製の大きなコップを持ち一気に飲むと「プハー」と息をはいた。どうやら酒を飲んでいようだ。

「アキトさん、アキトさん、こつち空いているわよお」
一人の女性が話しかけてきた。すると、「こつちも空いてるわよ！」と彼方此方から声をかけられ黒沢明人は珍しく戸惑った。
そこへ、デイト・ウエルヘンがやってきた。
薄い青のドレスが炎の灯りを受け、ゆらゆらと揺れていた。長い髪はアップで止めて、後に垂らしている。

「どお？」

デイト・ウエルヘンはシナを作って、こくりと首をかしげた。美人では無いが、それに近い造形で表情の機微に長けている。つまり可愛いということだが…これは反則だろう。基本無表情の黒沢明人は、今日2度目の無表情を返上した。

「アキト様、麦芽の発酵種です。そしてこれがカルツカのお肉だそうですね」

何時の間にもやら飲み物と食べ物を持ってきたリーナが黒沢明人を冷静に戻した。

心無しかデイト・ウエルヘンが微かにむっとした表情を見せたような気がする。しかしそれは一瞬の事で、真偽の程は定かでは無い。リーナとデイトは、競うように黒沢明人に料理と酒を飲ませた。黒沢明人は、殆ど人間では無いが、多少酔うことはできる。ただし、いつでもすぐに正常状態に戻すことができるのだが。
結局、リーナとデイトが先に酔い潰れた。どうでも良いが16歳の子供のリーナは酒を飲んで良かったのだろうか？真っ先に酔い潰れたのはリーナだった。

翌朝、8時頃にフルプレートフルプレートの鎧を着た騎士が村を訪れた。早速デイトが二日酔いで頭抱えながら対応した。

「この村は、現在の戦況上重大な意味を持つことになった。ということでこの村を要塞化する。それに先立ち、村の責任者を我が部隊最高責任者であるヴェルフェン・リ・ガーナ卿に移譲してもらう。明日からこの村の管理は我が部隊によって行われる」

デイトは驚いた。

「しかし、今この村には若い女性しかいません」

「調理くらいは、できるであろう」

デイト・ウエルヘンはそれ以上食いつくことができなかつた。混乱したまま、頭を下げて退場した。

「この村で戦争が起こるってこと？皆に知らせないと」

デイトは住民を集めて事の顛末を話した。

しかし、多くの人が家を失うことに躊躇った。結局3家族だけが従兄弟の家に世話になることになり、他は村に残ることになった。

「デイトは、どうするのですか？」

村人の一人が心配そうに訪ねた。

「もう明日にも私の意見は通らなくなるだろうからね。アキト様に頼んで旅のお供をするわ」

「それなら安心ですね」

「連れて行ってくれたら、だけどね……」

「それなら問題無い」

デイトは振り返った。黒沢明人だった。

「路銀がたつぷりあるのですね。連れが一人増えたところで心配無い」

「本当ですか！ありがとうございます。アキト様」

デイト・ウエルヘンの目に涙が浮かんだ。

第七話 旅立ちの時（後書き）

誤字脱字があれば是非指摘してください。
宜しく願います。

貴方にとって良い小説でありますように。

第八話 城塞都市ウィニック（前書き）

みなさん、感想を待っています。

ってほど読める程の量は無いか…あはは。

第八話 城塞都市ウィニック

黒沢明人は、生まれて初めて馬車というものに乗った。道路が平ならここまで酷くは無いのだろうが、全く整備されていないのだから、もうどうしようもない。木製の車輪が壊れないよう鉄を巻いただけの車輪では、如何ともしがたいものがある。揺れが激しく細かく時に大きくガタガタいうのだ。時期が来たらサスペンションを開発しようかと真剣に思い悩んだ。

黒沢明人達一行は、朝の5時に村長の馬車でひっそりと村を出てきた。デイト・ウエルヘンが別れが辛いから、とお願いしたのだ。黒沢明人は快諾した。これからどんなことが起こるのか解らない村に気の優しい村人を残していくのだ。気持ちを察することができるとような気がしたのだ。

今、デイトが手綱を持ち、黒沢明人がその横で何をしても無く座っていた。かれこれ5時間である。流石の黒沢明人も辟易してきたのだが、中を覗くとリーナ・サーリエントは、椅子に寝転がってグーグーと寝息を立てている。強者がいる、明人はあきれ果てた。実際のところは、自分だけ馬車の中に入っているのが気に食わず、ふて寝をするしかなかったのだ、それにしても慣れたものである。怪我ならすぐに治せるのだが、この尻の痛さは怪我では無い。それでも偶に楽になることがあるということは、本当だったら尻の皮が剥がれるのかも知れないと嫌な想像をした。

「俺独りなら空を飛んでいくところなんだが…」

「何か仰いました？アキト様」

「いや、次の街：城塞都市ウィニックだったか。後どのくらいかかるのだ？」

「この丘を登ればみえてきますよ」

「ほう。ではもうすぐ着くということか？」

「そうですね。後20分程です」

黒沢明人は、安堵の息を吐いた。そしてふと気にかかった。

「デュー、この世界の1日は何時間なんだ？」

「23時間ですが…？」

「そうか、まあそういうこともあるだろう」

デューは暫く首を傾けていたが、何か引つかかると思いつつ、どうしても思い出せないようだ。そして結局あきらめたらしい。

その時、リーナが馬車から顔を出した。

「起きたのか、どうした？寝疲れたか？」

黒沢明人が答うと、「喧騒が聴こえてきたので、と不思議なことを言った」

「ん？俺にはまだ何も見えないが…」

デューは聞こえるか？」

「私もアキト様と同じですね」

「なるほど…、リーナ。お前の能力を過小評価していたようだ」

「え、そうですね！ありがとうございます、アキト様！」

リーナにとって能力を評価されるなんてことは生まれて初めての体験だったのだろう。そして、それを褒めてくれたのが、崇拜する名人なのだ、望外の喜びだったに違い無い。リーナは思った。私は能力者で良いのだ！

やがてデイトが予想したとおり、20分くらいで到着した。城門の橋を渡ると、兵士に止められた。

「男、珍しい服を着ているな。どこの国の服だ？商売で来たのか？」

「遠い国です。商人ではない。買い物をしたのだが…」

黒沢明人は、笑顔を作り答えた。

「私はセイレス村の村長の娘です。父は最近死にましたが…」

デイトはどこか遠い場所を見るように答えた。まだ心の整理ができていないのかも知れない。

兵士は興味のなさそうに「そうか」と答え、次に馬車の中を見分さ

せろと言ってきた。

中にはリーナが乗っている。あからさまな能力者を見せるべきか？あの額の宝石は目立つぞ…。

黒沢明人は、念のためにと用意していたデューク銀貨を手に持ち、「兵士の仕事は大変だろう。ちよつとでも多く貯金を残さないと家族が路頭に迷う。」

尊敬します」

そついうと馬車を降りて握手を求めた。そして頻繁に目で合図する。兵士は、ああ、と頷き握手してデューク銀貨を預かった。

そしてそれを見て驚くような顔をした。デューク銀貨一枚と言つたら6人家族を一ヶ月養える程の価値がある。

「実はちよつと急いでまして、そろそろ、よろしいでしょうか？」

兵士は、黒沢明人が馬車の御者席にのるのを待つて答えた。

「行っていいぞ。良い思い出を」

そして、手を振った。

街に入ってから黒沢明人は、真つ先に髪飾りを買う提案を出した。

リーナの額の宝石を隠す為だ。

デイトは、髪飾りの店の前で、馬車を止めた。

黒沢明人は、馬車から降りたデイトにイギル銅貨を一枚渡し「デイト用とリーナ用の2種類を買つてくると良い」と言った

。イギル銅貨は、10枚でデューク銀貨に匹敵する。銅貨の中でも特別貨幣価値が高いのだ。

10分程経つてデイトが店から出てきた。ホクホク顔である。

そして馬車に乗ると「こつちのがリーナなので、こつちが私のんだけど、異論は無い？遠慮なく言つてね」と物のやり取りを始めた。

別段リーナには解らないこともあつて、当初通りお互いのリボンを胸に抱いた。

ちよつとの間を置いて、「さて、リーナ。前髪につけてあげる」とデイト。

「お願いします」とリーナ。
作業はあっという間に終わった。

リーナは御者台に顔を出すと、「どうです？アキト様」と嬉しそうに返事を待っているようだ。

「ああ、可愛いよ」と黒沢明人が答えると、「キヤー」と嬉しさのあまり悲鳴をあげて引っ込んだ。

そして、ディーナも同じ行動を取った。

さて、宿でも探すか。黒沢明人は、周囲を見渡した。

第九話 「奴隸」その1

黒沢明人は、デイト・ウエルヘンの横に座りながら、宿を探す為に町の中央広場を探した。これだけの街なので中央広場が無いというのは非常識である。案の定すぐに広場は見つかった。結構広い円形の広場だった。

そこで、宿を探す為に周囲を見渡したが、ぱっと見ただけで5軒もあつた。「探す」では無く「選ぶ」が正しい選択肢だったというわけだ。

どの宿も一階部分は、居酒屋で、二階部分が宿になっているようだ。3人は馬車を降り、広場をまわるように宿屋を見て回った。どうやら、それぞれの宿屋で得意料理が違うようだ。看板にも特徴を絵柄で書いてある。魚、鳥、オーロックス、カルツカ、菜食といった感じである。文字を見るのは初めてだが、見たことのない文字なのに何故か読めた。思えば話す聞くも最初からできていた訳で、並行世界だからかと思つたのだが、どうやら違つと言つた方が正しいと思われる。カラクリは何だ？

黒沢明人は、2038の衛星に話しかけた。

『言葉に不自由しない。何かやつたか？』

『はい、私と会話ができるように公用語類と文字と基礎知識をアップロードしました。準備が整つたので地図のアップロードも可能です』

『そうか…、それは、ありがたい』

黒沢明人は、気持ちを切り替え、ひと呼吸すると、

「何を食べたい？」

と二人に問うた。

デイトとリーナは、顔を見合わせた。戸惑っているようだ。そこで、黒沢明人は言葉を追加した。

「遠慮は要らんど。金の心配は無い。リーナ、お前は痩せすぎだ。」

肉が良いんじゃないか？」

「ちよつと待つて下さい」

二人は息もぴつたりに取り敢えずの返事をした。そして、二人は黒沢明人から離れて、相談を始めた。

リーナは、「実は私、村で食べたお肉が初めての体験なの」とおずおずと話した。

「どうだった？美味しかった？私も滅多に食べないのだけど」ディートが答えると、リーナは、うん、と頷いた。

「あんなに美味しいのは生まれて初めて。お酒も美味しかったわ」

「どうするリーナ？実はオーロックスの肉が一番美味しくて、一番高いのよ」とディート。

「流石に驚沢かしら？私、昨日から幸せな事ばかりで怖いくらいなの。もしまた元の…」

そういうとリーナは首を振った。恐ろしくて口に出せない。

ディートはそれを察すると、

「じゃあ、やつぱしオーロックスにしようよ。今日は三人で旅を始めた、言わば記念日よ！」

二人の会話は続く。

実は、この二人のやりとりは全て黒沢明人にダダ漏れだった。黒沢明人の耳は、常人の10倍以上なのである。

オーロックスか…あの絵を見た限り俺の知っている家畜の姿だったな。

本音を言えば、黒沢明人もオーロックスに興味を持っていたのだ。

黒沢明人は、声を張り上げた。

「おい、ちよつと早いが決まらないんだったらオーロックスにするぞ」

リーナとディートは、顔を見合わせ「はい」と二人揃って声を張り上げた。

結果を言おう。

オーロックスは、リーナとデートにとって最高の逸品だった。二人は笑いながら次々と肉を頬張る。

「あれ？アキト様は食べないんですか？」デートが口に肉を頬張ったまま質問した。

「味が薄いな。塩なり胡椒なり味付けにもつと気を使った方が良くと思うのだが……」

リーナは意味が解らなかつたのでそんなものかな、なんて考えていたのだが、デートは違った。

「塩はこの国では万年不足だけど、胡椒は貴族の為のスパイスですよ！」

「そうなのか？」と黒沢明人は肉を見つめた。

「アキト様は、実は貴族に所縁の方なのですか？」

黒沢明人は笑い、「そんな大層なものではないよ」と答えた。

実のところ、明人が食事をするのは娯楽の為で、実際には体の中にある対消滅炉の発生するエネルギーだけで、ほぼ無限にエネルギーを得られるのだ。

結局、黒沢明人の肉は、リーナとデートが二人で分け合って食べた。

黒沢明人は、会計を済ませると女将さんに「部屋を2部屋借りたいのだが」と聞いてみた。

「安い部屋は埋まっているけど、ちょっと良い部屋なら問題ないよ」と女将さん。

「ではそれで頼む。今チエックインできるか？」

「はい、いつでも。会計は先払いね」女将は軽快に答えた。

時刻は、恐らく12時。

「リーナ、服はその一着だけだろ。もう何着か買っといい。デート手伝ってやってくれ。それと5人分で6日間分の保存食を買っておいてくれ」

「え、5人分ですか？」デートが疑問を口にした。

「ああ、ちよつとウエルデンへ向かう為の人材を探してくる」

「ウエルデンですか、聞いたことがあります。それですと城塞都市ウエルマン経由ですね」

「そうなのか？」

「聞いた話ですが、そうですね、途中、どちらの町も魔獣がや山賊が跋扈していますので、余裕を見た方が良いかも知れません。この待ちは、今この街は乾燥肉がかなり安いので、城塞都市ウエルマンまでの3日分とウエルデンまでの5日分の食料を用意します」

「そうか、そうしてくれ」

デイトがいて助かる。黒沢明人は自分の幸運に感謝した。

黒沢明人は、リーナとデイトにお金を渡すと1人別れて街の喧騒の中に姿を消した。

しばらく街を歩いていると、横に逸れた路地から妙な臭いが漂ってきた。臭いのだ。といつても汚物の臭いでもなく家畜の臭いでも無い。

黒沢明人は、その路地の入口に立った。

そこには、檻に入れられたり、枷をは嵌められた亜人間達がいた。

黒沢明人は、躊躇無く路地に入った。

奴隷達は、皆一様に諦めた目をしていたので、諦めていない強い目をもった奴隷を探し、ゆっくりと見て歩いた。

そして、耳の尖った細身の女性の亜人間と目が合った。彼女は俺を憎しみの目で睨んでいた。

黒沢明人は、そんな彼女に興味を覚えた。

檻に近づき話かけた。

「お前はウエルデンを知っているか？」

「：ウエルデン？私の故郷よ。それがどうかしたの？」

「詳しい者を探している。人探しでね。能力者だ」

「それだけ？貴方は私を性奴隷として見ないの？長旅の夜伽の相手でも探しているの？」

「俺はそこまで傲慢では無い。奴隷を持つつもりも無い」

彼女は黒沢明人の目をじつと見た。黒沢明人はじつと見返した。

「私は、奴隷になりたてで店に出されたのはつい最近よ。奴隷商がケチでなければ良いけど」

「そうだな。交渉してみよう。ところで名前は？」

「フエイ・アルディオーネよ」

頷くと黒沢明人は、ちよつと離れた距離でこつちを見ている奴隷商を手で招いた。

奴隷商は、手を揉みながら近づいてきた。

「御用でしょうか？この亜人間がお好みで？」

「ああ、そうだ」

「旦那さん、変わった服を来ていますね。外国の方ですか？」

「いや、この服は特別製でね。俺のデザインだ」

「ほう。それはそれは。見ない方でしたので。ところで、奴隷を買うのは初めてで？」

なるほど、いつもこのような質問をして、客を物色しているのだろう。さて、どうしたものか……。まあ、安く買いたい訳でも無いが。

黒沢明人はいつそ強引に行こうと決心した。

「それはともかく、幾らだ？」

「はっ、そうですねえ。イリート金貨一枚といったところでしょうか」

イリート金貨一枚は、デューク銀貨30枚に相当する。かなり高価だ。

「それは大きくでたな」

「胸も尻も小さいですが、かなりの器量良しですからね」

「夜伽としての相手としては問題があるんじゃないのか？」

「確におっしやる通りで。ただ初物なのでそれだけの価値はあるかと」

「そうか、まあいいだろう」

そういうと、黒沢明人は腰に下げた袋からイリート金貨を一枚出し、奴隷商の手の上に落とした。

「まいど」

奴隷商人は、そういうと鍵束を取り出して、檻の鍵を明け、扉を開いた。

フェイ・アルディオーネは、ゆっくりと扉が出て、背を伸ばした。

「旦那様、これから私のことはフェイと呼んで下さい」

「俺のことは明人と呼ばば良い」

「いいえ、ご主人様と呼ばせて頂きます。ふふ、それにしても高い買い物でしたかね？」

「自分の価値を知った気分は？」

「悪くないわね」

黒沢明人がフェイと会話している間に、奴隷商はフェイの腕を縛り、黒沢明人に縄の端を渡した。

「では、旦那。今後ともご贖身に」

第十話 「奴隸」その2（前書き）

実は、矛盾なんかがあったりして、修正しているので、キチンと理解したい方は、再度読み返すことをオススメします。
つて、そこまでのファンはいないかなw

第十話 「奴隷」その2

黒沢明人は、暫く歩いてからフェイ・アルディオーネの縄を解いた。
「逃げても構わんぞ」

明人が言うと、フェイは微笑を浮かべ、

「ウエルデンに行くんでしよう？願っても無い話だね。第一逃げ出して捕まったら、下手したら殺されるわよ」

そう言つて微笑を浮かべたまま肩をすくめた。なんとも言えない妖艶さがある。

「そうだったな」

そうチラッとフェイを見、答えながらもすぐに黒沢明人は奴隷達を流し見始めた。

「ちよつと聞いていい？」

「なんだ？」

「どうして私を選んだの？」

黒沢明人は足を止め、奴隷達から目を放し、フェイに振り返つた。そして目を見ながら簡素に答えた。

「目が死んでなかったからだ」

「目が？」

「目の死んだ奴隷はただの人形だ。俺は人形を探しに来た訳では無い」

「そう…私は諦めていなかった、けどついでたようね」

運もあるが彼女の立場であれば、望みを捨ててなかったのは僥倖だったと言えよう。

黒沢明人は再び歩きだし奴隷の物色を始めた。

「あとは用心棒が欲しいのだがな」

「そうね。ウエルデンに行くのなら城塞都市ウエルマンに入って東門をでてまっすぐ東へ、そこからグラープスの3つの森を抜けないとダメなんだけど、その辺はもう知っているのかしら？」

「3つの森？」

フェイ頷いた。

「そう、3つの森。一つ目の森はエディ・グラープス、二つ目の森がワナ・グラープス、最後の森がティル・グラープスよ」

「何か違いがあるのか？」

「エディ・グラープスには魔獣はいないわ。代わりに野盗が跋扈してるの。頭を使う分、魔獣より質が悪いかも知れないわね。そしてワナ・グラープスだけど、魔獣が出るわ。厄介よ。彼らは年中空腹に苦しんでいるわ。だから命を惜しまないの。で最後のティル・グラープスはちよつと変わっているわ。古代遺跡があるって話だけど、奥地に行けば行くほど強力な魔獣がいるの。何より問題なのがあの最高位の魔獣、ドラゴンが棲んでいるってことよ。炎のブレスを吐く真つ赤なドラゴンよ」

「饒舌だな」

黒沢明人は、内心感心し、良い情報を手に入れたと喜びつつ、ほんの少し弄ってやりたいと思うくらいに気に入ってしまった。
聡明だな、と思う。

「茶化さないで下さい。貴方が無知なの。とにかくそういうことだから護衛はたつぷり必要よ。で、今何人いるの？」

黒沢明人は、平然と答えた。

「女2人だ。君を含めると3人だな。そして俺だ」

フェイは、愕然とした。

「それは死ねってことなの？」

「そう悲観するものでもない。俺は強いぞ」

フェイは開いた口が塞がらなかつた。本気で言っているのかしら…妙な服に背中の剣らしきもの。かなり怪しい人物だし、ひよつとすると能力者かも知れない。バレたら奴隷？

「あんまり軽はずみなことはしないようお願いしたいわ」

「まあ、街の中ではな。ところで護衛は一人で良いと考えているのだが、良い情報は無いか？」

フエイは悩まず答えた。

「もちろん竜神人たつのかみびとでしようね。一人で普通の熟練兵士5人分くらいの実力はあるわ。高いわよ」

「そうか、では見つけたぞ」

そう言うのと黒沢明人は一つの檻を指差した。竜神人とプレートに書かれていた。

黒沢明人は、一人の竜神人の檻に近づいた。竜神人は、両手両足に枷をハメられていた。普通の人間なら動けないだろう。

しかし、その竜神人は、全く気にしていなかった。それに何より目が爛々としているのだ。

そこへ奴隷商がやってきた。

「如何なご要件で？」

「強い奴隷を探している。それも一番のだ」

「そういう話でしたら、貴方様が先ほど見ていた奴隷が一番ですね。ただ、あの竜神人は、前の主人を殺しているのです、ちょっと扱いを間違えると命の保証は致しかねますが…」

「面白い。いくらだ」

「そうですね。正直私も扱いに困っているので、デューク銀貨12枚で如何ですか？」

「ふむ…、まあよいだろう」

「約束の木は使いますか？」

黒沢明人は、その初めての単語に困惑した。そしてフエイにこそこそと聞いてみた。

「要するに、奴隷が暴走したり襲ってきたりしたら、対になる枝をフルと、激痛で動けなくなるという仕組みです。私たちにしてみれば呪いの木ですよ」

とフエイは、こそこそと説明した。

黒沢明人はなるほどと頷き、要らん、と答えた。

「しかし、あの竜神人は、取り分け危険なんですが…いいんですか、

正直、命の保証は無いですよ」

黒沢明人はどこまでも冷静だった。

「構わん出せ」

そう言うと、デューク銀貨12枚を渡した。

奴隷商人は、諦めたように檻の扉を開けた。

「お前の新しい主人だ」

そう言うと、足枷、手枷を外した。

竜神人は立ち上がって「旦那、あつしは自分より弱い奴の下に就くつもりはないですぜ」、そう言いながら檻から出てきた。

「ほう、では試して見たらどうだ？」

「旦那、それは端から承知の上。では行かせてもらいやす！」

そういうと竜神人は一気に間合いを詰めてきた。並みの速さではない人間には不可能な速さだ。だが黒沢明人にはそれらがスローモーションのようにゆっくりと感じた。

竜神人は、間合いを詰めた後、一見無防備に見える黒沢明人の顔をめがけて強烈に右ストレートは放ったきた。が、黒沢明人は敢えてギリギリ避けた。

しかし、それは想定済みだったのだろう。体を下げて左足での回し蹴りが黒沢明人を襲う。しかし、黒沢明人は素早いバックステップでそれをかわす。

次は黒沢明人が動いた。竜神人に対して一気に間合いを詰める。竜神人は慌てて右ストレートを放つが、黒沢明人は、それを左手の手の平で受けて、右腕でブローを腹にねじ込んだ。竜神人は、ぐつ、と唸って地面にしゃがみこんだ。

全ては一瞬の出来事であり、それを見切った者はいなかった。

黒沢明人は、無表情で言い放った。

「まあ、そこそこ合格だ。そういえば聞いてなかったな、名前は？」
竜神人は喘ぎながらなんとか答えた「ブロン・バーリエンス…宜しく旦那」。

奴隷商人は呟いた。

「竜神人を素手で倒すなんて、なんて方だ…」
フェイ・アルディオーネに至っては言葉も無い。

黒沢明人は、ちよつと考え、まあ正直に話すのがどちらにとっても良いことだと結論づけた。

奴隷市場を離れ、中央広場向かう道すがら、どうにも我慢できなくなつたのだ。

「フェイ、ブロン。あまり言いたく無かつたのだが、なんだ、お前からちよつと臭いな」

真つ先にフェイが反応した。

顔を真つ赤にしながら、「もう何ヶ月も水浴びしていないんです。

ずっと檻の中だったんですから！」

ブロンが答えた。「まあ、あつしも同じ口で…」

黒沢明人はどうしたものか悩んだが。公共の風呂なんかないものかと周囲を見渡す。が、そう都合よく見つかるものでもなく。宿に戻つてディートと相談することに決めた。

第十一話 五人の仲間達（前書き）

フェイの明人の呼び方ですが、「アキトさん」から「ご主人様」に変わりました。

第十一話 五人の仲間達

黒沢明人が宿へ戻ったのはまだまだ明るい3時くらいだった。即決してしまつたかな？埒も無いことを考える。

まあ現実に戻つて、とにかく、フェイ・アルディオオーネとブロン・バリーエンスを風呂に入れなければならない。

デイト・ウエルヘンの帰りを待つのは勿体ないだろうと、宿の女将に聞いてみることにした。そもそも本来ならこれが一番の選択肢なのだが…。

「お風呂？」

「体を綺麗にする所を探しているのだが…」

「それならサウナかねえ。でも高いよ。上級階級のサロンだからねえ。その不衛生なお二人さんは入ることすらできないかも知れないねえ。なんだつたら桶に水を入れて、布と一緒に部屋へ持つていくよ」

「それは助かる」

「でも髪がねえ…、もう随分長いこと洗ってないんでしょう？ちよつとやさつとでは…。石鹼水を使わないとダメだろうねえ」

「それはどこで手に入るんだ？」

「私も偶に使つてているからね。別けてあげられるよ。ただし、高級品だからね使つた分だけ請求するよ？」

「是非も無い。宜しく頼む。フェイ、ブロン、好きなだけ使え。では上へ上がるので宜しく」

女将は、何々と笑い「はいよ」と聞く者を安心させる響きのある声で言葉を返した。

黒沢明人を先頭に3人は、並んで階段を登つていく。その時、黒沢明人の後についてきているフェイが、「ねえ、ご主人さま」と、声かけた。黒沢明人は、足を止めずに後を振り返つた。

「なんだ？」

「私、まともな服を着たいのだけど、その辺の待遇を聞かせてもらえるとありがたいわ」

「ああ、そうだな。その格好は官能的すぎるな」

「なによ、分かっていたの？」

「いや、明日買いに行こうと思っていたところだ。今、二人が買い出しに出かけているところだな」

「二人というと例の女性達？」

「ああ、帰ってきたら自己紹介しよう」

もう3人は部屋の前に着いていた。手前が黒沢明人の部屋で、奥がリーナとデイトの部屋である。

黒沢明人は、フェイを奥の部屋へ、ブロンを手前の部屋へ入るよう指示し自身も手前の部屋へはいった。

「ところで、聞きたいと思っていたことがあるんですが、旦那は何者なんです。竜神人のあつしと素手で戦って勝てるなんて正直、常識外れですぜ。あのブローは全く常識外れにも程がありませんぜ。」

「ああ、昔剣術と格闘技をしていてな。あんなもんじゃないぞ」

「格闘技とはなんでやす？」

「片手を出してみる」

その黒沢明人の言葉にブロンは、ヒヤリとした恐怖を感じたが、興味は勝った。

「こうでやすか？」

黒沢明人は、その片手を手に取り、ぎゅと捻った。

「うお！」

ブロンは、悲鳴を上げて楽な体勢に移行するが、それこそが技を決める最後の体勢なのである。そして案の定、ブロンは腕に走る激痛で動けなくなった。

「ま、参りやした！」

黒沢明人は、そつと腕から手を話した。

「まあ、これは初歩の初歩で、格闘技の中でも関節技と呼ばれるものだ」

「ふう、あつしは仲間内の間でも最強だったんですがね。旦那にかかれば子供のようなもんでやすな」

「まあ、実際使うことは滅多に無い。中でも殺人術に限っては使う機会もあるかな」

黒沢明人はそう言うと、部屋の片隅にある机の椅子に座った。そういや、女性3人は同じ部屋に泊まるのか？この部屋にはベットが2つしか無いが…。後で聞いてみるか。

黒沢明人が物思いに耽っていると、扉が二回ノックされた。「どうぞ」

黒沢明人が答えると、女将が桶を持って入ってきた。桶の中にはたつぷりの水と布、そしてワインの瓶程のボトルにすこし濁った水が入ってあった。

「この便の中身が石鹼水よ。少量でも大丈夫だから、ちようど良い具合になるまで少量ずつ掛けるがコツね」

「は、了解しやした。全く以てありがたいことでやす」
黒沢明人も深く感謝した。

「何言っているのよ。これも商売の一環だよ」そう言うと豪快に笑った。

「それじゃあ、次は娘さんのところに持って行くかね」
そういうと女将は、静か去った。

小一時間ほどで2人の準備はととのった。服を除けばもう臭いことは無いだろう。髪もさっぱりしている。

服が無いという点に関しては、黒沢明人もブロン、フェイも同じ立場だ。さて、俺の場合、迷彩仕様の特注品を買わないとダメなんだろうな。まあ拘りがある訳では無いが…。

暫くして、ブロンとフェイが布で全身を洗い、頭を洗い終わったころ、リーナとディートが帰ってきた。

リーナとディートが部屋の扉を開くと見知らぬ飛び抜けて美しい女性が出た。それもボロボロでありながらも官能的な服装で。これは

フェイのなせる技である。リーナの持っていた服の束が地面に落ちた。

リーナとディートは、扉を締め、そして黒沢明人の部屋へと急いだ。二回ノックすると、「どうぞ」と黒沢明人の返事が帰ってきた。

「アキト様！部屋に知らない美女が！つてその方も誰ですか？ひよつとしてウエルデンへ向かう為の人材という奴ですか？」

ディートは一気にまくしたてた。どうやフェイを見て混乱しているようだ。

「奥の部屋にいるのはフェイ・アルディオーネ、耳を見たか？亜人間だ。そして彼がブロン・バリリエンス、竜神人だ」

「旦那、フェイはエルフでやす」

「エルフらしい」黒沢明人は訂正した。

リーナはキョトンとしていたが、ディートは「エルフ…、よりにもよつてエルフ…、まさかアキト様、人材に夜伽の相手まで探してきたのですか!？」

異常に興奮するディートに、黒沢明人は「落ち着け」とベットに座らせた。

「彼女の故郷は、ウエルデンだ。そして彼は護衛だ。強いぞ龍神人だ」

「なるほど、解りました。そうですか。となると女性あの服…、この方の服もなんとかしないとダメですね」

「どうやら落ち着いたようだ。」

「なんとかなるか？」

「サイズを測つて買つてきます。取り敢えず一着買つて、後は明日買うのが良いかな、時間も無いし」

ディートがリーナに声をかけた。

「行くわよ、リーナ」

「リーナは疲れましたあ」

「行・く・の！」

「はあ〜い」

そうして怒涛のようにやってきた台風は、低気圧となって去って行った。

黒沢明人は、フェイを呼ぶと、部屋で説明を始めた。

「彼女らが君らの知らない、相棒だ。全員でリーナ、デイト、フェイ、ブロン、俺だな」

フェイは呆れたようにつぶやいた。

「この人数では、3つの森どころか、城塞都市ウエルマンに着けるかも怪しいわ…」

三人がリーナ、デイトが帰ってくるのを待っていると、4時位になっていた。

リーナ、デイトはへろへろだったが、フェイもブロンもサイズはぴったりだった。

フェイも満足気に「ようやく生き返った気分だわ」と喜んだ。

ブロンは「あっしはこんな服を着るのは初めてで」と複雑な表情をした。

第十二話 城塞都市ウェルマン目指して

二日目の城塞都市ウィニツクは、朝から買い物に出かけるようになっていた。

そして、服屋で黒沢明人が食い下がっていた。

「どうしてこの柄の服が作れない」

「どこのお国のお方が存じませんが、少なくとも私の知る商店では売られていないんですよ」

「色を塗れば良いのでは？」

「そのような綺麗な柄はできませんよ。随分ばやけた色彩になるかと」

「そ・う・か……」

黒沢明人はがったかりした。となると他の色だ。ミリタリー色、ミリタリー色は無いのか？

黒沢明人には譲れない拘りがあるらしい。

ちよつと時間がかかりそうなので、リーナとディートは、先にフェイ、ブロンを連れて店を回った。

ディートに何度も試着させられブロンは、正直辟易し、リーナと服を選んでいるフェイは、実に楽しそうだ。

「本当にいいの？こんな高価なもの」

「大丈夫です、お金も頂いてますし」

「そつかあ、やっぱ私運氣上昇中かも。あ、でも今後の旅を考えたら、ちよつと滅入るわね……」

「今度の旅を考えるのが滅入るって何です？何かあるのですかあ？」

リーナは、不安な様子でフェイの顔を覗きこんだ。

「あら、聞いてないの？…心配させたくなかったのかな？」

「どのくらい危険なんですか？」

「そうね。普通なら20人程の護衛が必要なところをたつのかみびと竜神人とは言えなかったの一人とアキト様の二人で乗り越えようとしているのよ」

「ああ、そういうことですかあ。なら心配は無用ですね」

フェイは首をかしげた、一体なにが「心配は無用」なのか？あのアキトと名乗る御仁は、それ程までに強いのか？

確かに龍神人を素手で倒したのは、見事なことではあるけど…。

まあ、考えても仕方無い、きっと大丈夫なのだろう。

「もう、いいですよ。適当に見繕ってくださいえ！」

ブロン悲鳴である。

どうやらいじられることに限界を感じたのだろう。リーナとフェイは、フェイの服が概ね決まったので最後の精算をすまし、店を出てブロンがいるらしき店に行くことにした。

そこには上半身裸の筋骨隆々の男が立っていた。ブロンである。身長190cm位、体重は100kgを軽く超えているだろう。腹の左側には青いアザができていた。黒沢明人の攻撃を受けた跡だ。事情を知っているフェイは、へえと関心しながらその痕を見た。

「まだ痛い？」

「いや、頑丈が取り柄でさあ。まあ、食らった時は、死ぬかと思いやしたがね。あの小さな体の何処にアレほどの力が…」

デートが割り込んできた。

「え、どうしたの？何そのアザ!？」

「いや、旦那とひと悶着あって、この様ですよ」

そう言っただけでブロンは笑った。

黒沢明人は、あつちこつち駆けずり回って、ようやく茶色と緑の間の色をした服を、何着か買っていた。どれも同じ物である。

「俺は大丈夫だ」と言っていた黒沢明人だが、そうでもなかったようだ。

黒沢明人とを除く全員が顔を見合わせた。

「ん…変か？」

「いえ、私たちの中で一番偉い方の服装がそれでは、勘違いされますよ」とデート。

「その色に何か拘りがあるの？」とフェイ。

「ああ、この色は野戦で見つけられにくい色なんだ。どうも派手な色は落ち着かなくてね」

そういうと黒沢明人は、鼻の頭をカリカリと搔いた。何かの癬だろうか？

「まあ、なんだ。次は武器屋だな」

そういうと黒沢明人は外にでた。

ディートは、慌ててブロンの服の精算を済ませて、リーナ・ブロン・フェイ・ディートの順で店を出た。

予め女将に道を聞いていたので、店はすぐに見つかった。中に入ると鉄の臭いが鼻についた。

「店主、この四人に武具を見繕ってくれ。実践的で最高のものをだ」黒沢明人はそういうと、後の四人に振り返った。

リーナが戦斧をふらふらとしながら構えようとしていた。

「リーナ、お前にはまだ流石に無理だ」

「はい、ちよつと重いですね」

嫌、ちよつとでは無いが…、黒沢明人は内心でつつ込んでいた。

結局、ブロンが戦斧と剣で、リーナとディートは短弓に矢と、プレートメール、フェイは長弓という感じになった。後、全員に短剣も持たせた。

そして次の日から一週間程、黒沢明人はブロンに剣の稽古をつけ、リーナとフェイは、ただひたすら弓で矢を放った。

最初リーナは弦を引くことすらできなかったのだが、一週間目にしてどうにか構えを取れるようになった。だが実践はまだむりだろう。それにリーナを戦いに巻き込むつもりもない。

ディートはそこそこ矢を放てるのだが、まだちよつと不安である。最も彼女も戦いに巻き込むつもりも無い。

フェイのテクニクはすごかった。100m先の中心を射抜くのだ。彼女には死角をカバーしてもらおうという考えに至った。

次の日、女将に別れの挨拶をし、黒沢明人一行は、城塞都市ウエル

マン目指して城塞都市ウィニツクを後にした。

第十三話 城塞都市ウエルマンへの道中

城塞都市ウイニツクの周辺は大地の榮譽に恵まれているのか、城塞を出ると延々と田畑が広がっていた。流石にこの辺は治安が良いのだが、やがて未開拓の森が近づいてくると。まだ安全だというのに黒沢明人以外、皆緊張を隠せないようだった。

ちなみに今回は、御者がブロン・バーリエンスでその横に黒沢明人が座っていた。つまり、馬車の中は今も女しかない。普段一般的な人の10倍の耳を持つ俺は、通常人レベルまで落としていた。

この世界では、情報は様々形で伝達されるが、一般庶民の間では、吟遊詩人がその役を引き受けているのだが、黒沢明人なる人物の物語はでていない。アレほどの力を持つ黒沢明人である。それは不可思議なことであった。

「ねえ、アキト様は何歳なの？」ディートが全員に質問を投げた。全員が顔を見合わせる。

「どうしてだろ誰も聞いていないねえ」とリーナ。

「見た目は若いわね。20歳位でもその年齢にしては達観しているようだし、剣術でブロンを凌駕する、となると…」

「…となると…何歳？」

残りの二人がずっこけた。

「フエイさん、それを知りたいんですよう」

リーナは「よし」というと両手をグーにして気合を込めた（つまり）

、そして馬車の外に顔を出して、馬車の走行音に負けずと叫んだ。

「アキトさま」

黒沢明人は、気だるげに答えた。

「なんだ？」

「アキト様って何歳なんですか？」

「あー今年、26歳になったところだ」

「ありがとうございます」

リーナは馬車の中に引つ込むと「26歳だつて」と報告した。

「もう、そこそこの歳ね。気前が良くて精悍で整った顔立ち。恋人の一人二人はいるんじゃない？」

フェイの言葉にリーナとデイトは、ガクと肩を落とした。

しかしリーナのたち立ち直りは早かった。

「確か、並行…えっと、つまり、この国に来てまだ間も無いそんなんですよ」

リーナには見えた。二人の瞳が爛々と輝くのを！

「あわわ、待つてください！あたしも…えい、メラメラ！」

「リーナ…貴方には無理よ…」

デイトの助言であつた。

「もう、あ、それはともかく、ちょっと聞いておきたいのだけど、二人とも能力者？」

フェイは、よく解らない二人に直球を投げた。

デイトが答えた。

「私は人間よ、ちなみに23歳。なんの能力も無いね。良いのか悪いのか解らないけど…でね、ある村の村長の一人娘だったのだけど、軍人に村を取り上げられちゃった。まあ、そんなもんよ」

次にリーナが答えた。

「私は16歳、遠くの声が聞こえるの。会話とか。地面の下での会話も分かります。開花したのは10歳の時」

そういつて、前髪につけている飾りを取り去った。額に菱形のエメラルドグリーン宝石が埋め込まれていた。

「10歳の時にこれが出たの。両親は必死でそれを隠そうとしたけどダメだったわ。油断した時に見られてしまったの。で奴隷商人に売られ、両親は町を追い出されたと聞いた…」

前髪に飾りをつけると「さあ、次はフェイさんですよ」と明るくフェイを促した。

「私はねえ。そうね。皆知っていることだけど、故郷は今向かっているウエルデンよ。辺境自治都市で領土は広いけど不毛の地よ。毎

日のように魔獣が現れるしね。まあ、その皮が村の財源の一つなんだけど」

フエイは一息着くと、続きを話始めた。

「ウエルデンは、亜人種にも能力者に対しても差別は無いわ。代表自体が能力者ですから。」

私は、奴隷商人に夜に紛れて連れ去られたのよ。それがつい一ヶ月前の話」

そして今度はまた黒沢明人に話題が移ったが、出た結論は。

「良しも悪しも善人」

だった。

最初に異変に気づいたのは、リーナだった。リーナはまた窓から身乗り出すと明人に叫んだ。

「アキト様。この先で殺し合いをしているようです。片方は山賊です」

黒沢明人とブロンは顔を見合わせた。

黒沢明人、走る馬車から飛び降りると「先に行く」と言うと、猛烈な速さで駆け出した。あつという間に姿が見えなくなる。

「旦那、足も速いでやすか…」

リーナに距離を聞いておけばよかったかな。と思った刹那、キン、カンと剣と盾のぶつかり合いの音が聴こえてきた。

更に近づくと視認できる範囲で、山賊と思われる統一性の無い装備をした者が23人、対して商人と思われる男の護衛が7人、地面には何人かの死体が転がっていたが、明らかに商人側がフリだ。

黒沢明人は衛星を操るかとも思ったのだが、この見通しの良い場所と敵人数から衛星を使うまでもないと判断し、背中への反りの無いブレイドを引き抜いた。

「商人、加勢するぞ」

そう叫ぶと一番近くにいた山賊にブレイドを振り落とした。山賊は剣でそれを防ごうとしたが、紙切れのように山賊の剣は、切断され

山賊もとろも両断された。

それを見た山賊が浮足だった。そして2分とかならず山賊は全滅した。

黒沢明人のあまりの強さに商人側の戦士が、黒沢明人に近づいてきて疑問を口にした。

「ありがとうございます。おかげで助かりました。お名前をお聞きして宜しいでしょうか？」

「ああ、構わない。俺の名は黒沢明人。旅人だ」

「それほどの腕で旅人とは勿体ない。あ、失礼。私の名はグルド・エイヘン。助けてもらって感謝します」

黒沢明人はどうってことない無表情な顔で、

「なんてことは無い」

とあっさり述べた。

そこへ、急ぎの馬車がやってきた。ブロンである。

「ありや、もう終わりやしたか。残念、旦那の戦うところを見てみたかったのでやすが…」

馬車の中の三人の女性も互いに急ぐように出てきた。

「アキト様、大丈夫ですか！」「」

三人がハモツタ。

「ああ、問題無い」

黒沢明人のいつもの無表情に三人は安堵の息を吐いた。

黒沢明人の殺した山賊はとても運べる状態では無いので、片付けるのを諦めて、場所を移動した。

商人が黒沢明人に話しかけた。

「目的地は、城塞都市ウエルマンでしょうか？」

「ああ、その町を経由して、ウエルデンへ行く予定だ」

「おお、それは奇遇です。実は私もウエルデンで商いをする予定なのです。もし宜しければ一緒にどうですか？」

ほう、無料で用心棒を得ようと。まあ、いい。些事なことだ。

「そういう旅も良いな。道すがら商売のことも聞いてみたものだ。いいだろう」

黒沢明人はそう答えた。

第十四話 セリヨン・ハーネスト（前書き）

いやあ、仕事が忙しいのなんの。現実逃避的に書きました（笑

第十四話 セリヨン・ハーネスト

「私の名は、セリヨン・ハーネストと言います。どうぞセリヨンとお呼びください。これといった拠点を持たないしがない旅の商人です」

商人の自己紹介に黒沢明人も答えた。

「俺の名は、黒沢明人だ。明人と呼んでくれ。人探しの旅をしている」

「ほう人探しですか、大変ですな。ところで、アキトとは、珍しい名前ですね。どこの出身ですか？」

「遠い遠い国だ。もう帰ることもできない程にな」

黒沢明人はそうぼかすと、

「仲間を紹介しよう。右から、ブロン・バリエンス、見ての通りたっのかみびと竜神人だ。次にリーナ・サーリエント、能力者だ。デイト・ウエルヘン、ただの人間だ。フェイ・アルディオーネ、見ての通りエルフだ」

「ただの人間だ、は酷いですよ、アキト様」とデイト。

「この国では、そうの方が都合が良いのだろう。立派な能力だ」

「能力ですかねえ……」

デイトは、納得しかねつつ唸った。

「それはそれは、変わった組み合わせですね。しかしよく竜神人を従えていますね。とてもプライドの高い種族と聞いていますが……」
それにブロンが答えた。

「あつしも最初は、そう思ったんでやすがね。旦那に、素手であしらわれて、それで、まあ、取り敢えずこの旦那を見てみよと思っただけです。しかし短い旅で旦那の凄さが解りやしたよ。この先何をしていくのか側で見たくなっただけです」

「なるほど信用されていますね」

セリヨンの声には若干の驚嘆が含まれていた。

「しかし素手で竜神人を負かすとは、アキトさんも能力者でしょうか？」

「人間では無いがこの世に似た者はいない。しかし、まあ能力も確かにあるので能力者でも構わんよ」

「さようでございますか」

セリヨンは、黒沢明人の戦いを目の当たりにしている。まるで鬼神の如きだ。決して敵に回してはいけない御仁だろう。

「さて、夜までにはまだまだ時間もありますし、城塞都市ウエルマンへ向かいましょうか」

「そうだな。俺達が先導する」黒沢明人が答えた。

「宜しく願います」

黒沢明人は考えに耽った。この世界で能力者や亜人間は、嫌悪の対象とされている。

しかるにセリヨンの態度からは、まったくそれを感じなかった。俺と同じような考え方の人間なんだろうか。拠点を持っていないと言っていた、根無し草か知識も豊富そうだ。普通の人間とはまったく経験の度合いが違うからなのかも知れないな。

結局、今日はそれから何も無かった。

夕暮れ時のまだ明かりのある内に野営の準備が始まった。

食事が始まり、多少の酒もふるまわれた。

その席において、黒沢明人が疑問を口にした。

「そつえば、城塞都市ウエルマンへの道は、それほど危険だとは聞いていなかったが」

黒沢明人はさりげなくセリヨンに質問した。

「それは、ほんの昔の話ですよ。今この国は戦争中ですからね、治安維持に兵を廻す事が出来ず悪化しているのです」

「なるほど、それでは山賊が跳梁跋扈してもおかしくないな。

しかし、そうなるとウエルデンへの道、1つ目の森はかなり危険なのではないか？」

その間にセリヨンが答えた。

「ウエルデンへの街道を通る商人は少ないんです。だから収益を上げることはできないでしょう。」

そんな状態で人数を増やすのは、恐らく無理でしょうね。彼らの主な収益は副業ですし」

「副業？」

「ええ、そうです」

「山賊の副業というと、麻薬関連か？」

「いえ、そんな物騒なものではありません。それが護衛なんですよ。護衛：、なるほど。それはうまく考えたものだ」

つまり、山賊の手の者に護衛を頼まないと山賊に襲われるというわけだ。どっちにこけても山賊の儲けになる。

首領は、なかなかの知恵者だな。黒沢明人は感嘆した。

そして黒沢明人は、一番疑問に思っていたことを聞いてみた。

「ところでウエルデンへ行くには、護衛代も高くつくし貧しい自治領だと聞いている。そんなところへ行って商売になるのか？」

セリヨンは少し間を開けて答えた。

「売れるのはもっぱら薬ですし、実のところ、赤字です。行き掛けの駄賃にこつそり村人を誘拐して奴隷として売る商人が多いですな。村の代表は実態を把握しているのか、どうしようもないのか、いずれにしろ未来は暗いですな。なんとかしなければなりません。とは言え私は商人です。私にできることは限られていますしね」

黒沢明人は、最大に広がった疑問を口にした。

「セリヨン殿、何故そこまでウエルデンに肩入れする」

セリヨン殿は、少し黙り込み、そして答えた。

「まあ、色々ありましたね。ところでアキトさんは、どうしてウエルデンへ？」

黒沢明人は、素直に答えた。

「人探した。ダナ・ハーグマンを知っているか？」

「先代の代表ですな。戦争で武勲を立てて、辺境で不毛とは言え自

治都市を立ち上げた偉大な人ですよ。画期的でしたね。人間も能力者も亜人間も公平に扱う特殊な都市です」

「先代は死んだと聞いたが」

「もう20年前も話ですよ。今は同じ能力を持つ娘が代表をしています。が無学で経験が少々足りませんね」

「同じ能力というだけで俺には何倍もの価値があるがな」

黒沢明人は、少々楽観的であるが未来の希望が見えた気がした。セリヨンは首を捻った。

その後の三日間の旅路は、魔獣の大群に一回だけ襲われただけなんです。

この戦いでは商人付きの護衛は、護衛に徹し、黒沢明人の鬼神の如き活躍とそれには劣るがブロンも大活躍をした。

ある護衛が聞いた。

「アキト殿、そのブレードは一体どういうブレードですか？」

「この世に斬れない物は無い、といった代物だ」

「はあ、それは凄いですね…」

無駄の無い動き、異常な速さ、そして斬れない物の無いブレード。

最初の2つだけで十分だと言うのに、底抜けの強さだ。

聞いたことの無い強さだなと護衛は思った。

だが心強い、仲間になってくれて大感謝だな。

収入は多いが、死ぬ確率も高い。俺の腕は大したことない。

自分の身を守るように心掛けよう。

優秀な人材は、皆戦争に行っているのだった。

第十五話 城塞都市ウエルマン（前書き）

デートが途中からデイドに変わっていた（汗）ロードス島戦記
だよw

町の名前を間違えたり、いやはや困ったもんです（笑）
今回ちょっと短めだけど勘弁して下さいXD

第十五話 城塞都市ウエルマン

黒沢明人一行が城塞都市ウエルマンについたのは城塞都市ウィニツクを出て3日目の夕頃だった。

一行の車列が跳ね橋に差し掛かると、温和そうな顔をした警備兵が二人立っていた。

「良かったですね。もう跳ね橋を上げようと思っていたところですね警備兵の一人が言った。

「私の名は、趣味で警備兵をしているガルガン・グリュージュ。いつもはもっぱら事務所にいるのだが、

書類に判子を押すだけの仕事はもうウンザリだね。いや、それは兎も角としてそちらの竜神人は、お仲間ですか？」

「ああ、そうだ。いつも役に立って貰っている」

「旦那の強さとは比べものにならないすがね」

「ほお、竜神人を就かせている上に、主人の貴方の方が強いとは、いやはや恐れいる。

さあ、入って下さい。この町は比較的人間外に慣れている者が多いのであまり問題は無いでしょう。

何かあったら私の名前を出せば、安心してね」

黒沢明人は、その会話に疑問を感じた。

「何故、そこまでしてもらえるのか、裏があるとも思えないしな。教えて頂けないか？」

ガルガンは頷いてから答えた。

「まあ、疑問に思うのも尤もですな。私はエルフの娘の里親でね。

人と亜人間が共生しているのを見ると、いつでも助けてあげたくなる」

ガルガンの嬉しそうな顔は、同人を見つけたからだろう。親心程同じでは無いだろうが、まあ合点がいった。

「俺は黒沢明人。明人と呼ばれている」

「アキト殿、では入城して下さい。後の馬車も仲間ですか？」

「ああ、あちらは商人だ。主に薬を扱っているらしい」

「そうですか、では後の方も一緒にどうぞ」

黒沢明人達一行が入ったところで、ゆっくりと跳ね橋が上がり、代わって落し格子が降りてきた。

エルフの娘の里親と言っていたが、この町には差別が無いのか、とキヨロキヨロ辺りを見渡してみたが、人間以外は往なさそうだった。「どうしたんですか？アキト様」

挙動不審な黒沢明人にリーナ・サーリエントが話しかけた。

黒沢明人は、

「いや、ちよつと気になることがあってな。

まあ、それよりも取り敢えず宿を探そう」

と中央広場へ向け馬車を走らせた、といっても手綱を握っているのはブロンだが。

この町でも料理別に一階が居酒屋で二階が宿になっていた。

明人は、セリヨン・ハーネストに意見を伺った。

「私はこの国に疎いので、どの宿が良いのか察し兼ねるのだが、良い店はないものだろうか？」

するとセリヨンは、以前言った黒沢明人と同じく、

「リーナちゃんが痩せすぎなので肉料理が良いんじゃないでしょうか」

と答えた。

ということ、今日は焼き鳥にすることにした。

旅の間中、食事は味の薄いスープに乾燥肉だったが、乾燥肉は味が無い上に異常に硬かった。結局黒沢明人は、ほとんど食事をしていない。

一度、リーナとディート・ウェルヘンが「アキト様、このまま何も食べないと力が出ないを通り越して、死んじゃいますよ」と心配気

に話しかけたのだが、黒沢明人は平然と言つてのけた。

「俺は何も食べなくても平気だ。食べるのは娯楽としてだが、味が薄くてマズイ料理ばかりだな」

と思いつつ、今度こそ味の濃い美味しい料理に期待をし、肩を落とした。結局、黒沢明人の料理は、ブロン・バーリエンスが平らげた。リーナとディートは、黒沢明人がどんな食生活を営んでいたのか、非常に興味深く思ったが、実物を食べなければどんな話を聞いても何とも言えないな、と諦めた。

「しかし旦那、食べる食べないは別としても、娯楽の為だけに食事をするなんてまるで貴族みたいでやすな」

リーナとディートが見事に揃つて叫んだ。

「それよ!」

「そういえば、アキト様は士官なんですよね?」とディート。

「しかんつて何?仕事?階級?」とリーナ。

黒沢明人は、この世界の士官の仕事は知らないが、まああまり変わらないだろうと思ひ簡素に答えた。

「部下に指示を与える職業だ」

ディートが首を傾げた。

「つまり、管理職?」

「ああ、そうだ。軍隊のだから」

リーナとディートの悲鳴が上がつた。歡喜の悲鳴だ。フエイ・アルディオーネはただ感心しているようだった。

「しかし旦那、借りにも管理職にありながら、傲慢さというか、人を見下すというか、そういうのが無いでやすね」

黒沢明人は、この世界はどうなっているんだと思いつつ麦芽酒を飲み干し、答えた。

「俺の国では、士官は部下の命を落とさないように作戦を実行する義務がある。命は何よりも尊いものだ。」

「現実には戦争が絶えないのだがな」

「それでやすか、命は何よりも尊い…この国も含めた周辺国家にも

真似をして貰いたいでやすなあ」

「それはそうと、ブロン、この町に入って亜人間を見たか？」

「みてないでやすね。寛容な町だと思っていたのでやすが…」

「そうだな…」

解らないことは知ってそんな奴に聞くのが良い。

黒沢明人は女将を呼んだ。

「麦芽酒のお代わりと質問がある」

「はい麦芽酒ね。で質問ってなにかしら？」

「この町は、亜人間とかは少ないのか？」

「自治都市ウエルデンには到底及びませんが、少なからずいますよ」

「それにしては一向に見ないが…」

「お客さん、夕方から来なすったのかしら？」

「ああ、そうだが。関係あるのか？」

「いえね、暗くなるとウィニツクの奴隷商人が亜人間を誘拐するのですよ。」

ガルガンさんがいる時は良いんですけどねえ。他の警備兵は賄賂でころつと態度を変えるのよ。

私の知り合いも連れていかれたわ」

そついうと女将は肩を下ろした。

黒沢明人一行は、翌朝早く自治都市ウエルデンへ向けて馬車に乗った。

城塞都市ウエルマンは、入る時はチェックはなかったが、出る時は荷物検査された。

リーナ、フェイは、誘拐したのかと執拗に探りを入れられたが、本人達のいでたちや言から問題無いとされ、ようやく城塞都市ウエルマンを後にすることができた。

第十五話 城塞都市ウエルマン（後書き）

本来ならここでガルガンの娘を明人が助けないといけなのだけど、魔界の雷帝とちよつと変えます（って今までも全然違つではないか、と言われそうだw）

第十六話 自治都市ウェルデンへのその1（前書き）

なんかまた都市名が混乱していた…

やべ、実はまだ地図が無いんだ…おいおいXD

第十六話 自治都市ウエルデンへのその1

城塞都市ウエルマン周辺の素晴らしい畑風景を横目に、この町はこれからもそこそこ栄えそうだなと思う黒沢明人だが、だが、肝心なものが無いように感じた。それは恐らく特産品だろう。食料はどこでも生産できる。然るに食料が国に行き渡り過ぎると一気に経済が悪化する。この世界でもなんらかの対策をしているのだろうか？

城塞都市ウエルマンをでて一時間程であろうか、一つ目の森はエディ・グラープスの人口付近に何やら竹でできた長い棒が一本1m程の高さで横に固定されていた。その横には雨露をしのげる程度の小屋が建てられているのが見えてきた。恐ろしくボロい。

そこに、若干錆びている武具といい、そして統一感の無い武具をまとった集団。間違いなく山賊だろう。

最初に発見したのは、黒沢明人だった。その気になれば普通の人間の数百倍の視力を持つ。視覚リーダーが捉え、部分的にズームしたのは、これは基本装備みたいなものだからだ。切ることもできるが、何かと便利なのでそのままにしていた。

黒沢明人は「山賊がいるな」とリーナに訪ねた。

リーナ・サーリエントも山賊を捕らえていた。

「今日は獲物がこないなあ」

「まだ早いからな。寝てる」

そんな会話をしていますね。人数は28人います」

ブロン・バーリエンスが感嘆な呻きを上げた。

「あつしにはまだ何も見えないですがね。つーかりーナさんはつくづく恐ろしいお方ですね。見えもしないことがわかりやすとは」

転寝をしていたフェイが、すくつと目を覚まし起き上がった。実際には起きる前に少し覚醒していたのだろう。話の内容に飛び込んで来た。

「え、ちよとちよと何よ。私にも見せなさい！」そういうとフェイ・

アルデイオーネは、馬車の前の幕をどけて前方を見た。

「…エルフの私にすら見えないなんて…」

そういうとガツクリと椅子に座り治した。「私のプライドはいったい…」

そんなフェイにブロンが後を向いて話しかけた。

「このお二方が異常でやんすよ。そう落ち込むこともやす」

そして、デートに至っては「私なんてただの人間よ。何も無いのよ！」と叫んだ。

がしかし、隙かさずブロンがフォローを入れた。

「常識を持っていて、文字の読み書きができて計算までできるんだがしょ？」

「うん、まあ、そうねえ。これも立派な能力なのかなあ…」
そして、うんうんと頷いた。

暫く馬車を走らせていると、ブロンが叫んだ「アレでやすか！いやはや、これは、ちょっと見えないでがしょ」

フェイも頷いた「いくらエルフの目とは言え、あの距離はねえ」

等と色々感想やら述べているうちに、ついに横倒しになったバーの前に着いた。

すると割りかし真つ当な格好の割と年配の男が黒沢明人に話しかけた。

「ふむ、旦那は竜神人たつのかみびとを従えているのか？」

「従えているというより、俺がこいつよりも強いという証しみたいなもんだ。奴隷として買ったがね」

「ほう、ということは旦那も真つ当では無いようですね」

「どうだろうな、この国（この世界）では本気を出したことは無いがな」

「そうですか、因みに馬車の中は、誰が入っているのでしょうか。確認して良いですか」

「ああ、構わんよ」黒沢明人は、いつでも攻撃態勢を取れるように

腰のナイフに手を当てた。

だが意外な結果が帰ってきた。

「ほう、手錠も足枷も約束の木すら無い。逃げないのには訳が？」

「旅の仲間だ。俺は人身売買やら奴隷が嫌いだね。まあ、そういう教育を受けている訳だ。尤も奴隷を買ったので商人に儲けと、今後の商売に希望を持たせる者ども一員になってしまったわけだが……」

「そのような教育をする国は、近辺にはないですね。よっぽど長い旅だったのでしょうか。その不思議な柄の服の謎もとけるといいます」

黒沢明人は、これと違って興味無さ気に「まー、いろいろあるな」と簡素に答えた。

「ところで後の商人風の男とキャラバンを組んでいるのか？」

「ああ、主に薬が商品だと聞いている」

「では調べさせてもらいます」

年配の男はそう言うと、セリヨン・ハーネストの幌馬車へと向かった。

「おお、セリヨン」ではないか、年配の男は驚きすぎてむせてしまった。

「大丈夫かグラーゼン!？」

「いやいや、タダでさえ心の臓が弱っているのに、俺を殺す気がか、そついや何年振りなんだ？」

そう言つて、地面に座つた。セリヨンも並ぶ。

「いや、私は年に二回ほど街道を通っているがね」

「巡回表でズレたか。見直してもらつとしよう」

「そうか、また薬を売りに来たのか。しかし、赤字だろ？これではいつまでたつても金がたまらんぞ」

「最近、製紙工房に投資してな。手元はかなりあるんだよ。だから多少の赤字は全く問題無い」

「そうかそうか、何にしても良いことだ。逢えて嬉しいよ。帰りに

寄ってくれるか？」

「ああ、いいとも酒を買ってくれ」

そういうと二人で呵々と笑った。

そしてグラーゼンはすつと立ち上がり「ちょっと待っていてくれ」そう言つて小屋に入り、赤い布をも持ってきた。

「これを目立つ所に着けるんだ。それで一つ目の森はエディ・グラープスは無事通り抜けられる」

「それはありがたい」とセリヨンは丁重に預かった。

「しかし、この護衛の数で二つ目の森ワナ・グラープスを抜けられるのか？」

「威圧感が無いと、魔獣どもが喜んで殺しに来るぞ」

グラーゼンは心配気にキャラバンを見渡した。少し心配げな顔をした。

「心配無い、彼、アキトの強さは半端じゃないし、隣りの竜神人もかなりの使い手だぞ」

「そうか、なら良いのだが…」

「では行こう！自治都市ウエルデンへ！」

黒沢明人の合図を号令に、一行は一路自治都市ウエルデンへ向かつて一つ目の森エディ・グラープスに入つて行った。

第十六話 自治都市ウエルデンへその1（後書き）

指を動かすだけで首が落ちる…カッコイイ！

魔界の雷帝でいつも思ったものだが、理屈が解らない…。

なにか方法は無いか…

第十七話 自治都市ウェルデンへその2（前書き）

本編始まって初の本格的な戦闘になったかな？

と思わないでも無い。

魔獣の種類と名前は悩んだのだけど、もうなんでも良いや〜と開き直りました。

まあ、そんな感じですが、読んでみて下さいな。

第十七話 自治都市ウエルデンへその2

結局、一つ目の森エディ・グラープスの道中は何事もなく、むしろ静か過ぎる程だった。良くできた盗賊団だと黒沢明人は思った。ちらっと聞いた話だが、恐らく本来は用心棒代等も取っている。あげく、一つ目の森エディ・グラープスで引き返されたら、詐欺にも程があるだろう。

「あの橋を渡れば、二つ目の森ワナ・グラープスよ」

そう助言したのは、フェイ・アルディオーネだ。故郷の自治都市ウエルデンへ近づいてきたのかもしれない。

「ちよつと今後の方針を決定しなければな。馬車を止めてくれ」

「あいよ旦那」

黒沢明人らが馬車を止めると、後をついてきていたセリヨン・ハーンレストの馬車も動きを止めた。

「フェイ、すまないが付いてきてくれないか？」

「いいわよ」

黒沢明人とフェイは馬車を降り、セリヨンの馬車へと向かった。セリヨンの方も馬車から降り、結果黒沢明人の馬車とセリヨンの馬車の中間点ではちあうことになる。

「この先は、フェイとセリヨンが詳しいだろう。念のために聞いておきたくなつてな」

黒沢明人は二人に説明を求めた。

まずセリヨンが口を開いた。

「そうですね。いつきても前とは違う魔獣が多いことですな。強かったり、弱かったりという具合で」

「そうね。生き残る為に食いつ食われつ殺しあっていて、優位な魔獣が生き残り繁殖をし、数が増えたりしているわね。よく解らないのだけど」

そのフェイの言葉に黒沢明人は頷いた。つまり生態系がくるくると

変わっている森だということか…。

「となると問題は魔獣と人間の相性だな。生態系の中に人間は組み込まれていないだろうからな」

吉とでるか凶とでるか、入るまで解らない。

「まあ、今考えても仕かた無いな。襲われた時の為の体制を決めておきたい。

私とブロンは、積極的に攻撃する。セリヨン殿の護衛兵は、3人が私の馬車に、残りの4人がセリヨン殿の馬車と馬を守る。

セリヨン殿は、戦闘の間は私の馬車に入っていてくれ」

黒沢明人の説明を聞いてセリヨンは一も二もなく賛成したが、

「ねえ、私は？私の弓の腕はぴか一よ」

とフェイが不平を漏らした。

「そうだな、スナイパーとしてなら一流だろう。では馬車の上に乗って戦ってくれ。もしも司令塔がいたら、そいつを狙ってくれ。いない場合は、自分の判断で自主的に実行しろ」

「スナイパーっていい響きね。気に入ったわ。ところで私の矢は残り25本なんだけど、セリヨンさん持っている？」

フェイはにっこりと微笑んだ。

「商売用ですが、良品を100本ほど差し上げます。護衛を雇うより安いでしょう」

セリヨンは微妙な顔で、人差し指で頬をこりこりと搔いた。

「では、5分後にワナ・グループスに入る」

黒沢明人は、自分の馬車に戻ると、リーナ・サーリエントとディート・ウエルヘンに、

「もし魔獣が襲ってきたら、とにかく馬車から出るな。分かったか？」

と要望し、リーナとディートは「はい」と頷いた。

それぞれが準備を行ない5分後になった。

黒沢明人は、御者席に立ち、叫んだ。

「いいか！俺の指揮下にいる者の死は、俺が認めない。決して死ぬな、解ったか！」

護衛兵が「おう！」と返答し、馬車がゆっくりと加速を始めた。普通、命を捧げよと言う場面では無かるうかと思うブロンだった。やっぱり旦那は格が違う。

橋を渡り、ワナ・グラープスに入って一時間程経った頃だろうか、リーナが、なにかがいると黒沢明人に報告した15分後、予め予想していたため、素早い対応が可能だった。街道を塞ぐように二体の巨大な蠍さそりがこちらを威嚇している。

「森の中にいる蠍は蠍もどきで毒が無い、と聞いたことがあるが、どうなんだろうな」

黒沢明人が言うのとブロンは、「例え毒が無くてもあのデカイ針で刺されたらやばいっすぜ、旦那」

「それもそうだな。では殺るか！」

そういうと、黒沢明人は、ブレードを抜き放ち俊足の勢いで間合いを詰めた。そして一閃、頭を縦に切り裂いた。蠍は緑色の液体を放ちつつ動きを止めた。仕留めたか。

ブロンは、内心焦りを感じていた。蠍の甲羅が異常に硬いのだ。戦斧の渾身の一撃を受けても傷一つつかない。

それを見た黒沢明人は、なるほど相当硬いのかと認識を改め、ブロンに叫んで自分のブレードを投げた。

「ブロン、受け取れ！」

ブロンは、一瞬の判断で戦斧を投げ捨て、黒沢明人のブレードを受け取った。その瞬間、蠍の尻尾がブロンに襲いかかった。ブロンは一閃して尻尾を斬り捨て、頭にブレードを突き刺し殺した。あれほど苦心していたのが嘘みたいだった。

「旦那、このブレードどうなってんでやすか！切れ味が半端じゃないでやすよ！」

「なんでも斬れるぞ。迂闊に刃に触れるなよ。痛い目をみるぞ」

「了解でやす。しかし旦那はどうしやす？」

「まあ、色々方法はあるが無難に素手で殺そう」

「そ、それでやすか？」

相変わらず恐ろしい御仁だと、ブロンは再認識した。

「また来ました、今度は4匹です！」

フエイが叫んだ。

黒沢明人は、森から街道に姿を現した新手の一匹に、近づき思いきり蹴り上げた。

蠍は、頭を上宙に浮いた。腹を晒した蠍に対して回蹴りを叩き込んだ。バキと音がして蠍が折れた。

「アキトさま！」

「大丈夫だ！」

フエイの言わんとしていることは理解していた。もう一匹が攻撃の体勢を取っていたのだ。素早い動きで尻尾が飛んでくる、が黒沢明人は紙一重で頭を横にずらして避ける、そして、その体勢で尻尾を持ち右太もみに叩きつけへし折った。そして頭に拳をぶつけた。拳は蠍の頭を貫通し、地面に達した。

ブロンを見るとブロンの方も二匹始末したところだった。

その光景を観ていた護衛兵は、ぞくりとした戦慄を覚えた。我々では一匹でも殺せない。まるで現実感が無いその光景にただ呆然と自失した。

結局戦闘は二時間に及んだ。蠍達が撤退を始めたのだ。司令塔がいたのか、それとも生存本能か。

いずれにしろ殺した蠍の数は40匹を下らない。

黒沢明人もブロンも全身、緑の液体でずぶ濡れになっていた。

「風呂に入りたいな」

黒沢明人は天を仰いで呟いた。

その後、街道に散らばっている蠍の死骸を片付け馬車を走らせたのは、10分後である。

休憩していてもまた襲ってこられたら面倒だからと強行軍を決行することにしたのだ、この辺は人数が少ない利点でもあった。

黒沢明人は、まるで当然のように疲れ等感じていなかったが、たつのか竜神人であるブロンでも流石に多少ではあるが息が上がっていた。

「ブロン、そのブレードには力は必要無い。もっと力を抜いて流れるように戦え」

「へえ、了解でやす。どうも力を入れるのが癖になっているように……やすね。しかし旦那のブレードは凄いでやすね。どこで手に入れたのでやす?」

「俺のいた世界では、まあ珍しくもない」

「それは……また……」

ブロンは言葉が続かなかった。旦那は一体どんな国にいたのだろうか。まるで想像がつかなかった。旦那の強さは正に一騎当千。そんなのがゴロゴロ転がっていたら、世界は彼らの気まぐれで変わるだろう。

ブロンは、つらつら考えながらたずなを引いていた。

それから30分程してリーナが何かを感知した。

「アキト様、何か巨大なものが来ます」

そのリーナの言葉に、黒沢明人は停車を求めた。そして戦闘態勢に入る。

明人は久しぶりに2038衛星と内心でコンタクトを取った。

「巨大な敵が近づいて来ているか索敵してくれ」

「およそ、距離100m、巨魔ですね」

「厄介か?」

「貴方に逃げる選択肢はナンセンスです。問題無く勝てるでしょう。ただ常人には決して倒せないでしょう」

「そうか、ではまたな」

黒沢明人は耳を澄ました。微かにあるく音と振動を感じる。相当デカイな……。

待つ事2分。とうとう巨魔が姿を現した。体調10m程度、筋肉隆

々、そして4つの目、右手に巨大な棍棒を持ち、左手に巨大蠍を握って、バリバリと音を立てながら食べ、こちらに向かって歩いてくる。

「ブロン、ちょっとブレードを返してもらっぞ」

「はいでさ」

ブロンからブレードを受け取ると、前面に一人立った。

「協力無用！俺一人で片付ける」

第十八話 自治都市ウェルデンへその3（前書き）

前回書き忘れがあつて後で気づいてすぐに直したのだけど、タイミングの悪い人が結構いたようで、申し訳無いです。

第十八話 自治都市ウエルデンへその3

「協力無用！俺一人で片付ける」

そう宣言し、黒沢明人は一人ブレードを肩にかけたまま、巨魔に近づいていった。

「こりゃ、真つ当な奴では対応できないと言いたいのでやすね」
ブロン・バーリエンスは呟いた。

「それって相手が強いってこと？」

馬車の中からリーナが訪ねて来た。本来なら逃げるところだが、あのデカさの一步の距離は長い。案外機敏な可能性も否定できない。馬車での撤退は、非常に危険だと思われた。

「恐らくあつしらでは無理でやす」
たつのかみひと

「竜神人のブロンでも？」

「まあ、そういうことでやすな。大体あの大きさ、どう戦ったら良いのか想像もつきやせん。」

フエイは、その会話を馬車の上で聞いていた。

協力無用とは言ってたけど、イザとなったら目を潰すくらは手出しできる。

いざとなったら助太刀する覚悟で見守ることにした。

黒沢明人は、巨魔の5m手前で止まった。巨魔も黒沢明人に気づいて動きを止める。

4つの目が黒沢明人を直視する。

その一瞬後、黒沢明人のいた場所を風を切る轟音をたてて棍棒が通り過ぎた。速い！

黒沢明人は、それを上体を反らして躲した。

巨魔は、次の行動を起こそうとしてふと立ち止まった。棍棒の先ツポが森の方に飛んで行ったのだ。黒沢明人は回避と同時にブレード

を振るっていたのだ。

役に立たないと判断したのだろう、巨魔は黒沢明人めがけて先の無くなった棍棒を投擲した。

黒沢明人は、それを平然と蹴り返した。元棍棒は巨魔の頭に当たって、勢いを持ったまま森の中へと飛んでい行った。巨魔の頭から赤い血がどくどくと流れ始めた。

黒沢明人は動きを止めなかった、棍棒を蹴り返した後、今度は素早く腹の下に潜り込み、右足に向けてブレードを一閃した、が勘だろつか頭脳だろうか、巨魔は後方に素早くジャンプしてそれを躲した。想像以上に敏捷だ。

しかし、黒沢明人の追撃は止まらない。巨魔が後方にジャンプした分、黒沢明人は巨魔に対して俊足で間合いを詰めていた。黒沢明人のラプラス・カリキュレーターが残像を見せる。ブレード真上に突出した。

ドンと音がし、黒沢明人の足が地面にめり込んだ。だが、巨魔の両手を組んだ叩き下ろした渾身の一撃は、黒沢明人を潰すことができなかった。その上、手の甲からブレードの先が突出している。その先端が一瞬で縦に振り落とされた、その瞬間、巨魔の指が飛び散った。

巨魔がぐおおおおお、という叫びを漏らしながら腕をふる。大量の血が飛び散った。

黒沢明人は、駿足で巨魔の足元から出ると、今度はブレードを構え、巨魔の顔目掛けてジャンプした。

がこれは油断だった。無意識に巨魔を見くびっていたのだ。

巨魔は、血を飛び散らせながら顔目掛けて飛んでくる黒沢明人を剛腕で叩き落とした。

黒沢明人は地面に叩きつけられグフッと息を吐いた。

こんな一撃を喰らったのは人生で初めてだった。視界がブラックアウトしている。

どうする。黒沢明人は悩みながら立ち上がり、ブレードを巨魔がい

るであろう方向に向けて構えた。

巨魔は、痛みに堪えて顔をしかめている。黒沢明人も結構な痛手を被ったハズだ。だが、油断できない。巨魔は、珍しく悩んだ。それが仇となった。黒沢明人が視界を取り戻したのだ。

黒沢明人は感嘆した。これほどの強さがあるとは…。

「巨魔よ、お前は強い。だがこれで終わりにしよう。余興はここまでだ」

相手が理解しているかどうかなんて考えていない。自分の取るべき行動を肯定したのだ。

黒沢明人は、ポケットからタングステンで作られた小さな槍のような物をブレードの刃の裏にある溝に乗せ、一気に大量の電流を流し込んだ。電磁誘導によって押し出されたタングステンの矢は、一気に加速し音速を超え、巨魔目掛けて飛んでいった。空気との摩擦で発熱し、黄色い残像を残しながら巨魔の胸に吸い込まれた。バシヤ、という音と共に巨魔の背が弾け飛んだ。

巨魔はゆっくりと前に倒れ込み、遂に動かぬ物になった。

黒沢明人は、服を叩き埃をはらって馬車に戻った。

「お疲れ様でやす、旦那」とブロンが迎えてくれた。

「おかえりなさい」と元気にハモツタのは、リーナとディート。

「アキト様、マッサージして差し上げますわ」とフェイ。もっともそんな時間は無いのだが…。

「いやはや、アキト様の強さは、人外にも程がありますなあ」とセリヨン・ハーネスト。

それぞれが黒沢明人を気遣い、感謝した。

「まあ、なんだ。多少強かったな。ここのバケモンはあんな奴がごろごろいるのか？」

黒沢明人は、珍しく少し照れたように質問した。これは本来の姿かも知れない。

フェイは、首を傾げ。

代わってセリヨンが答えた。

「私は経験ありませんなあ。正直驚いています。これは今後のことを考えないといけませんなあ」

「あんなのがうようよしているのかなあ？」リーナの何気ない言葉に黒沢明人を除いて、皆目を見開いた。

「そういえば、蠍、食べてましたよね」とフェイ。

「なるほど、アレが繁殖している可能性があるわけか……」

黒沢明人は、正直あまりあのクラスに出られると、支障が出ると考えていた。

「森が出るまで後3時間位かと、急ぎましようか？」

「そうだな、無理にでも吹っ切ろう」

黒沢明人は、あまり自分のスペックを外部者に知られたくなかったので、とにかく一刻も早く森を抜けたかった。

だが残り2時間というところで新たな魔獣に襲われた。

3つの目を持つ狼だ。それもかなりの数である。

幸い一頭一頭はそれほど強くはなかったが異常に多い。黒沢明人は自分のブレードを使い、ブロンは戦斧を振るった。

二人は淡々と襲ってくる狼を殺した。

だが余りにも数が多い、フェイは自分の判断でブロンが殺しきれなかった狼に淡々と矢を放った。その腕は100発100中で全ての狼が額の目を打ち抜かれた。

黒沢明人が殺しきれなかった狼は、護衛兵が処理した。彼らはようやく十分な活躍をすることができ気分が高揚していた。

戦闘は1時間に及んだ。

黒沢明人とフェイ以外のブロンでさえ疲れを表情に出していた。

狼の群をなんとか撃退した一行は、休む間もなく馬車を走らせた。幸いその後、魔獣が現れることは無かった。

そして橋が見え、フェイが言った。

「あの橋を超えると最後の森ティル・グラープスよ！」
ブロンがふうと息を吐いた。

「流石に今日は疲れやしたぜ」

第十九話 自治都市ウエルデンへその4（前書き）

すみません、今回ちょっと短いです。

安全な森の話だったので、書くことが無くて…。

第十九話 自治都市ウェルデンへその4

黒沢明人一行は、橋をさっさと渡り、最後の森ティル・グラープスに入った。

「で、この森はどうなんだ、フェイ？」

フェイ・アルディオーネは、ちよつと首を傾げ、

「街道沿いが危険って話は聞いたことが無いわね。まあドラゴンが現れたら話は別だけど、ドラゴンは半ば伝説みたいなものだし。ただ森の奥深くまで入って行って帰ってきた人はいないって聞いているわ」

「なるほど、では夜も近いし、ここらで野営するか。ブロン、止めてくれ」

「あいよ旦那。馬もへばつていやすしねえ」

「そうか。あ、フェイ、セリヨン殿にここで野営すると伝えてくれ」

「いいわよ、行ってくるわ」

との返事に、

「俺は少し森に入ってくる」

といって黒沢明人は、一人森に入ってしまった。

周囲をうかがっていた黒沢明人は、この森が他の森と違うことに気づいていた。一本一本の木がかなり太く、そして高い。

地面は、苔が生えていて、足の裏に硬い地面を感じることができない。

この森なら案外簡単なんじゃないだろうか、黒沢明人は、少しでも暗くなる前にやりたいことがあった。

暫く周囲を見渡していた黒沢明人は、岩を発見した。

軽く押してみた。動かない。

「これかな？」

黒沢明人は、一人呟くと、岩を引っ張った。ゴゴつと音を立てて岩

が地面から抜き取られた。

そこには巨大な穴が出来上がった。黒沢明人は、岩を近くに置いて、穴の底をうかがった。

ゆっくり水が満ちていく。どうやら正解だったようだ。

暫く暇になりそうなので、黒沢明人は座りながら、何気に電気エネルギーを放出した。通常なら周囲に落雷するだけなのに、エネルギーは空中で渦巻いている。

電気を出すだけなら電気エネルギーで動いている黒沢明人にとっては、いくらでも無尽蔵（に近い）に出せる。だが操作をすると異なると違う。黒沢明人は、最早生体部品が無い。擬似的なものならあるが、あくまで擬似的なものである。生体の体を失い発電能力は失ったが、操作する能力だけはどうか残った。つまり、発電も操作も自由自在であるということだ。それこそ非科学的なまでに。

空中のエネルギーを濃縮するとプラズマ化した。更に凝縮し、自在に動かしてみる。今度は形を変えてみえた。弧を描いてみた。それを岩の角に向けて放ってみた。一瞬で岩の角が切り取られ、ずり落ちた。が、その先の木にも当たりそうになり、慌てて回避させる。

今度は、今度は岩の別は角に向けて放ち、角を囲む様に円状に操作した。そして、円の直径を一気に点にまで縮める。プラズマは消え、岩の角がずり落ちた。

紐状に伸ばし、指先でコントロールすることも試してみた。

いずれにしろかなりの集中力が必要だった。

やはり、戦闘には不向きか…。

そんな事を考えている間に穴は水で満たされていた。

「よし」

そう気合を入れると、ブレードを抜き放ち、水面に並行に向けた。ブレードから放たれる指向性のある高い周波数の電磁波が湯を温めていく、2分程ムラなく温めて40度程度のお湯にしてみた。

黒沢明人は、迷彩服を脱ぐと、足先からゆっくりと湯に浸かった。

首だけ出してぷはーと息をはく。魔獣との戦いで全身返り血だらけ

だったのがゆっくり溶けていく。

リーナ・サーリエントは、まだ陽は落ちていないが何時までたっても帰って来ない黒沢明人を心配して、一人森に入った。

暫くするとパシヤと水の跳ねる音がしたので、そっちに向かって行った。大きな岩がある。音がしたのはその向こう、リーナはい岩を回り込んだ。

黒沢明人は「そう言えば、体を拭く為のタオルが無いな」と失態に困っていた。そこえリーナがやってきた。

「アキトさま、何をしているのですか？」

「風呂だ」

「ふる？」

「体を綺麗にできるぞ」

「本当ですか！？」

リーナは、屈んで手をそつと水につけてみた。ちょっと熱い。

「まるで料理されてるみたいですね……」

黒沢明人は、ははつと笑った。そういえばこの世界に来て初めて心から笑った気がする。

「ところでリーナ、実はタオルがなくてな、体を乾かすことができないのだが……」

「タオル？タオルってなんです？」

「体を拭く布みたいなものだ、あとブロンも呼んできてくれ」

「布ならありますね。持ってきます。ブロンさんも呼んできますね」

リーナはそういうと足早に去っていった。

「旦那、なんでやすってか何やってるんでやす？」

「風呂だ」

「全く旦那は貴族みたいな趣向を持ってやすね」

「俺の国ではあたりまえだ。お前も入れ、返り血で汚れているだろ」

「そうですね。ではあっしも風呂というものを試してみやす」

「じゃ、ここに布置いときます」

そう言うと、リーナは去っていった。

その後、何度か温めて結局全員が入ることになった。

「いやあ、風呂というのなかなか良いもんですなあ」

セリヨン・ハーネストの言に全員が納得した。

「石鹸があればなおベストなんだが…。後タオルか、布はあまり水を吸収しないからな」

「ほう、せつけんとたおるですか？」

「石鹸は油を落とすことができる。タオルは水を吸収する為の布だ。どちらも作るのとはそれほど難しく無い。こんど作ってみるか」

「それはそれは、その時は、是非私めに納入下さい」

「ああ、願います。もつともまだまだ先の話だが…」

「明日はいよいよ自治都市ウエルデンですわね」

そう言ったのは、フェイだ。フェイの瞳が微かに濡れているように感じたのは、黒沢明人だけだろうか。

第二十話 自治都市ウエルデン（前書き）

いよいよ似てきましたね。

魔界の雷帝に。…にているよね？

ああ、なんか自信が無い。

でも次話はドラゴンが現れる予定です。

第二十話 自治都市ウエルデン

ニーナ・サーリエントとデイト・ウエルヘンは、朝、馬車の外で寝ている黒沢明人を発見した。

最近デイトにこっそり教えたことなのだが、ニーナは額同士をくっつけると相手の過去が見えるらしい。

ということは、チャンスだ。

ニーナはゆっくりと近づいていく、しかしもう数歩つてところで、バレてしまった。

「ニーナ、気配がもるバレだ」

「気配？」ニーナは首を傾げた。

「気配を消し、近づいてくる敵は、いくら俺でも探知できない」

「そうなんですか！アキトさんでも弱点はあるのですねえ」

尤も俺は寝ないし、ラプラス・カリキュレーターもあるので、実質23時間殺すことは不可能だろう。

デイト・ウエルヘンが、さも当然のように「疲れて昏睡している時に試しましょ」等と不穏なセリフをはいた。

23時間起きていることは、黙っておこう、と黒沢明人は決心した。

一行は、（黒沢明人にとってはあじけ無い）朝食をとり、出発することになった。

馬車に揺られる事30分、黒沢明人はふと気づいた。この辺の領土も自治領なのだろうか？

その疑問にたいして、フェイ・アルディオーネは、

「最後の森を超えた時点で自治都市ウエルデンですわ」

黒沢明人は、その荒廃した大地に気を取られた。これだけの広さがあれば自給自足以上を遥かに超えて穀物・野菜等の栽培可能だろう。問題は荒れた土地だろうか、土壌改良、ため池、色々必要そうだ。

そんなこんなをつらつらと考えていると、結局6時間かかって自治都市ウエルデンに到着した。

自治都市ウエルデンに到着した黒沢明人は、フェイに向かって言った。

「約束の自治都市ウエルデンだ。後は自由にすれば良い」

「ありがとうございます！」

今までの旅で色々学びました。皆さんありがとうございます。では、さようなら」

フェイは目からポロポロと涙を流した。

黒沢明人は答えた、

「暫くこの町にいることになるだろう。いつでも遊びに来て」
フェイは、何度も礼を言っ去っていった。

しかし、と黒沢明人は周囲に目を凝らした。自治都市ウエルデンとは名ばかりで、木で出来た外界からの柵、木でできたポロポロの家、宿屋も当然の様相だった。しかも一軒しか無い。

「こりゃ都市というより村だな。無駄に領土だけはあるが…」

黒沢明人の心からの言葉だった。

「まあ、こんな感じですよアキトさん。さて、私は商売に出向いてきます」

セリヨン・ハーネストの言葉で正常を取り戻し、まずはチェックインすることとなった。

黒沢明人、ブロン・バリエンス、リーナ・サーリエント、ディー・ウエルヘンの四人は、宿屋へと向かった。

中に入ると、歩く度にギシ、ギシと床が鳴った。

「四人で部屋二つだ。開いているか？」黒沢明人は、早速女将に話を通していた。

「大丈夫ですよ。最近商人が来なかったもので…」

「ああ、森が厄介なことになっていたからな…、軍を派遣しても如何ともしがたいな」

「そうだったんですか？あ、所で貴方は能力者ですか？他の方も」

「いや、一人だけ普通の人間がまざっているがな」

「なんか人間であることにコンプレックスを感じるようになってきたよ」

とディートは頬を膨らませて怒りを表現した。

それにブロンがくくくと笑う。ディートのジャンプキックがブロンの後頭部に見事に入った。

「おお、そんな業を持っていたのか…！」

「ふ、行きの馬車の中で役に立つ為のイメージトレーニングをしていたの、どう？」

「まあ、普通の人間ならある程度は…」

ブロンとディートは、そんなやりとりをしているのを黒沢明人は、無表情いや、微かな笑が混ざったような、微妙な表情で眺めていた。リーナは、そんな黒沢明人をじっと見つめていた。

「俺は今から人探しに出る」

「他の者は自由行動ということだ」そういうと、黒沢明人は全員にデューク銀貨を一枚渡した。

「しかし、こんな町でこんなに需要があるとも思いやせんが…」

「残ったらへそくりにすればよい。時に買いたいものもあるだろう」ブロン、リーナ、ディートは納得して頷いた。

「旦那はどちらへ」

「ダナ・ハーグマンの娘に会ってくる」

「お知り合いですか？」

「まあ、そんなところだ」

黒沢明人は、宿屋から外へ出て一番大きな建物を探した。ほどなく見つかり、入口に「自治都市役所」と書かれてあった。

入口は開けっ放しになっていた。

黒沢明人が入ると「ご要件ですか？」中年のおばさんに声をかけられた。この人も亜人間だろうか？

「はい、そうです。亜人間です。心を読めますので気分を害される人もおられますが…」

なるほど、良くかんがえられている。入口に心を読める亜人間とはね。

「では、もう趣旨は理解してもらえたかな？」

「では、この者の後へ」

そこには、若い女性が立っていた。

「ではご案内致します」

「名のつてないのだが問題無いのか？」

案内係は、ふふつと笑って、「彼女があのような対応をするのはあなた様お一人です。黒沢明人様」

「ほう、名前もわかっているわけだ。そういえば名は」

「ルリともうします」

「さあ、まいりましょう」

二階にあがると2人のリザードマンが護衛している扉があった。

ルリは、その扉をノックした。

中から「どうぞ」と返事が返る。

両開きの扉を開けると、大して立派とは言えない、大きな机に目が行った。

そして、その使用者を見る。

「似ているな」

黒沢明人は、悩みもなく答えた。あまりにも似ているからだ。

それに対して、女性は、

「若い頃の母そっくりだとよく言われます」

と答えた。

「名は？」

「セイフ・ハーグマンよ。セイフと呼んで下さい。この町の代表を勤めています」

「で、俺は何の為、この部屋に呼ばれた？復讐か？」

「いいえ、協力して欲しいのです。この町の発展の為に」

第二一話 死闘の果てに（前書き）

お待たせしました。

魔界の雷帝っぽくといいつつ、また裏切っていたりして（笑
もう忙しくて小説を書く時間も少ない上に、スランプでねえ。
今まで、スランプのスの字もなかったので、痛いすねえ…。
で、ちょっと今回は短いですが、今後ともどうぞお付き合い下さい。

第二一話 死闘の果てに

「取り敢えず、そちらの椅子にどうぞ腰掛けて下さい」

セイフ・ハーグマンは言った。黒沢明人が椅子に座ると、話を続けた。

「貴方が此処へ来ることは、想定していました。貴方の力を持つ方の記録が残っていないのはまず考えられません。来るとするならば未来しか考えられませんでした。それがいつか、私の代では無いかも知れません。ひよっとすると全く違う世界へと行った可能性もありました。私の代で現れてくれたことをとても感謝致します」

黒沢明人は、セイフの目を見ながら黙って聞いた。

「何故貴方を待っていたか、と思うかも知れません。この町は、常にあらゆるものに狙われています。貴方の軍人としての力と組織の運営能力が欲しいのです。ですが、今はまだ軍人を持つ程町の財政は良くありません。というより殆どありません」

黒沢明人は答えた。

「では、軍のないこの町で俺に何ができる？そんな状態であれば内政もままならぬだろう」

「明人様は特殊な教育を受けていると先代から聞いております。明人様の知識を貸して欲しいのです」

「先代はよくそんなことを知っていたな」

「では、やはり特殊な教育を受けているのですね？」

「俺一人では無かったがな。そういう意味では特殊とは言えないかもしれないが、この世界から見たら特殊だろうな。まあ簡単に言うと、過去数千年分の国家在り方と軍隊の歴史を学んでいる」

黒沢明人は、素直に答えた。何故俺なのか、まだ納得できないが、俺を待っていたのは恐らく事実だろう。

「しかし、まずは先立つものが必要だな。どうするつもりだ？」

「今、町の若者がドラゴンの巣を探し、ウロコを手に入れるよう頑

張っています。ドラゴンの鱗、それも赤のドラゴンの鱗ともなると一枚で最低でもイリート金貨100枚にはなると聞いています。この試みが成功すれば、かなり町の財政も明るくなる筈です」

「ほう、では、まずその試みが成功するかどうか、それを見させてもらおう」

黒沢明人は、そう言って椅子から立ち上がった。

「では失礼する」

「…はい」

セイフは、まだ話をしたがっている様子だったが、黒沢明人も考える時間が欲しかった。

かつてダナ・ハーグマンが俺に悪印象しか感じていなかったのは恐らく事実だろう。それが、この世界にきてどんな心境の変化を起したのか？娘の代まで待たせても俺の存在を望んだのか、正直なところまるで見当がつかない。彼女は俺の秘密を知っていた。つまり、俺の存在は火星政府の知るところとなっていたのだらう。彼女がどこまで情報を得ていたのか解らないが、そこに何らかの理由が隠されているのかも知れない。そして、彼女の存在は地球政府に知られていなかった。彼女は、対自分の切り札として隠匿されていたのかも知れない。それにしても彼女の情報を得ていなかったのは致命的なミスだ。あの時も、そして今も。

正直早く元の世界に帰りたい。懐かしい仲間たちと酒を飲み交わしたい。が、セイフの意向をないがしろにするのは、危険である。暫くは、力を貸してやっても良い…か。

兎も角、明人は町の中を散策することにした。実情を知っておこうと思ったからだが、そして知ったが、この町は余りにも貧しい。家族が家族分の糧を得ることではいっばいっばいようだ。これは店等無いかも知れない…。

黒沢明人は、昼の3時頃になって、散策を止め、宿へ戻ることにした。そして、何気に西の空を見た。何か飛んでいる…巨大な何か

だ。それは此処へ向かっているようである。

黒沢明人は2038衛星と内心でコンタクトを取った。

『巨大な何か近づいているか索敵してくれ』

直ぐに返答が返った。

『レッドドラゴンです。この世界で最強の魔獣です。ですが、まあ貴方の方が化物でしょう。この生き物は高温の焔のブレスを操ります。』

酷い言われようだが、なるほどな…、ドラゴンの巣を荒らしに行つたのが凶と出たか…。

そして、それはまたたく間に自治都市ウエルデン上空へ現れ、地面に接近し、焔のブレスを吐いた。町の中央で炎が上がった。

チツ、黒沢明人は舌を鳴らして中に浮いた。そして一気に加速、またたく間にドラゴンに近づいた。

でかいな…頭の天辺から尻尾の先まで50mはある。巨大な顎は装甲車を飲み込めそうな大きさだ。地面を見ると、家々から人が避難していた。それを目掛けてドラゴンがブレスを吐こうとする、一瞬の間に黒沢明人はドラゴンの顎先へと移動して顎を上へと蹴り上げた。鼻の穴から吹き出るブレスが宙を焦がした。黒沢明人は、空中でバランスを崩していた。反作用の相殺がうまくできなかったのだ。ドラゴンは、地面へと落下し、黒沢明人を見た。いや正しくは、黒沢明人と目が合った。

『よもや、私を地に着けるような存在が現れようとはな…。この力、貴様人間では無いな。かといって亜人間とも違う…面白い。私を倒せる者は、この世にはいないと思っていたが、お前なら渾身の力のぶつけ合いができそうだ』

ドラゴンの言葉が人々の頭の中で響いた。

黒沢明人は、「今のは渾身の一撃だったのだがな。渾身の力のぶつけ合い、それも良いだろう」と答え、ドラゴンの正面へと移動した。黒沢明人は人間として生きるのに支障の無いようリミッターを授けているのだが、それを最大レベルでリミッター解除した。体中に力

が漲る。更に体重を1tとした。そして取り敢えず様子見で蓄積していた余剰電力を開放した。

一瞬早くドラゴンの赤いブレスが黒沢明人を包み込み、皮膚が蒸発していくが、そばから回復していく。

そして黒沢明人の電撃がドラゴンを襲った。ドラゴンの全身に電気がはいまわり、筋肉が引攣れる。

通常であればどんな生き物であれ、黒こげになるエネルギー量だが、ドラコンは焦げていない。炎属性の為か、あの鱗に秘密があるのか？

黒沢明人は、背中ブレードを抜き放った。遠慮して勝てる相手では無い。

『なかなかやるではないか、生き物ならざる者よ』
「言ってる」

黒沢明人は、一瞬でドラゴンの頭目指して突進した。肉薄した黒沢明人に対してドラゴンは、高温のブレスを吐いた。黒沢明人にブレスは効かない、ブレスは目くらましである。素早く体勢を変え、30mはあるかとおもわれる巨大な尾を黒沢明人目掛けて振り抜いた。黒沢明人はその攻撃をまともに食らった。ドラゴンの放った尾の衝撃は比類無く、黒沢明人は200mは真横に吹っ飛んだ。家40軒は貫通しただろう。

「知恵のある化物か…」

黒沢明人がそう呟いた時、さらなるブレスの洗礼を受ける。しかし今度は黒沢明人が早かった。

素早く飛翔し、ドラゴンの頭に蹴りを入れる。ゴっとな音がして、ドラゴンの頭が地面に押し付けられる。

この瞬間を待っていた黒沢明人は、ドラゴンの頭に飛び乗り、ブレードを突き立てた。あらゆる物を切る超振動ブレードは、ドラゴンにも通用するだろうか？

結果的に例えドラゴンの鱗と言えど、流石に超振動ブレードに斬れない物は無いってことが解った。

だが、ドラゴンはブレードが肉を裂いた時点でその威力を把握し、頭に乗った黒沢明人を振り落とそうとした、凄まじいGが黒沢明人を襲った。だが明人はブレードに更に渾身の力で押し込んで行く。本来ならストンと根元まで突き刺さる武器だが、流石はドラゴンと行ったところだろう。

黒沢明人は、ドラゴンのGから開放される為に一旦ブレードを抜いて、宙に退避した。どデカイ上に敏捷性の高さ、硬さ、攻撃力、どれをとっても最強だ。レールガンを使おうかとも考えたが、鱗の硬さから考えて、プラズマ化するのほぼ確実だろう。然るにこのドラゴンは、高温の焔を操る。恐らくダメージを与えることはできないだろう。二人はまた空宙で見合った。

知的な生き物か…。黒沢明人は、提案することにした。

「このままでは勝負がつかない、我々が欲しいのは、お前の鱗だ。

抜け落ちた鱗等は無いのか？」

『鱗だと…。捨てるほど有るがな。そうか鱗が欲しいのか、いいだろう。鱗はいつでも取りに来い。ところで我は観ていた。なぜあの巨魔に使った業を使わない？』

「知性の高い生き物は、話を通じるかも知れないからだ」、半分ハツタリである。

『なるほど、我と交渉とはな。長き時を生きてきたが、対等な交渉は初だ。面白い。私は巢に帰ろう。また会う時を楽しみにしている』
そういってドラゴンは、巨大な翼を広げ、土煙を起こして去っていった。

遠巻きにいていた群衆から歓声が上がった。

そう、我々は今、遂に潤沢な資源を持ったのだ。

セイフ・ハーグマンは感極まって涙が流れるのを止めることができなかった。

ブロン・バリエンスは「もう旦那のことでこれ以上驚くことはなかるう」と思った。

リーナ・サーリエントとディート・ウエルヘンは「さすがアキト様！」と完成を上げた。

フェイ・アルディオーネは、少し離れたところから見ていたが、どうやら明人が勝ったんだと涙をこぼした。

セリヨン・ハーネストは「潤沢な資金源を得て、これから町は大きく変わっていくだろう」という予感を感じた。

第三話 セリヨン・ハーネストの過去（前書き）

ああ、これでこの小説、二次小説確定。著作権侵害の領域へと。今さら止められませんか。それをするとお前もか！

って感じになってしまいますよね。

もう開き直りました。ただ、改悪になっていないか、がとても不安です。

ああ、もう色々悩み過ぎて、もういいや。

第三話 セリヨン・ハーネストの過去

黒沢明人は、翌朝、食事も摂らずに自治都市役所へ出かけた。

見張りがあるが顔パスで中に入ることができた。もつとも黒沢明人を止められる障害など無いに等しいが…。

「しかし、ボロいな…」

黒沢明人は、一番奥へと向い、両開きの扉の両端にリザードマンの護衛二人のついた執務室の前に訪れ、代表セイフ・ハーグマンはいるか？と訪ねた。

「少々お待ちください」

そう言うと、一人が扉を開けて中に入り、何事かを語っている声が聞こえた。

「どうぞ」

と代表らしき声が聞こえてきたので黒沢明人は遠慮なく部屋へと入った。

すると昨日は無かった筈の机と、その上に大量の鱗らしきものが置かれていた。

「もう取ってきたのか…手際が良いというか、…早いな…」

「ええ、夜が開ける前に出かけたので、無尽蔵にあったとのことです。ですよ？リリア」

「はい、積もっていました。とても運びきれません」

代表の後に軽い鎧をまとった女性が答えた。彼女がリリアなのだろう。

昨日はいなかったことを考えると、昨日、鱗を取りに行っていた者の一人なのだろうか。

「で、昨日はドラゴンを怒らせた訳だ」

と俺が言うと、顔を真っ赤にして「それは…」と言ったまま俯いた。硬く握った拳が震えている。

まあ、相手が悪いしな、と黒沢明人はそれ以上追求しなかった。

それにしても代表の嬉しそうな顔を見ると、余程必要な物だったの

だろう。

「で、これはどう捌くつもりだ」

「これと言って、当てが無いのですが…、そうですね…どうしまし
よう?」

「セリヨン・ハーネストがいるだろう」

黒沢明人がそう言うと、リリアが叫んだ。

「あいつは悪徳商人だぞ!薬を他の町の2倍の値で売っている!」

「他の商人は、薬を売っていないのか?」

「ああ、売っていない。だから2倍の値で売っているのだろう!」

なるほど、こいつらは知らないのか…、黒沢明人は少し悩み、切り
出してみた。

「セリヨンをここへ呼べ」

「だからあいつは悪徳商人だと!」

そう言うリリアを代表がたしなめた。

「まあまあ、アキトさんの言う事を聞きましょう」

セリヨンは、突然呼ばれてどうしたものか、という顔で佇んでいた。
執務室の中は冷たい空気が流れ込んだのか、とも言える異様な雰
気になっていた。特にそのような状態を創り上げているのはリリア
だった。代表も表情が硬い。因みにセリヨンの到着を待つ間、リリ
アと自己紹介したのだが、リリアの名は、リリア・クラフトという
名らしい。

黒沢明人は、切り出した。

「鱗は何枚ある?」

リリアが答えた、「302枚です」。

「セリヨン、この鱗は赤いドラゴンの鱗だ。俺が保証しよう。それ
で全部売るといくらになる?」

黒沢明人がセリヨン訪ねた。

「そうですね。都市によってばらつきがありますが、税金を払って
もイリート金貨2万5千枚といったところでしょうか」

代表とリリアは息を飲んだ。気の遠くなる値段だ。代表が質問した。

「ま、前金はいくらになりますか？」

「…そうですね。イリート金貨500枚です」

「ちよつと待て！金貨2万5千だぞ！その前金がたったの金貨500枚とはどういうことか！やっぱりお前は悪徳商人だ！」

リリアが叫んだ。

だが、黒沢明人は落ち着いて、語りはじめた。

「セリヨン、俺の記憶が正しければ、自治都市ウェルデン行きに対してお前はこう言っていたな。」

『実のところ、赤字だ。行き掛けの駄賃にこつそり村人を誘拐して奴隷として売る商人が多い。村の代表は実態を把握しているのか、どうしようもないのか、いずれにしろ未来は暗い。なんとかしなければならぬ。とは言え私は商人。私にできることは限られている』と…」

「まあ、…全くその通りですな」

「ちよつと待て！倍の値で売ってなんで赤字なんだ！」

リリアが叫んだ。

「それは、他の町では補助が出ることで、まあ、輸送費ですな。傭兵を大量に雇わないとこの町には来れないですから」

セリヨンはさも当然の事を告げるように穏やかに説明した。

黒沢明人が、それを受け継いだ。

「つまり、そういうことだ。そういえば俺が、何故赤字なのにわざわざ行くんだ、と聞いた時、話を逸したな、何故だ？」

リリアも代表も頷いた。尤もだと。

「…それは。もう20年も前になります。ようやく一端の商人に成り立ての頃、妻が自分の命と引換に子を産んだのです。余りにも辛く後を追おうと思いました。しかし、我が子が余りにも愛しく、亡くなった妻の分まで可愛がりました。…しかし、あの子が10歳に

成った時に、能力者になってしまったのです。両手の甲に美しい寶石の様な石が浮かび上がりました。私は焦りました。そしてこの都市の存在を噂で聞きました。いろいろあって何とかこの都市に着き、一軒屋を購入し、一緒に住み始めたのですが、その2年後のある日、娘は病気にかかりました。しかし、薬が無かったのです。結局娘は命を落としました」

セリオンは、最後は涙を流しながら語った。

「それで、この都市に赤字を度外視で薬を売りに来ているのか…」
リリアは沈痛な面持ちで語った。

黒沢明人は言った。

「金貨500枚は、全財産といったところだろ？」

「はい、その通りです」

セリオンは涙を拭きながら頷いた。

代表は神妙な面持ちで、

「では、セリオン。貴方におまかせしてよろしいでしょうか？」

「はい、是非喜んで」

そこで黒沢明人が注文を出した。

「値崩れを起こしたくない。様々な流通ルートを活用できないか？」

「はい、無論そのつもりです。一ヶ月後には全て換金できるかと」

ようやく落着いた代表が、「私からも宜しく願います」と深く

頭を下げた。リリアもその横で頭を深く下げている。

セリオンは、「無論、ご希望に答えるよう努力します」と頭を下げた。

「セリオン、すまなかった。悪徳商人なんて言って…私は自分が恥ずかしい」

リリアは、頭を下げながら懺悔を口にした。

「まあ、私も理由を告げていませんでしたし、仕方無いですよ。山賊は知っていましたか？」

「山賊も知っていた？」

「ええ、山賊の首領も能力者なんですよ」

「そうか…私たちは知らぬ間に恩恵を受けていたということか…」

第三話 新生ウエルデン(前書き)

う、今回は短いです。
申し訳無い…。

第二三話 新生ウエルデン

セリヨン・ハーネストが、退出し、旅の準備をしている頃、執務室では、イリート金貨500枚の用途について話し合われていた。

こんな大金誰も見たことが無かったのだ。尤も黒沢明人は冷静であったが…。

いくつか案が出たものの、どれも早急なものでは無く、これと言って案が出なかった。

セイフ・ハーグマン
代表は困って、黒沢明人に助言を求めた。

「明人様、何か助言を頂けないでしょうか？」

「今のこの町の人口は何人だ？」

「1万8千人程です」

「その中でも働き手は、どの程度いる？」

「1万1千人位でしょうか」

「では、公共事業を起こして、住民に還元するのはどうだ？」

「公共事業と言いますと？」

「城壁と堀の建築。家を木製から石へと立て直し。周囲の土地の開拓。特に城壁と堀は重要だろう。村人を一ヶ月デューク銀貨一枚で雇うというのが趣旨だ。住人はお金を得、町は良くなるという仕組みなのだがな」

代表とリリア・クラフト、文官2人が思わず唸った。

ただ、武官のアーネスト・フィロツツイが不満気に言った。

「兵士は雇わないのか？」

それに対して黒沢明人は、

「兵士は、リスクの高い仕事だ。一人当たりデューク銀貨二枚を払うとして、1000人もいれば良いだろう。兵士には、町の外の開拓の見張りになって貰う。北の森と南の森を重点的に監視する必要がある。残りの金は、随時必要になる費用に充てる。これでセリヨン・ハーネストが戻って来るまでの一ヶ月を有意義なものにできる

だろう」

アーネスト・フィロツツイは、なるほどっという具合に満足気に納得した。

代表とリリア・クラフトも満足気に頷いた。

「それで行きましょう。明人様」

セイフ・ハーグマンは決断を下した。

尤もいざとなった時、戸籍が無い、身分証明が無い、文官の裁量権がはっきりしていない、等の多くの問題が発生し、怒涛の如き日々が始まったのだが…。

公共事業が始まり、黒沢明人は満足気に頷いた。この町には、様々な人材がいるようだ。今、城壁の建築を指揮しているのは、ベック・トリスタという小男で、しかし実に優秀な男だった。石の切り出しの指揮までもこなしたのだ。

黒沢明人も忙殺された、体内にあるミュークボックスの力を使って石材運搬時の石材の重さを軽くすることぐらいであった。尤もそのお陰でかなり作業効率が良くなったのだが。因みにミュークボックスは、手で触れることによっても質量を変えられる。尤も限度が厳しいのだが…。また、軽い石のまままで工事できないので、ある程度運んだら、今度は元に戻す作業も強いられた。

外堀では、代表ことセイフが活躍した。外堀にする空間を切り抜き消していくのだ。これまた作業効率がかなりよくなった。

開拓作業では、ブロン・バーリエンスが兵士として魔獣を監視した。適当に集められた兵100人よりブロン一人の方がよほど役に立つだろう。

デイト・ウエルヘンは、文官として働いた。この町の識字率は1%未満である。そして計算ができるのは、その中でも少数であり、当然デイトの活躍が目立った。黒沢明人の信頼を得ているという事実も見逃せないが…。

リーナ・サーリエントは、これといってやる事が無いので黒沢明

人の後に常にくっついていた。

フェイ・アルディオーネは家族が存命でなかったので、結局黒沢明人の下で働くことになった。今は、城壁の工事で負傷した作業員の手当をする仕事に忙殺されている。まるで亡くなった家族の事を考えられないようにする為に。

一万一千人もの人材が投入されたこの町の一大事業は、一ヶ月でなんとか納得できる程までになっていた。城壁と外堀はほぼ完了したが、農業用の開拓地の開拓には、まだ時間がかかりそうだった、だが作業の終わった者から順次開拓に回る人間が増えているので、開拓も時間の問題かも知れない。

また、町も家は石造りになり、道には石畳が敷かれた。

そして、丁度一ヶ月後、セリヨン率いるキャラバンが、城塞都市と化した自治城塞都市ウエルデンに到着した。

余りの復興ぶりにセリヨンは道を間違えたのかと思った。だが、どうやら本当に、ここはウエルデンのようだ。

何故なら自治都市役所が以前と変わらず古いまんまだったからだ。

「これがアキト様の實力なんだろう。優先すべきものが何なのか真に考えておられる」

あの娘の考えでは無いだろう。

この町は、変わる。セリヨンは更なる確信を抱いた。

第二四話 セリヨンの凱旋（前書き）

今回も短い文で申しわけないです。
なかなか区切りが難しく…

第二四話 セリヨンの凱旋

セリヨン・ハーネストが自治都市役所につくと、いつもは外で作業している（セリヨンの知らない話ではあるが）黒沢明人が、代表の執務室の机でデスクワークを行っていた。じつのところ外での作業でやる事が無くなったのだ。セイフ・ハーグマンの仕事も間もなく終わるだろう。

目下黒沢明人が悩んでいるのは、文官の確保だ。絶対的に人数が足りない。なれる者がいないのだ。これは教育から始めなければならぬかも知れない。武官の方は、まだ兵士が少ないこともあって、ブロン・バリーエンスとリリア・クラフトが勤めているが最終的には、10人長、50人長、100人長といった感じで細分化を考えている。この世界の士官表現だ。

他には、この町の唯一の収入源であった、クラモの茸だ。何故かここウエルデン周辺にしか生えていないヤモと呼ばれる木の根元からしか採れない。中々の美味で高く売れるのだが、数が少なく毎年秋にしか生えない。このような過酷な状況の為か、黒沢明人の知るところの共産主義的政治が行われていた。これを改善する為には、個々の収入が生活費を上回っている必要がある。つまり、民に自身の力で産業を起こす余裕が必要だということだ。そしてそれが増えれば働き口も増え、良循環が生まれるだろう。そう、銀行が必要かも知れないな。この世界では商会がそれに当たるのか？

そんなアレコレを考えると、扉をノックする音が聞こえた。
「どうぞ」

黒沢明人は簡素に答えた。そして入ってきたのはセリヨン・ハーネストと一人の女性であった。

「どうにか一ヶ月で帰って来れました」

「ああ、一ヶ月ぶりかセリヨン、それはありがたい。昨日から給料を払っているので実のところ金庫が空になる寸前でね。それでそち

らの女性は？」

セリヨンが振り返ると女性は頷いた。

「リファ・デルファリンです。デルファリン商会の会長をしています」

「そうか、わざわざこんな何も無いところへ」

「いえ、今日はお願いがあってやって参りました。すみません、セリヨンさん、お願いします」

「解りました。では私から…」

「まあ、立ち話もなんだ座ってくれ」

「ああ、そうですね」

黒沢明人が座り、対面にセリヨンとリファが座った。

「おい、誰かいるか？セイフを呼んできてくれ」

となりの扉の無い部屋へ向かって声を上げると、「呼びにまいりませ」と返事が帰ってきた。

その間、紅茶のような飲み物を飲んで時間を潰すことにした。

黒沢明人はさりげなく疑問を口にした。

「ウエルマール帝国との戦争はどうなっている？」

「今のところ一進一退という感じですね。まあこの国には、グラーヌ又聖騎士団5千名余がいますしね。彼らの強さは隣国にも有名ですな。その他の兵を含めると二万人体制ですよ」

「財政は大丈夫なのか？」

「あの領地は、年がら年中戦争していますからな。財政は国が負担していますし、今のところは大丈夫でしょう、と言ってもし寄せは他に向かうわけですが…。しかし、ウエルマール帝国も近々兵を引き上げるといふ噂も入っています。徴兵が解ければまた元の生活に戻るでしょう」

等々色々話を聞いていると、疲れた顔をしたセイフがやってきた。

「すみません、お待たせしました」

「随分と疲れているようだな」

「能力の使いすぎですよ。アキト様は人使いが荒いです」

「もうすぐ終わりなんだろう？」

「ええ、私の作業は終わりました。今は雨水の溜まっていないところから順に仕切りを崩していつているところです。ところでセリヨンさんお久しぶりです。もう一ヶ月経ったのですね。そちらの女性
は？」

「はい、お蔭様で良い商売ができました。彼女は……」

「リファ・デルファリンと申します。デルファリン商会の会長をしております」

「商会の方ですか、そんな方がここを訪れるのは初めてですね。民も臨時収入が入って、懐が暖かいところです。薬以外の物もあれば売れたでしょう」

「実は今回は大規模なキャラバンで来まして。生活物資も大量に取り揃えております」

「それは民も喜ぶところでしょう」

「はい、では報告をしましょう。まず、ドラゴンの鱗はイリート金貨にして約2万9000枚でデルファリン商会と契約を果たしました。戦時中ですしね即完売だったそうです」

「ほう、まずまずだな」

「…2万9000枚……」

黒沢明人は感心し、セイフは眩暈を起こしていた。

「デルファリン商会とは色々とコネがあり、融通が効くのです。販売網も国外にまでありますし。ですので特に懇意にしております」

「なるほど、それはありがたいことだ」

「ところが、問題が発生しまして……」

イリート金貨が市場に不足していた為、ネール金貨での売買を行つたらしいのですが、ネール金貨を生産するネール公爵家で当主交代ありまして、その新公爵が財政悪化を理由にもともと金の比重が低いネール金貨からさらに金の比重を減らした新しくネファールとい

う金貨を発行したのです。

元々ネール金貨は価値に対して金の割合が少なかったのですが…

何より致命的なのがネール公爵家がネール金貨に対して等価でネフ
アール金貨を交換すると発表したことですな」

「なるほど目先の利益に思考を失ったか」

「ここからは私が…」

そう言つてリファが、セリヨンの話を引き継いだ。

「残念ながらその様ですね。損失はイリート金貨にして7500枚。私共みたいに中規模以下の商会が多く町の店舗の権利を売り、損益を取り戻そうと動き出しまして、結果価値が下落しました。しかも、それを大手の商会が安く買い、非常な高値で売りに出しまして、デルファリン商会としても売りに売れない状況となつた次第でして、そもそもいざという場合に備えて基金を創設していたのですが、戦争を理由に国王のお触れで、私どもの場合イリート金貨にして4万枚もの徴税を受けたのが痛かったですね。基金の残高はイリート金貨にして5000枚。2500枚お支払いできないという事情です」

「つまり、全額払えないどころか、今後の運転資金も無いということかな？」

「はい、つまりはご察しの通り、そういうことです」

黒沢明人は、隣りのセイフの様子を見たが、首を傾げている。

「いいだろう。受け取るのはイリート金貨1万5千枚で構わない。

その上で1万4千枚はデルファリン商会に融資しよう。細かい契約はセリヨンに任せよう。よろしいか？」

セリヨンは「おまかせ下さい」と言い、リファと握手した。リファは何度も何度も感謝し皆と握手した。

第二四話 セリヨンの凱旋（後書き）

仕事が忙しく、なかなか更新できない…
一週間に少なくとも1話は追加しようかと。

第二五話 町の発展（前書き）

すみません。超短いです。

次回から色々ボリュームが増えると思います。

第二五話 町の発展

黒沢明人は、ふと疑問を感じセリヨン・ハーネストに訪ねた。「二つ目の森ワナ・グラープス」の魔物はどうだ？結構な傭兵の数だが……」

「それがですね、一匹たりとも出会いませんでした」

「一匹足りともか……。どうということだ？」

「正直判断致しかねますな」

黒沢明人は、内心、これは調査する必要があるな、と決意を持った。

「セリヨン、いつまで此処にいる？」

「一週間ほどですが？」

「そうか、珍しい食材や香辛料を、売って貰いたいのだが」

「それは構いませんが、で、物はどちらに？」

「ここで構わない。宜しく頼む」

「後、穀物組合が小麦の種を欲しがっているのだが」

「無論ご用意しております」

「念のために聞くが、生きた、オーロックス等を持ち込んではいま
いな？」

「問題ありましたか？これからは必要だと考えたのですが……」

完敗だ。セリヨンの洞察力、計画性、この町への愛着。実に安心できる仲間を得ていたものだ。

「いや、ありがたい。北と南の魔物もまったく出て来ないからな。土壌改良もうまく行っているし、何もかもうまく行き過ぎている位だ。オーロックスは、全頭買わせて貰おう」

「仰せの通りに」

セリヨン・ハーネストとリファ・デルファリンが退室した後、黒沢明人は、セイフ・ハーグマンに「二つ目の森ワナ・グラープス」を調査すると告げた。

「兵を500人程借りるが、問題無いか」

「ああ、ええ、はい」

セイフは、まだ正常状態に戻っていないようだ。

「二つ目の森ワナ・グラープスに行っている間に、用意してもらいたい組織がある。技術者、料理家、等を集めた組織だ。後学校の敷地を用意してもらいたい」

「はい、あ、はい。候補ということでしょうか？」

「ああ、まあ一日で終わらせられる問題ではないだろうが、人材をピックアップしてくれ」

「それなら互助会が役に立つかも知れません」

「互助会？」

「この町の何でも屋みたいなものです。問合せば、そこそこ人材を見繕ってくれるかもしれません」

「それは、ありがたいな。情報を元に後でうまく采配しよう。

では、出立する」

そこで黒沢明人は、ふと背中に気配を感じた…。リーナ・サーリエントだ。

「リーナ…今日は危険な場所に行くんだ。解かるな？」

「でもアキト様の身にもしものことがあったら…」

「大丈夫だ、安心しろ。そして信じる。それよりもディートを手伝ってもらえないか」

「…はい」

黒沢明人は柔らかいリーナの髪をグシャッと撫ぜた。

黒沢明人は、ブロン・バーリエンス以下500人の調査部隊を編成

した。目的地は「ワナ・グループ」だ。

しかしイザ到着してみると、本来なら多すぎる程の化物の住処なのだが、なぜか気配すら感じない。

「なんだか、不気味でやすな」

「ああ…」

ブロンの呟きに、同じく呟きで返した、黒沢明人は、空を見上げ、2038衛星と内心でコンタクトを取った。

『周囲10キロ圏内に化物の気配が感じられません』

『原因は解かるか』

『恐らくはもうすぐ』

「全員警戒を怠るな」

黒沢明人は叫んだ。

その直後、巨大な影に包まれた。全員が空をふり仰いだ。

「なるほどな…」

「レッドドラゴンでやすか…」

「律儀な奴だ」

どうやらドラゴンの粹なプレゼントだったということだった。

「ワナ・グループ」から帰った黒沢明人まだまだやることがあった。セイフの献身的努力で、ピックアップされた教師になれる人材を候補ではあるが、文字が解り計算できる者をなんとか10人を揃えることができた。計算に関しては、3人である。

学校に通うことができるのは、当面の規模として300人で、給料も支給することにした。

そして新たな公共工事を行うことにした。下水である。かなり大掛かりな工事になるので、イリート金貨2000枚の予算を計上した。そんなおり、ベック・トリスタが黒沢明人のもとにやってきた。

採掘上跡地に政府機関用の建物を建設したいというのだ。

「ああ、そつだな。いいだろう。許可しよう。セーフも問題無いだろう?」

「はい、問題無いかと」

第二六話 デイト・ウエルヘンの一日 side デイト(前書き)

すみません、ようやく続きが書けました。

もう最近仕事は忙しいは、休みはイベントで埋まっているわ、で小説書けねー!!

って感じだったんですよねえ。

ちょっと修正するにしました。解らないぐらいです。

第二六話 デイト・ウエルヘンの一日 side デイト

デイト・ウエルヘンは最近仕事で忙しい。町の一等地にひっそりと組織の存在が隠されていた。パット見た目、何をしているところなのか解らないが、実は、地下を含めると4階建ての各階で大勢の研究者が働いている。

デイトはその中で主に食べ物に関する研究を行っている部署の責任者になっていた。時折、黒沢明人が言う美味しかった食べ物。好きな食べ物を開発している。今は、チーズケーキの開発に取り掛かっているのだが、過程でできたチーズが、実は売れるのではないかと、思われ、市場に出し様子を伺うと、多くの方が良い反応を返した。

そこでチーズ工房を立ち上げチーズを売るようになった、今となつてはこの町でチーズの存在を知らぬ者など存在しない。

そして行商人の間でも話題に上がるようになった。今ではチーズとクラモの茸が自治城塞都市ウエルデンの土産品として高値で取引されている。巷の居酒屋では料理革命が起こっているとか。

実は、クラモの茸の人工栽培も研究されている。これが解決できれば画期的である。

彼女が仕事に忙殺されているには訳がある。

「あまりドラゴンの鱗で商売はしたくない。場合によっては、我々の敵にも使われるのだからな」

とは黒沢明人の弁である。自然デイトは彼の為に自分のできることをしたいと思うようになった。

そして今では、食事技術長という立場にいる。この世界のお菓子はどうかやら黒沢明人の時代での子供のお菓子程度。それも殆どが飴だった。

料理に関しては、他の町から随分遅れている。そんな訳で食事技術部を作ったのだ。食事と名前に付いているが、食べるもの一般を幅

広く差した名だ。

そして今日、柔らかいクリームチーズの開発に成功し、ついにチーズケーキ作成の最終段階に入った。

「出来た〜？」リーナ・サーリエントはデイトの横に小走りで走りよった。

「もうすぐできるよ〜、たぶん」

デイトはずっと焼き上がりを監視していた。もうそろそろかなあ。「よし！」

デイトは釜から物を取り出した。

ふわつと香るチーズの香りがたまらない。

食事技術班のもの達が我先にとやてきた。

全員で一口ずつ試食してみる…旨い！

「これ行けるよ！」リーナがびよんびよん跳ねた。

「じゃあ、スポンジ版の方はどう？」

「柔らかく焼くのにかなり苦労したのですが、ようやくできました。クリームもできているので、後は装飾だけです」

その後、スポンジとクリームで出来たケーキは、「これだけだとパサパサしているのでデザートで飾ると良いだろう」との黒沢明人の案により、一層美味しいケーキが完成した。

その後、短期間に様々な工夫が用いられ20種程のケーキができた。黒沢明人の許可により大通りに面した建物の一階で初のケーキ屋が誕生した。

開店後、道近くにまで並べられたテーブルも店内も毎日客でこった返していた。

問題はこれね…。デイトはため息をついた。それはチョコレートだった。

これに関しては、兵が体力をすぐ回復させられる戦略のお菓子という重要な任務もになっている。

「こればかりはこの食材では作るの無理！」

ディートは、メモ片手に「ちよつとデルファリン商会に行ってくるね」と言つて施設を後にした。リーナは急に暇になり、いつものように黒沢明人の側にいることにした。

デルファリン商会は最近できたばかりの商会で、様々な要求に答えてくれるありがたい組織だった。

今も大勢の客や業者や行商人やらで賑わっている。

ディートが受付にたどり着いたのは、それから二時間後だった…。

第二六話 デイト・ウエルヘンの一日 side デイト(後書き)

忘れるところだった。

第25話、大幅加筆修正しています。

今一度読んでいただけると嬉しいです。

次はリーナかな。

第二七話 リーナ・サーリエントの夜這 side リーナ(前書き)

サブタイトル変えました。

第二七話 リーナ・サーリエントの夜這 side リーナ

アキト様の夜は遅く、朝はとても早い。一度、朝の5時にこっそり忍び込み、寝顔を眺めようとしたら、…目が合った。

「ひゃ！…アキト様起きていたの？」

「お前こそ男の部屋に夜這いか？」

「あ、アキト様の寝顔を見たくなくて…」

「そうか…なにか不安でもあるのか？」

いや、それで納得するのはおかしいです！でも、どうせなので…。

「アキト様、私だけやるのがなくて…それで、ずっとただアキト様の側にいるだけなのが、不安なの」

「そうか…、デートも文官の所長に付いて忙しそうだしな、寂しいか？」

「…はい」

「そうか、正直な所お前の能力はかなり役に立つ。仕事なんていくらでもある…」

そう言つて黒沢明人は上半身を起こした。上半身裸！

「だがな、お前の能力は、危険なんだ。お前はまだ若い。敢えて今使うことは無い。今はまだとっておけ。それにその能力は他人を疑心暗鬼にさせる可能性がある。あまり知られない方が安全だ」

「私もう多分16歳位だよ」

「まだ、若い」

「魅力も無いですか？」

「子供に欲情するほど飢えては無いな」

「アキト様には欲求は無いですか？」

するとアキト様は、宙を見上げ、ふっと笑った。

「無くなつたかと思つていたのだが、それでも無いな。旨いものを食べたい。今はそれだけだ」

「夜伽は必要無いですか？」

「ああ、まあ、なんだ、取り立てて必要とは思っていない」

アキト様にしては迷いのある言い方だね。脈有り？どおなの？

「わ、わたし、は必要なアキト様が好きです！」

アキト様は、滅多に見られないだろう、キョトンとした顔で私を見ている。

「…努力しよう」

真面目すぎだわアキト様！

今日の所は退散するわ。

「お休みなさい、アキト様。私はもう少し寝ます」

「ああ、お休み」

アキト様の夜は遅く、朝はとてとても早い。朝の3時にこっそり忍び込み、寝顔を眺めようとしたら、…目が合った。

「ひゃ！…アキト様寝てないの？」

「お前こそまた男の部屋に夜這いか？この時間帯は言い訳できないぞ？」

「え、あ、夜伽は必要無いですか？」

「また、そんなことを…必要ならもっと早く呼んでいるのだがな」

「そうなんですか…」

するとアキト様はベッド脇のサイドテーブル上の蠟燭に火を灯し、すくっと起き上がって、上半身裸！な格好で、部屋の隅に歩いていつて何かを持ってきました。

ガラス製の高級そうな透明なグラス2つに、何かの液体の入った透明な瓶。

「ガラスは、特殊技術部に作らせた透明なガラスだ。この液体は、グルース王国の名産品の酒だ。作り方は秘密らしいが、同じ物を作る方法は知っている。いや、これ以上だ。俺の世界ではウイスキーと呼ばれていた。麦芽酒と同じ大人の飲み物だ」

アキト様は、テーブルに2つのグラスを並べると琥珀色の液体が注ぎこみ、蠟燭の灯りに妖しく輝く、グラスを1つ片手に取って、一

気に液体を口腔に注ぎ込んだ。

そして、目を瞑ってなにかを求めるようにゆっくり嚥下した。

「旨いぞ」

えっと、私も飲めってことかな？大人の飲み物だし…。

私は恐る恐るグラスを手に取り、口腔に注ぎ込み…な！何、これ！
？飲めないよ！なんか熱いよ！

「どうした？」

アキト様が意地悪な表情で私の瞳を覗き込む。

私は、覚悟して一気に飲み込んだ。

キヤー…。熱い！喉が焼けるよ。

「ははは、大人の飲み物はまだ早かったようだな？」

胃が熱いー！

「う、も、もう、アキト様酷いです！」

アキト様の夜は遅く、朝はととてもととても早い。朝の1時にこ
つそり忍び込み、寝顔を眺めようとしたら、…目が合った。

「つい今ベッドへ入った所なんだがな…最早お前の考えていること
は俺には解らん」

「夜伽の時間かなあって思って…」

「酒でも飲むか？」

いやー…！

「今日の所は一旦退散です！」

そうして夜は更けていく…。

第二八話 立場の変遷

ドラゴンの力を借りて魔物の巢窟となっていた森、ワナ・グラープスから魔物が消え、街道の安全性が格段に上がり、また、自治城塞都市ウエルデンの急激な発展に伴って、街道を行き来する行商人の往来が増えた。

これは歓迎することだが…。

黒沢明人は、悩んでいた。それは盗賊団の立場が状況の変化によって対応すべき方針が変わってしまったからだ。

以前の状況での盗賊は、ある意味、自治城塞都市ウエルデンを守る盾であったと考えられる。が、行商人がセリヨン・ハーネスト以外に多く増え、また城壁で町を囲んだ為、入口が完全に1つになり、亜人間の誘拐がなくなり、少なくとも良心的な行商人が増えた為、彼らを守ることもウエルデンの義務となりつつある。

セイフ・ハーグマンに尋ねたところセリヨンから聞いた話として盗賊団は200人程度の大所帯であるらしい。

しかし、それだけの大所帯を切り盛りする為には、副業が必要だろう。何で稼いでいるのか？

その問題に関して、セイフに尋ねると、

「傭兵団として130人程出兵しているようです。それと、彼らの頭領は見た目は人間ですが亜人間です。そういう理由もあってこの町から誘拐された亜人間を連れ帰ってくれたり、少ないながら交流もあります」

との話だった。

ということとは実質70人程度。更に女子供を除くとどこまで減るか？討伐は容易だろう。だが過去の関係を考えると乗り気になれない。「できれば穏便に鞘を収めて貰いたいのですが…」

セイフの本音だろう。黒沢明人は、彼女の感情は自分よりも強いだろうと想像した。

「ところでセリヨンはなんで盗賊団のことを知っているんだ？」

「彼らとも商売しているようです」

「なるほど。次ここを訪れるのは二ヶ月後か。彼を仲介した方が良さそうだな」

「どうするんです」

「傭兵稼業を捨てて本業になってもらおう」

「それは良い案ですね！」

「まあ、実際そう簡単に行くとも限らないが…、セイフ、事務仕事は暫く任せる、悩んだ場合は相談してくれ。暫く現場に出て陣頭指揮を取る」

「は、はい」

その日より黒沢明人は、不眠不休で様々な陣頭指揮を取った。

算盤の製作、教師への教育から、兵器の開発、兵士の訓練、など様々なだ。

特に兵士の訓練は陣頭指揮をとっていたブロン・バリエンスと合流して、徹底的に鍛え上げることにした。

「ブロン、どんな感じだ」

「そうでやすね。そこそこ使えるようになりやしたが、まだまだひよっこですな」

黒沢明人は、朝から訓練を眺めていて結論付けた。

「息が上がるのが早いな。まずは体力をつけなといけないようだな」

「なるほど、そうでやすね。ちょっと集めますか」

「ああ、頼む」

ブロンが大声で、剣を振っている背の高い兵を呼ぶと、彼も何人かの兵を呼び、その兵が更に兵を呼びを繰り返し、またたく間に隊列を組んだ。

「ほう、行き届いているな」

「へえ、旦那の言っていた通りの運用を何度も訓練しやした」

「となるとやはり体力だな。剣技は今準備させている物があるがまだ数が足りていないので後回しだ」

そう言うと、黒沢明人は声を張り上げた。

「諸君、今日からブロンと共に諸君の教官を勤める黒沢だ。」

大体見て回ったが、諸君には体力が足りないようだ。明日から基礎体力を徹底的に叩き上げる。意見はあるか？」

「旦那、実は問題児が三人いるんでや……」

ブロンが何かを言いかけている言葉の上から3人が声を上げ、集団の中から現れた。

「意見は無い。だが俺達3人は自分より弱い教官の下には付かねえなるほど、ブロンが何を言いかけたのか解った。」

「面白い、でどう判断するんだ？」

「俺達三人の中から一人を選んで勝負してもらおう。俺の名はリーハ・グレスデンだ」

リーハ・グレスデンは、鍛えられた体と精悍な顔立ちの年配者だ。年齢は35から40歳くらいか。

「俺の名は、リック・ソーセルだ」

リック・ソーセルもリーハ・グレスデン同様だが年齢は若干若い。30位だろう。

「最後にわしじゃ、わしの名は、ロデ・カッテンじゃ」

ロデ・カッテンは、初老だろうか、だが年齢に似つかわしくない、鍛えられた体がただの老人では無いということを物語っている。

「3人か、よし良いものがある、ちよつと待て。ロデン、技術部（特殊技術開発部）に行つて、負荷放電ソードを4本持ってきてくれ」
黒沢明人は、自分の後に控えていた武官のロデン・カーナルに指示を出した。

30分程でロデン・カーナルが4本のロングソードを持って帰ってきた。

ロデン・カーナルは黒沢明人を見た、黒沢明人は黙って頷いた。

「この剣は、一定以上の負荷を受けると一瞬電気を放ちます。喰ら

「つたら間違いないか気絶するか動けなくなります」

「そう言うと、ロデンはリーハ、リック、ロデと黒沢明人にロングソードを渡した。」

「三人の中から一人だったな」

黒沢明人の間に、リーハが答えた。

「ああ、誰を選ぶ？」

「後でいちやもんつけられるのは嫌いだな。三人同時に相手をしてやるさ」

「くっ馬鹿にしゃがって、リック、ロデ翁、手抜きは無しだ。後悔させてやるさ」

「くくく、面白い、これで負けたらわしら大恥じゃ。アキト殿の噂を聞く限り侮れんしのさ」

ロデが愉快そうに肩を震わせた。

そして最後にリックが言った。

「ところでデンキ（電気）って何だ？」

第二九話 ライトニングソード(前書き)

全50話を目指しているのだけど、このペースでは…
う、適当に付き合って下さいXD

第二九話 ライトニングソード

四人は、三人対一人の2つに別れ、5mの距離をあけ対峙した。

「さて、まずは俺から行くぜ！」

リーハ・クレステンが剣を大胆に反り上げた、しかし、その瞬間、目の前に黒沢明人がいた。何が起こった、信じられない、と思いつつも体が勝手に腕を引き締め、二人の間に剣を挟み込めたのは修練の賜物だろうか、しかし黒沢明人は、リーハの上段に回し蹴りを放ち、リーハは文字通り吹っ飛んだ。が、その時、リックの剣が上から落とそうとしていた。黒沢明人は、剣と体の重心を移動し、揺れるように剣を避ける。

ロデは後か？視界の外にるのが気に食わないながら、取り敢えず目の前のリックを横に薙ぐ様に剣をふるった。リックは咄嗟に何とか剣で弾こうとしたが、バチツツという音と青い光が瞬き、それとは関係無しに吹っ飛んでいた。

黒沢明人は、リックに放った剣激をそのままに、ワンステップ後退しながら体を捻った。目の前には剣の突先が迫って見えた、それを剣で横殴りに弾く、またバチツツという音と青い光が瞬いた。

黒沢明人は、剣の遠心力に力を借りて体を一回転すると、先手を取ってロデ・カッテンの胸をアーマーごと蹴り上げた。ロデは空中で回転して、足から地面に落ちた。

「ほう、これが電気かよ、体に当たったらどうなるのか試してみたい気もするのじゃが、順番的にはお主に席を譲ろうよ、アキト殿」その間にリーハとリックが立ち上がり、二人とも頭に手を当てた。

「くそ、馬鹿力め、骨が折れているんじゃないのか？」

リーハは吐き捨てた。

「まいったまいった。3人先手先手で行って勝てない道理は無い。と思っていたが先手を取られると、ヤレヤレだな」

「さっきのは何だったんだ？」

「全身の筋肉を使って、突出した片足のかかとを中心に高速に踏みこんだ、といった感じじゃが…初めて見たのう」
とのロデの言に、

「人並みの力で戦っているんだ。あまりがっかりさせるなよ。ちなみにあれは縮地という業だ」
と黒沢明人。

「なるほど、主は敢えて人の域で戦ったということか…、だが、まだまだじゃ、リーハ、リックよ、では参るぞ」

3人は、じりじりと黒沢明人に近づくと、だが縮地を警戒して、リーハ、リックは慎重だった。

ロデは、はなから近距離戦に持ち込めば縮地も意味は無い。と考え、黒沢明人に対して、潔く一気に間合いに踏み込んだ。

カンと剣同士がぶつかる音と、電気が弾けるバチっという音に2回、その間に素早くリーハ、リックが参戦した。

「これは本人達には分からないですが、指導試合でやすね」

後に控えていたロデン・カーナルが今はブロンの横で観戦している。

「指導試合ですか…。三人相手に流石ですね、アキト様は」

「しかも相手は手練でやすしねえ」

もういつから戦闘を始めたのか記憶が無い、一瞬、一瞬に全身全霊で戦わなければ、三対一だろうと勝てないだろう。

ロデは考えた。リーハ、リックの腕では叶わない。わしとて例外じゃないだろう。しかし、何とか背後に立てれば…

しかし、3人の攻撃、動きは黒沢明人に完全にコントロールされていた。

イラついたリーハが全ての力を一気に剣にたくし、最高の突きを放った。「いかん！」とロデが警告を発する前に、半身を動かされてスカされ、バランスを崩したところを背中に一撃、バチンと電気が飛び散って、リーハは動かなくなった。

リックとロデは顔を見合わせた。

ロデは左右に首をふる。

「はあ、とリックは深い息を吐いて、座り込んだ。」

「負けだ負けだ。」

わしらの負けのようだしじゃの。アキト殿は、まったく力を使っておらんようだし…」

「いや、お前達も息が上がっていないところは中々關心される。どうだ良い仕事をやるう。」

今から全員で城壁の上を走ってもらう。遅れた奴は、その剣で電撃だ」

そしてブロンが大声で、その旨を伝えた。ほぼ全兵の952名全員の頬が引き攣る。

ロデ「わしら悪役じゃのう…とほほ」

リーハ「後で絶対報復があるぞ…」

リック「結果よければの方向へ…」

そして三人そろって大きなため息をついた。

3人と別れブロンの場合へ戻ってきた黒沢明人は、開口一番こう言った。

「この剣はなかなか使えるぞ」

「一体どんな剣なんでやすか？」

「裏山の採掘を行ったおり、フレックという結晶が出てきたのだが、軽く電圧を加えた電荷クアック石で圧電効果を出せた。今のところ1000回程放電できるようだ。まあ、放電できなかったところでロングソードに違いは無いしな。」

フレック1つでクアックを100個電荷を加えることができる。

最初は俺の一撃だったのだがな」

「以前言っていた正式装備ですか？」

「ああ、そうだ」

「弓隊にも新しい装備を用意させてある」

「フエイ・アルディオーネ嬢も大変なプレッシャーでやすな？」

「結構楽しんでるそうだよ」

「そう言えば好戦的な性格してやすからなあ。考えてみれば、それも有り得るえやすな」

第三十話 フェイの高揚（前書き）

う、このペースでは全50話は無理っばい…（汗

第三十話 フェイの高揚

フェイ・アルデイオーネは、興奮していた。

それは、500人長のフェイが指揮する部隊に対して新装備が納入されたからだ。

黒沢明人曰く「クロスボウと呼ばれるものだ。射程は短いが威力はかなりのものだぞ」だそうで、フェイと500人からなる遠距離攻撃部隊の100人長5名は、試し打ちの結果に驚愕していた。

矢は短いが、150メートルの近距離では、まっすぐ飛び、そしてプレートメールにも深々と突き刺さっていた。

ただ、次回発射するための装填に時間がかかるのが欠点だ。

そして、それに対して対極にあるロングボウも納入された。これも素晴らしく射程500メートルを超える。

黒沢明人の語った戦略は、こうだ。

まず、ロングボウでダメージを与える。次にロングボウを恐れて、前に出てきた的にショートボウで攻撃し、突っ込んできた敵には、クロスボウで狙撃する。という戦略だ。

そして0距離では、槍兵で対処し、突破されたら重装歩兵部隊に任せると。

フェイは、部隊を分けることに決めた。おおまかに言って第一部隊は、ロングボウ300人部隊。第二部隊は、クロスボウ200人部隊でショートボウとの兼用という感じだ。

黒沢明人とブロン・バリエンスは、第一訓練所にて行われているクロスボウの訓練が行われている様子を探りに行った。

二人に真っ先に気がついたのはフェイだった。

「どうだ、訓練の結果は？」

黒沢明人が質問すると、フェイは明るい表情で答えた。

「エルフ族をメインに部隊構成したのですが、エルフ族は元々弓が得意です。しかし、それにしてもクロスボウは、画期的ですね。一

瞬で命中するのです。それも狙った通りに！」

「ほう、まずまずだな。ところで、ロングボウ部隊は？」

「ロングボウ部隊は、都市の中では訓練できませんでしたので、外で訓練しています」

「ああ、尤もな話だ。そちらの方はどうなんだ？」

「ちょっと時間がかかりましたけど、何とか様になつてきました」

フェイの元を離れた黒沢明人とブロンは、歩きながら歩兵の練度について話し合った。

「スタミナは、一ヶ月程で劇的によくなりやしたね。ライトニングソードを正式支給されてからは、剣技の訓練をしているのですが、これまた劇的に良くなつていやす。旦那の3人1組の相互視界カバ―にも慣れたようで、全く問題無いでやすね」

「体に覚えさせているからな」

黒沢明人は、珍しくふつと笑った。それも見たブロンは、旦那にも感情があるんでやすね、と密かに安堵した。

それは黒沢明人自身自覚の無いことであつたが。

気がついたら2ヶ月のも日々が過ぎていた。

大きなキャラバンを率いてセリヨン・ハーネストが凱旋したのだ。セリヨンの今回の行商では、竜の鱗は売っていないのだが、チーズと塩の売り上げが好調で、密かに樽の中に大量のイリート金貨が詰め込まれてた。尤もこれだけの商売は、デルファリン商会を営むリファ・デルファリンの協力のおかげであつた。

自治都市役所の執務室に着くと、今回持ち込んだ収益を報告した。

「イリート金貨で8794枚です。後、今回は特別に軍馬を1000頭ご用意しました。一頭イリート金貨10枚です」

黒沢明人は、同室にいるセイフ・ハーグマンに同意を求めた。

「セイフ、軍馬が必要なのだが、イリート金貨が1000枚必要だ。問題無いか？」

「あ、はい。恐らく問題ありません」

「恐らく？」

「ベック・トリスタさんが、予定より予算を超過してまして…」

「ああ、新自治都市役所建設か…、そういえば完成が遅いな。」

「まあ、軍馬優先ということ、100頭購入しよう。それはそうとこれからの予定は？」

「そうですね、広場と、例の新自治都市役所建設現場のベック・トリスタさんの所へ商品の受け渡しに行く予定ですな。」

「それからは、特産品を購入する予定です」

「なるほど、ちょっと相談があつてな、予定が済んだら相談したいことがある」

「わかりました。明日の朝にでも」

「ああ、宜しく頼む」

「所で余談だが戦争はどうなっている？」

「どうやら、条約を結びウエルマル帝国が撤退を始めたようです。内政でなにかあつたのでしょうか」

「そうか、となると傭兵上がりが戻ってくるということか…。これは好都合だな。」

「セリヨン、すまないが暫くこの町に滞在して貰えないだろうか？」

「無論構いませんよ。何かのおやくに立てれば幸いです」

「助かる」

第三一話 順調也(前書き)

昨日までにアップしたかったのだけど、ちょっと忙しくて、遅くな
ってしまった。

第三一話 順調也

黒沢明人は、ボロい執務室でセリヨン・ハーネストと向かい合った。二人が椅子に座りると床がギシギシと嫌な音を立てた。しかし、もうここも限界だなと半ば呆れかけ、ベック・トリスタを呼びつけ、何時新しい役所ができるのかと詰問したくなった。

暫くして秘書のリーズ・ミステスがお茶を運んできた。

「秘書ですか。ここもらしくなってきましたね」

「ああ、しかし、どんどん仕事が増えていますが、人手が足りないのが現状でな。売り手市場ということもあつて賃金が日増しに上がっている具合だ」

「なるほど、今、人口は何人ぐらいでしょうか？」

「2万2千人といったところか。だが、最近ネファール金貨の煽りを喰らつて、財産が目減りし、経済が急激に悪化することもある。毎月約百人単位で人口が増えている。まあ、この国に誘導するように仕掛けたのは、リファ・デルファリンだな」

「ほう、彼女が。しかし、ネール公爵家が看過するのでしょうか？」

「その辺はうまくやっているようだ」

「ところで、今回はその話で？」

「いや」

黒沢明人は、お茶で口を湿らせた。

「エディ・グラープスの野盗をこの都市に迎え入れたい。それが不可能ならば討伐しなければならぬ」

「なるほど、要するに前者の使者を望んでおられるのでしょうか？」

「そうだ」

「いいでしょう。私が使者となりましょう。私としても彼らを討伐して欲しくないですし」

「それに関しては同意見だ」

「報酬は、月デューク銀貨十枚で詰めてくれ。現在のこの都市の兵士と同じ高給だ」

「わかりました。その条件を土産にしましょう」

暫くしてセリヨンが使者として出立した後、下水工事の進行状況を確認することにした、黒沢明人は、現場責任者のリース・カルオンの元を訪れた。

「下水工事の進行状況はどんな感じだ？」

「実のところ、近くに川が無いので、下水処理に悩みました」

黒沢明人は天井を仰いだ。失態だ。何故気付かなかったのか…。

リースは話を続けた。

「そこで、グームを数十頭購入しました。グームは人間の糞尿を食べて、栄養価のある臭いのしない糞を排泄します。

その糞を農家に格安で売る予定です。下水の管理、運用はその資金から出す予定です。あと、水が必要だったので、結果的に上水道の整備も必要でした」

黒沢明人は感嘆した。自ら考えて、最適な計画を立てるのは、受身な自治城塞都市ウエルデンの住人の大きな問題点であった。

その意識が変わったのか？

「実のところ、ベック・トリスタさんの知識を借りました。アキト様はお忙しいので」

「ほう、ベックか。思ったのだが、彼程の知恵者であればどんな国でも引く手あまたではないのか？」

「彼は、死刑になりかけてこの町に逃げてきたと言っていました」

「面白い過去だな。まあ何れにしても問題無いな。工事はあとどれくらいかかりそうだ？」

「ほぼ完了し、運用テスト段階です」

「そうか期待している」

「は、有難きお言葉です」

次に黒沢明人はデイト・ウェルヘンの元へ訪れた。

黒沢明人が研究室に現れると、デイトは目ざとく黒沢明人に気づいて、走ってやってきた。

「どうだ。研究の方は」

「はい、カスタードクリームの開発に成功してから、かなりバリエーションが増えました。」

同時にカラックスの葉に抗菌作用があると解り、粉末状にして生クリームとカスタードクリームに混ぜることによって、日持ちするようになりました。少々苦味があるのですが、それが逆に良い風味を出しています」

冷蔵庫の無いこの世界において日持ちするというのは重要なことだった。肉を香辛料を使うことによって日持ちさせるのと同じ話だ。

「試食しますか？」

「ああ、ごちそうになるうか」

暫くして、黒沢明人の前に1つの皿が置かれその上にケーキが乗っていた。切られた断面を見ると、フルーツと生クリームがスポンジの間に挟まれていた。以前のケーキでは、パサパサした感覚があったのだが、それが完全に改良されていた。一口口を含む。甘さの中にほのかな苦味。

「美味しいな」

黒沢明人は言葉少なに素直な評価をした。

「ウェルマンに近々店をオープンする予定なの」

「これならうまくいくだろう。必要な予算は早めに出しておけよ」

「あ、そうね。忘れてた」

黒沢明人は思った。実のところ、こうまでうまく町を発展させることに自信があった訳では無かった。

だが、全てが順調に進んでいる。

黒沢明人は、人前では決して見せない安堵の息をついた。

第三話 マルフのゲンシユル（前書き）

お待たせしました。

ちよつと短いかも知れませんが、ご勘弁下さい。

では、楽しんでもらえると幸いです（短過ぎるっちゆうのー！）です。

第三二話 マルフのグンシユル

セリヨン・ハーネストは、エディ・グラープスの野盗と交渉を行なう為に野盗の根城に訪れていた。

野盗の正式な名は「マルフのグンシユル」と言う。マルフ・フィールフェンドを族長とし、グンシユルはこの地方の斧のような武器の名である。

セリヨンが幌馬車で訪れると、大きな門が開かれた。

「よく来てくれた、セリヨン。昨日傭兵稼業を終えた仲間が戻つてな。色々必要だったんだ」

「それは来た甲斐がありました」

入口でそんなやりとりをしていると、颯爽とマルフが訪れた。粗粗しく切られたアツシユ・ブラウンの髪に、筋肉質で引き締まった体。彼は見かけでは解らないが、亜人間らしく、信じられない怪力の持ち主だと言われている。本人は自慢している訳でも無いので、セリヨンには真実かどうかの程は解らないのだが、恐らく真実だろうと思われた。

「マルフ殿、ご無事でしたか」

「ああ、仲間も誰一人欠けてない。というより身寄りの無い戦士が23人新たに仲間に入ったちゆうぐらいや」

「大所帯なのに大丈夫なですか？」

「まあそうやな。最近は何道も抜ける良い鴨がいるという話聞いててな、多分大丈夫やろ」

「なるほど、…実のところ、今日参ったのはその話についてなのですが。自治城塞都市ウエルデンが最近急激に発展していて、豊かになりつつあることはご存知ですか？」

「そうなんか？いや、わいは暫く傭兵頭をしていてな。ここにはおれへんかったしな。いや、それは知ってるか…、そうやなあ、報告は受けてない」

「なるほど。実は今は、アクト・クロサワという人物が総指揮を取って町を改革しているのですよ。今日は彼からの依頼で訪れた次第です」

「へえ、アクトいうんか？そいつは強いんか？それとも頭が良いんか？」

「率直に言つて両方ですね」

「わいよりもか？」

「ドラゴンと戦い、退けられますか？」

「たぶん無理やな…。アクトちゅう奴はできたんか？」

「はい」

「そいつは凄いな。だんぜん興味湧いてきたで！で依頼つてなんや？」

「軍隊に編入してもらいたいと」

「へえ、断つたどうなるんや？」

「討伐すると。ただ、彼はその選択肢は取りたくないようです」

「んー、まいったなあ。しかしなあ…、で、ウエルデンの軍隊って何人なんや？」

「千人ですね」

「よし分かった。決を取ろう。ちょっとまっててや」

そういうと、マルフは砦のテラスに立つて周囲を見渡した。仲間達が杯を上げている風景はいつものことだ。

こいつらが仕官するタイプかいな、そう思いつつ（というのは後に語られた話なのだが）叫んだ。

「お前らー！よう聞け！」

そう叫ぶと、皆がテラスに目を、向けるのを待って、更に叫んだ。

「わいらがウエルデンに新しく立つアクトいう奴が、わいらを軍隊に招く言つてる！断つたら討伐つちゅう話や。」

お前らの意見を聞きたい！

今のまま独立して楽しくやるか、軍隊に入って規則に縛られるかや！

わいが右手を上げたら自由を取る奴は声を上げる！軍に入ってもいい言う奴は左手を上げたら声を上げる！」

そいとうと、マルフはゆっくりと右手を上げた。

ウオオオっ！！！

と全員が叫んだ。

マルフは、今度はゆっくりと左手を上げた。

皆それぞれ探るように顔をみ合わせている。

「解ったで！戦争や！戦場から帰って来たばかりで申し訳あらへんが、勘弁してくれ！30人長集まれや！」

夜が開けて、

「じゃあ、宜しく頼んだで」

とマルフ。

「了解しました。私はどちらか一方を切ることができないので、何も言えませんが…。せめて、ご無事で」

「ああ、問題あらへん」

マルフからそう受け取るとセリヨンはウェルデンへと引き返した。

途中、街道脇に馬車が止められており、気になって声をかけたら、

「いや、気にしていただいてありがとうございます。問題ありません。連れが馬車に不慣れで伏せてしまっただけです」と返ってきた。

セリヨンはよくあることとして気にせず出発することにした。

その馬車の中には、リーハ・グレスデンとリック・ソーセルとロデ・カッテン、そしてリーナ・サーリエントが乗っていた。窓は締切、うす暗い闇の中でリーナは何かを探っていた。リーハ、リック、ロデはただリーナの護衛として派遣されただけなので自分たちが何をしているのか把握していなかった。ロデが「お嬢ちゃんの能力は何かのう？」と訪ねたら、「アキト様から誰にも言っちゃダメだつて」とすげなく返ってきた。結局自分たちが何をしているのかリーナしか知らなかった。

「うぶ。もついいや。帰ろう」
リーナがそういうと、3人はゆっくり息を吐いた。意味も解らずじ
っとするのは辛いことであった。

第三三話 余談 ゴーフェン・エルセンドルの契約（前書き）

正月で絶対太ったよなあと気が気でないこの頃。
新年ですね。今年も宜しくお願いします。

第三三話 余談 ゴーフエン・エルセンドルの契約

私は画家であり、建築家（尤も、ベック・トリスタ殿程聡い訳でもないが…）であり、天文学家であり、数学の教師でもある。これらの分野には一本の芯があり、突き詰めればある意味全て同じである。知り合いの錬金術師にそれを話した時、彼は「だからお前の科学は底が浅いんだ」と言つてのけた。底が浅い深い狭い広いを体積で表現するならば、体積が同じであれば形がどうあれ全て万事問題無し、という極端な意見もあるうかと思うし、単に彼は無知なのだと言ふこともできたかも知れない。だが、まあそんなことは些事な事である。目下私の頭は、広大な牧草地の何処にいてもおかしくない、つまり、自分が何処に居るのか解らない位広すぎて、どこに向かつて良いかも解らない、とでも言えば良いのか的確な言葉が出てこないのだが、とにかくそんな状態に置かれている。何故私がこんな事態に陥つたのか？それは明人様の入れ慈恵であつた。彼は私にこう言つた。

「この世は真っ白いキャンバスだ。自由に書けるが、逆にどこから手をつければよいのか悩んでしまうな。ところで君にはちよつとした論理体系を構築して貰いたい。なに、ちよつとしたお遊びだ。結果を求めない。しかも給料を出そう」

私こと、ゴーフエン・エルセンドルは、この日悪魔（アキト様）との契約により人知を超えた世界に放り込まれることとなつた。

「ゴーフエン、この世界では一般的に十進法が使われているようだが、これは人の指が両手合わせて十本あるからだろう」

「十進法と言いますと？」

「簡単に説明すると、0から始まり9の次が繰り上がることだ。つまり、9の次は10になるだろう？」

「なるほど、それに敢えて名前をつけるとうことは、他の進法が絡

んでいるのですか？」

「鋭いな。では二進法は解かるか？」

「今の理屈でいいますと、1、2…1の次にくり上がるのですから…えっと、0、1、10、11、100 といった感じでしようか？」

「流石物分りが早いな、ではこの二進法にはどんな特徴があ？」

「特徴ですか…、ああ、これは…0と1の二つの状態を表現できるといことですか？」

「そうだ、光と闇、上と下、有りと無し、まあ色々あるな。それらの状態を複数連ねることによって、数を表現できるといことだ」

「それは…興味深いです、ね…」

その言葉に満足気にアキト様は頷き、紙とペンを取り出した。そして更に興味深い話を続けられた。

「これに論理和や論理積、否定…という考えを加えると…」

そう言いながら、図を書いていかれる。

「と基本はこの3つだな。この図形は組織や分野といったものある種の表現にも使えるな」

「そう、ですね…。なんとなく分かりますが…いや、ちょっと時間を下さい」

「まあ、ゆっくり考えれば良さ」

アキト様はそう言つと、そつと立ち上がり、琥珀色の飲み物を持ってきて机に置いた。透明なグラス2つも。

「この透明なグラスが高値で売れてね。生産が間に合わない状態だ。酒も売りたいが出荷は何年も先だな」

そう言つて、私の分も注いで頂いた。私は、琥珀色の酒をゆっくり嚙下した。

「うまい…」

今まで飲んだどんな酒よりも強烈な刺激であり、しかし味わい深い味に思わず声が出してしまったのだ。

「そうだろう。一口金貨一枚だ」

「ゲホゲホ！」

「大丈夫か？まあ、なんだ偶には贅沢も良いだろう。私の唯一の楽しみだ」

「はあはあ、そうですね。しかし頭がスッキリしました」

「そうか」

アキト様は満足そうに目を細められた。

「では続きと行こう。先ほどの論理和、論理積、否定を論理演算子にすると、論理演算が可能になる。

例えば、論理和は……」

と紙上に0と1を書いていかれる。

続いて、

「論理積がこう。否定が最も簡単でこう、だ」

「なるほど興味深いですね。しかし、これはどのように使われれるのでしょうか？」

「今の段階ではまだ存在意義を感じないだろう。では次に論理回路を説明しよう。論理和、論理積に2つの入力と1つの出力。否定に1つの入力と1つの出力を用意し先ほどの演算を行うとするならば、どうなる？」

「論理和、論理積は、2つの入力ですよね。これはこの二つをそれぞれ計算するとすると、出力は必然的に1つ……。なるほど仕組みは解りました」

「では、…この様な論理回路はどうなる？」

そう言つてアキトさまは、図を示された。

「解りにくいかな、では同じこれを2つ繋げよう。解かるか？」

アキト様をがっかりさせたく無い、その思いが私を支配し、焦らせた。かつて無い程、頭は回転し、そして気づいた。

「…加算ですか？」

「正解だ」

私は、ふうと息を吐いた。

これが悪魔（アキト様）との契約の人知を超えた世界への入口だっ

た。

その後も教えを受け、私は、これに無限の可能性を見出したのだ。筆舌に尽くし難い新しい世界が広がり、私は自分が何処にいるのか位置を見失ってしまった。アキト様の真っ白なキャンパスの話を出した。そういうことか、と。

後の大発明家、ゴーフエン・エルセンドルの契約の日であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9795v/>

並行世界のディストピア

2012年1月3日02時07分発行